使い魔はGALAXY

スライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
使い魔はＧＡＬＡＸＹ

【Ｎコード】
Ｎ３９０４Ｙ

【作者名】
スライム

【あらすじ】
ヴィントレーゼ魔術学院で落ちこぼれの少女、リーズ・アンクティルは使い魔の召喚に立場の逆転を賭ける。だが、召喚して出てきたのはどう使役すればよいのかまるで分からない四角くて薄い箱型の何か。それは異世界でスナガワトオルという名の男が持つケイタイデンワという代物だった！　圧倒的な高精彩を誇るディスプレイと、処理能力の高いデュアルコアＣＰＵを搭載したスマートフォン、ＧＡＬＡＸＹが今、異世界で火を吹く！？

プロローグ

春の柔らかい陽射しに包まれる中、リーズは帆船からその島に降り立った。
潮の匂いを含んだ風に、黒い広つば帽子が飛ばされないよう手で押さえる。服の上から身に着けている広幅の黒マントが、風に煽られてバタバタと音を鳴らした。

今日の天気は雲一つ無い快晴。
空に太陽の光を遮るものは一切無く、リーズの立つ位置から遠目に見える塔や城のような建物を照らしている。
遠くから眺めている状態でも、それらの全容を視界に収めるには、見上げる必要がある程の大きな建築物。リーズがそれらを、珍しそうに眺めていると、リーズに続いて船から降りてきた少女が、その隣に立って弾んだ声を上げた。

「やっと着きましたよ。ここがヴィントレーゼ魔術学院ですか～。これからの六年間、この場所で私達は過ごすのですね」

褐色の肌をした白髪の少女が、親しげにリーズに話しかける。
この少女とリーズは、魔術学院の新入生を大陸からこの島へと運ぶ船の中で、偶然に同室になったのが初対面だ。
まだ出会ってからさほど日数も経っていないというのに、このエルヴィという名の少女はやたらとリーズに懐いていた。

リーズにとっても、彼女の陽気な性格は眩しくもあり、好ましくもある。
口数の少ないこんな自分の何処が気に入ったのか不思議だったが、エルヴィはリーズにとって初めての友達だった。

とある理由によって、リーズはこれからの学院生活に様々な不安を抱えていたのだが、これは幸先がいいんじゃないかと思う。

リーズが感慨深げに学院の外観を眺めていると、エルヴィは堪えきれないといった様子でリーズの手を掴み、学院の中でも一際大きな建物を指差した。

「さっき船員の人に聞いたのですが、丁度もうすぐあそこでAランクの試合が行われるそうですよ！　リーズも一緒に見に行きましょう」

エルヴィはリーズの返事を聞く前に、その手を引いて駆け始める。

それに為すがまま引っ張られ、リーズも足を動かした。

リーズもその試合は見ておきたかったので、抗議の声は上げない。むしろ、リーズの目的の為には見て置かなくてはならなかった。

（私はこの学院で成すべきことがある）

初めて友達が出来たことで浮かれそうになる心を、リーズは自分が此処に来た理由を思い出して引き締める。

リーズはエルヴィに手を引かれながら、Aランクの試合が行われるという巨大な建物を見据えた。

ヴィントレーゼ魔術学院。
それは世界中の魔術師の見習い達の中から、学院が規定した一定の水準以上の魔力を持っている者のみが集う学舎。
そこの卒業生は各国でも優遇され、将来が約束されていると言っても過言ではない。
特に学院で定められているランクの最高位であるAランクに達した者は、いずれも多大な影響力を持つ地位に就き、各々の国で歴史に名を残す偉人となる者が多かった。

その理由は、この学院でのみ学ぶことができる召喚術にある。
学院が規定する魔力量を満たした者だけが扱えるその魔術は、狭間の世界と呼ばれる異界から一体だけ召喚獣をこの世界に呼び寄せ、使役できるというものだ。

召喚獣の力を得た魔術師は、他の魔術師とは一線を画す力をその身に宿す。
その特別な魔術師達の中でも、さらに一握りの実力者と言われるAランクの者同士の戦いが、今リーズの眼下で行われようとしていた。

この島の中央に位置する場所にある、巨大な半球型の屋根をした建築物。
学院の関係者からは闘技場と呼称されるその建物の観客席で、リーズとエルヴィは眼下に位置する試合場を見下ろす。
地を揺るがすほどの歓声に包まれながら、その試合場では二人一組の選手が四人、左右に分かれて向かい合っていた。

その四人の丁度上空には、観客達にその戦いの詳細が分かるよう、大規模な幻影魔術によって試合場を映し出している。

その映像を見て、エルヴィは感嘆の声を上げた。

「ふわぁ～、凄いですね…。あんな魔術、初めて見ましたよ！」

「私も」

「それに、凄い観客の数です！　人の声って一杯集まると地面が揺れるんですね～」

「うん」

「いきなりAランクの勝負が見られるなんて、私達は運が良かったですね」

「よかった」

リーズの素っ気なさそうに聞こえる返事に構わず、エルヴィがはしゃぐ。

エルヴィには、まだリーズが抱えるもののことを話していないのに、気を悪くした様子もなくリーズに話しかけ続けた。

そのことを不思議に思いつつも、リーズなりに懸命に声を出してエルヴィに応じる。

そうしている内に、試合の開始を告げる音が闘技場に響き渡った。と同時に、試合場にいる各々の召喚獣が眩い光を放ち、それぞれの召喚主へと吸い込まれていく。

その光は召喚主へと移り、その全容を光で覆い隠した。

召喚獣と、その主の融合。

それによって召喚主は、使役する召喚獣の特性によって様々な力を得る。

やがて選手の体から光が収まると、真っ先に二人の人間が前に飛び出し、衝突した。

片方は、体の所々に赤い鱗が見え隠れする、頭にドラゴンのような骨の角を生やした女。

片方は、甲殻類のような漆黒の皮で体の節々を覆い、悪魔のように目を金色に輝かせた男。

召喚獣との融合によって、二人の体はそれぞれの召喚獣の影響を受けた姿に変体していた。

両者共に、常人を遥かに凌駕した身体能力によって、激しい肉弾戦を繰り広げる。それも、ただ殴り合うのではなく、二人とも体を動かしながら謳うように呪文を唱えていた。

美しい旋律のような声を伴って、洗練された体術を繰り広げるその様は、まるで華麗な舞歌を見ているかのような錯覚を起こす。

女が先に呪文を唱え終えると、周囲の地面から何本もの巨大な炎の柱が立ち上り、それぞれが蛇のようにうねりながら、傍にいる女ごと男を襲った。

それに続いて男が呪文を唱え終わり、男の周囲に出現した幾つもの黒い球体が、その炎の蛇を残らず引き寄せて吸い込んでしまう。

女がその黒い球体に囲まれて逃げ場を失ったところで、女の後方に控えていた選手が呪文を唱え終わった。

先程の炎の柱を束ねたものよりも、さらに数倍以上も大きな炎の渦が巻き起こり、男と女がいる場所を丸ごと焼き払う。

その炎は黒い球体を全て薙ぎ払い、男の体を焼くことに成功した。味方の炎に巻き込まれた女は、自身の召喚獣の特性なのか、炎の只中にあってまるでダメージを受けていない。

男が全身に火傷を負わせながら後方に下がり、炎の中から脱出してくると、傍に駆け寄った男の味方選手が、丁度呪文を唱え終わった。
男の体が光で構成された膜に覆われ、その身にあった火傷をみるみるうちに治癒してしまう。
結局、どちらの二人組にもダメージは残らず、戦いは仕切り直しなった。

その一連の戦いを見届けて、リーズが息を呑む。
隣にいたエルヴィが驚愕の表情をしながら、感動とも畏怖ともつかない声を上げた。

「凄いですね……それに、とても綺麗です」
「うん」
「あそこが、リーズの目指す場所なのですね？」
「……うん」

エルヴィの言葉に、リーズは少し尻込みしながらも頷いた。
リーズが成すべき目的は、Ａランクのさらに向こう側にある。
（だから私は、絶対にあの境地に辿り着かなければならない）
リーズは眼下の試合場で続けられる戦いに圧倒されながらも、自身の心に改めて決意と覚悟を刻んだ。

リーズが自身の召喚獣と対面するのは、それから数ヶ月後のこと

である。

第一話

それは窓の存在しない薄暗い部屋にて執り行われた。
その部屋の中央に立つ小柄な少女の唇から、力のある言葉が紡がれる。辿々しく紡がれる呪文が、時折擦れたように乱れるのに合わせて、床に置いてある無数のロウソクの火がゆらゆらと揺れた。

ヴィントレーゼ魔術学院の魔術師にとって、今後の命運を握るといっても過言ではない使い魔の召喚儀式。

産まれながらに声が出にくいという不利な条件によって、学院史上、最悪の落ちこぼれという烙印を押されることを余儀なくされていたリーズ・アンクティルは、その使い魔の召喚に全てを賭けていた。

魔法の呪文は、詠唱を途切れさせると失敗してしまう。リーズはこの召喚魔法で、既に両手の指では足りないほどの数の失敗を繰り返していた。
だが、魔術師一人に一匹までという制限のある使い魔の召喚は、何度失敗してもリスクはない。一度成功してしまえば、使い魔が消えることはないのだ。
だから、魔法詠唱を高確率で失敗してしまうリーズは、その欠点を強力な使い魔の力で補おうと考えたのである。

不幸中の幸いか、リーズは魔力だけは学院史上でも屈指の大きさを持っていた。
だからその魔力が許す限り、ありったけの力を込めて召喚呪文を唱える。
見えない力の奔流が、リーズの長い栗色の髪を揺らめかせた。

そしてとうとう、リーズは召喚魔法を詠唱しきるのに成功する。床に出現した蠢く幾何学模様の魔方陣を確認して、リースは安堵の息を吐いた。

そして、床の魔方陣が眩い光を放出しはじめると、リーズは固唾を呑んでそれを見届ける。期待に膨らむ胸を持て余して、体をウズウズとさせた。

そこに、込められるだけの魔力は込めた。リーズの考えが正しければ、数多くの使い魔の中でも、類を見ないほどの強力なものが召喚されるはずである。

現れる使い魔は一体何であろうか？

この世界で最強の使い魔と謳われるドラゴンか？

それとも、上位の精霊の類かもしれない。

もしかすれば、伝説上の神や悪魔ということも――

そんなことを考えている内に、魔方陣の光が一つの形に収束していき、召喚される者の姿を象っていく。

その予想外の小ささに、リーズは小首を傾げた。

召喚獣とは、大きいもので人の半分ぐらい。小さなものでも膝くらいまでの大きさはある。

だが、今リーズの目の前で収束していく光は、明らかに手の平ぐらいの大きさを象っていた。

そのことに、リーズは何か嫌な予感を覚える。

自分の中で沸き上がりそうなった強い不安を、リーズは首を横に振って払った。

（使い魔の能力と、大きさは関係ない）

リーズは自分にそう言い聞かせて、その光が収まるのを待つ。
やがて完全に光が消え、リーズのいる部屋が元の薄暗さを取り戻すと、それは姿を現した。

その分厚い札のような形をしたそれに、リーズは目を丸くする。
それは静かに床の上で鎮座しており、いつまで待っても動き出す気配はなかった。
反応を待っていても埒が明かないので、リーズは恐る恐るその物体を手にしてみる。

それは、リーズの知らない何かで構成されていた。近くでそれを観察すると、凄まじく精緻で洗練された形状に驚く。

だが、リーズにはそれがどういう存在なのかが全く理解できなかった。
そもそも、それは今だにピクリとも動き出す気配を見せないのだ。
一瞬、何かの間違いではないかとも思うが、召喚魔法を終えた後に感じる繋がりは、しっかりと目の前の物体から感じる。
召喚魔法で召喚した使い魔とその術者は、目に見えない繋がりを持ち、その繋がりでもって術者と使い魔で魔力を共有する。
そしてまた、その繋がりによって言葉や知能に隔たりのある使い魔と意志疎通が可能だった。

リーズは、その手に持つ自分の使い魔と交信を試みる。

『こんにちわ。私の意志、伝わってる？　言葉が分かる？』

その交信は、手に持つ物体を通じて異世界にまで飛んだことを、
この時のリーズは理解していなかった。

＞i34591―4164＜

第二話

俺、砂川透には友達が少ない。

いや、本当は少ないどころか一人もいない。だがこう言っておけば某ライトノベルのように女の子との出会いが沢山あるかもと思った。全然そんなことはなかったが。

顔は人が寄りつきにくい強面であるのに、虎の名前を冠した少女が家に突撃してくることもない。

さらには、生まれつき特定の言葉や状況で声が発しにくくなる症状のせいで、俺はとことん無口だ。そのせいで高校の同級生には怖い人だと誤解されているが、偶然が重なって番長に祭り上げられ、不良が集まってくるなんてこともない。そもそも、今時の私立高校に番長なる地位が存在するはずがない。

正真正銘、俺は友達が一人もいなかった。

これでも高校に入学したばかりの数ヶ月前は、友達を作ろうとあらゆる手を尽くし奔走したのである。

もちろん、部活にも入ってみた。

ずっと友達がいなかったせいかゲームや漫画などの一人遊びに詳しかった俺は、同好の士が集まっていそうな漫画研究部に入部したのだ。

そしたら、次の日に漫画研究部は廃部してしまった。どうやら漫画研究部の方々は、俺が彼らを財布代わりするつもりだと勘違いしたようだ。

元々少なかった部員達が一斉に退部届を出したせいで、残った部員が俺一人になってしまい、さらには顧問まで逃げたので漫画研究部は廃部。

早々に悪い噂が立った俺を受け入れてくれる部はなく、さらには

クラスの人間にも完全に悪人のレッテルを貼られる結果となってしまった。

今ではもう、俺の座っている机の周囲は妙に距離が空いてる状態である。

授業中の教師ですら俺と目線を合わせようとしない。

俺はこの状況に、もう半ば諦めていた。

開き直ってふてぶてしく椅子に座り、今行われている授業に耳を傾ける。

だがこの時、黒板に書いてある問題の解答に、教師が珍しく俺を指名する気配を見せたのだ。

と同時に、頭の中に声が響く。

「じゃあ、この問題を砂が―」

『こんにちわ。私の意志、伝わってる？　言葉が分かる？』

「―あぁ？」

「……佐藤くん、分かるかね？」

「あっ…」

頭の中に響いた言葉に反応して上げてしまった声が、丁度教師を威圧するかのようなニュアンスになってしまった。

それに怯んだ教師が指名する人を変えてしまう。それにより、ますますクラスメイト達に誤解が広がっていく気配を感じた。

俺はそれに軽い舌打ちをする。そして、さっきの声が何だったのかが気になり、左右を見渡した。

周囲に座っている奴らは、俺と目を合わせようともしない。この中に、俺に話しかけてくる奴がいるとも思えないのだが……

『せっかく誤解を解くチャンスになったかもしれないのに……何だ今のは？幻聴か？』
『……幻聴じゃない』

頭の中の声が、俺の思考に返事をする。

……もしかして俺も、某ラノベにあったエア友達というものを習得してしまったのだろうか？　あまりに寂しすぎて頭がイカれたか？

俺が眉間にシワを寄せて頭を抱えても、頭の中の声は容赦なく続いた。

『こんにちわ。私の名前はリーズ・アンクティル。あなたを召喚したのは私』

召喚？　何を言ってるんだこの幻聴は？

『私にあなたのことを教えて。名前があるなら名前を。あなたがどういった存在で、どういう力が使えるのかを私に教えて欲しい』

なんだか妙な質問をしてくる幻聴だ。
その時、俺はふと思った。

こう考えるのは末期症状なのかもしれないが、もしかしたらエア友達というのも悪いものではないかもしれない。
例えそれが二重人格だろうが、違う考え方を持つ人格と会話できるならば、それは立派な友達ではないか！

そう考えた俺は、とりあえず頭の中の幻聴と話を適当に合わせてみることにした。

『俺の名前は砂川透だ。私立の洛城高校に通う学生。使える力は……えーっと……少し絵が得意だ』
『……』

俺の自己紹介に沈黙する幻聴。

もしかして、何か失敗したか？　というか、俺は自分の幻聴相手とさえ親しくなれないのか？

俺は焦って自分の幻聴に呼びかけた。

『おい、沈黙しないでくれ。俺は何か間違えたか？』
『ごめん、言っていることがよく分からなかった。　……さっきから思っていたのだけど、あなたは動けないの？　なぜピクリとも動かない？』
『あ？　何言ってるんだ？　俺は動いてるぞ？』

試しに俺はその場で手を振ってみる。そのせいで、周囲の奴らがチラチラと訝しげな視線を向けてきた。
まぁ、今の俺はどう見ても挙動不審だろう。……よく考えると俺、本格的に頭がやばいのかもしれない。

『私には動いているように見えない』
『あぁ？　とういうかお前、幻聴のくせに俺の姿が見えてんのか？』
『だから、私は幻聴じゃない。　それに、あなたの姿はちゃんと見えている』
『どういうことだ？　お前には、俺がどう見えている？』
『……私とあなたは感覚を共有できる。今、あなたに私の視界を送る』

『あ？　何を言って―』

とそこで、俺の視界が唐突に変化した。
いつもの見慣れた授業風景から、見慣れない薄暗い部屋の中へ。
俺はそれに驚いて、思わず立ち上がってしまった。

すると、幻聴が途切れて俺の視界が元に戻る。
気が付けば俺は、教室のクラスメイト達の視線を一身に集めていた。

「砂川くん、一体どうしたのかね？」

流石に無視できなくなった教師が、俺に声をかけてくる。髪の毛の薄い、見るからに気弱そうな中年の男性教師だ。名前は覚えてない。
俺は、その教師が立つ教壇のほうへと歩み寄った。
教師があからさまに怯むが、俺の声の大きさだと、まとに言葉を伝えるには近寄るしかない。

「……ちょっと気分が悪いんで……保健室行ってきます」
「あっ、あぁ」

俺はその教師が頷いたのを確認すると、そのまま教室を後にした。

教室を出た後、すぐにまた例の幻聴が聞こえてきたので、俺は保健室には行かずに学校の屋上へと来ていた。

ここならば、人に見られることもないだろう。

俺は屋上の端に座り込み、目を閉じてリーズとやらの視界を覗いていた。

そのリーズは今、鏡の前に立って俺に姿を見せながら話している。

鳶色の瞳に、栗色の髪を腰のあたりまで伸ばした小さな少女だ。

外見上はかなり幼く見えるのだが、これでも俺と同い年ぐらいらしい……。

小学生みたいな小柄な体型に、目がクリクリとして大きい童顔をしているせいで、どうも実年齢よりも幼く見られるそうだ。

そんなリーズと話をしている内に、俺はだいたいのことを把握した。

どうやらリーズは、俺の携帯電話をリーズのいる異世界に召喚してしまったらしい。

何かどこかで読んだライトノベルのような話である。普通ならば信じないで自分の頭を疑うところだが、俺の制服のポケットからは確かに携帯電話が消失していた。

俺の使っているＧＡＬＡＸＹというスマートフォンは最新のモデ

ルではないにしても、高校生にとっては非常に高価なものである。最新モデルから一つ前のものを、貯めていたお小遣いやお年玉を使ってやっと買えたのだ。
できれば、返せと怒りの声を上げたいところなのだが、相手の外見が幼いせいか非常に怒りにくい。しかも、それが可愛らしい女の子なのだから尚更だ。ただでさえ人付き合いの経験が少ない俺にはハードルが高すぎる。

そんな俺の内心は知らずに、リーズは手に持っている携帯電話に視界を移した。

『このギャラクシーという道具は一体何ができる？』
『何ができるって言われても……』

リーズの視界を通して、俺は自分の携帯電話を見る。リーズに側面のボタンを押すように指示して、その携帯電話の状態を確認した。
驚くべきことに、電波が繋がっている上に電池の残量が回復している。
これは一体どういう原理なのかリーズに聞いてみると、しばらく時間を置いてから、もっともらしい推論が返ってきた。

『そのデンパというものや、デンチというものが何なのかは分からない。でも、このギャラクシーを通じてそっちのトオルと繋がっていることと、私からの繋がりを通じてギャラクシーと魔力を共有していることで何か影響があったのかもしれない』
『……すまん、何を言ってるのかよく分からん』
『……要するに、私も何が原因かよく分からないということ』

まぁ、お互いがお互いの世界のことをよく知らないのだから、それはしょうがないかもしれない。

とりあえず今は、あるがままの事象を受け入れることにする。
そして改めて、携帯で出来ることをリーズに説明してみることにした。
電波さえ繋がっているならば、できることはいくらでもあるはず……なのだが、それには大きな壁があった。

『……文字が読めない』
『そりゃそうか……って、そういえば何で俺達は言葉が通じてるんだ？』
『召喚者と使い魔は言葉が通じなくても意思疎通ができる。だから、私の言葉をトオルが理解できるようトオルの知っている言葉に翻訳されているのだと思う』
『なるほどな……』

文字が読めないとなると、使用法も限定される。
さらには、次にリーズが言い出した条件に当て嵌まる機能は何もなかった。

『できれば、まずは戦闘に使えそうなものを教えて欲しい』
『戦闘に？』
『そう。それが一番重要』
『……すまん、そういう機能はない』
『……え？』

これは声による会話ではなく、繋がりを通じて直接頭に言葉を送る心話のようなものらしい。だから、リーズが俺の言葉を聞き取れないという事態は起こりえない。
それでも、思わず聞き返さずにいられなかったということは、その事実はリーズにとってよほど受け入れ辛いのかもしれない。
だが俺は、その事実をリーズに伝えるしかなかった。ここで誤魔

化したとしても、すぐに発覚してしまうことなのだ。

『携帯電話は戦いに使う武器じゃない。こっちの世界の生活用品の類の物だ。……正直、そういう物騒なことに使えそうな機能は何も思い浮かばない』

『そんな……』

リーズの打ち拉がれた声が頭に響くと、唐突に視界がぼやける。

それはリーズの目から流れる涙のせいだと気が付くと、俺は凄まじく焦った。

何しろ女の子に泣かれるというのは初めてである。

今回のことに自分に責任はないはずなのだが、何だかとても強い罪悪感に心が圧迫された。

何て慰めればいいだろうか？

そう頭を悩ませてみるが、どんな言葉をかければいいのか皆目見当も付かない。俺の人付き合いの経験値は限りなく低いのだ。

『……泣いてるのか？』

結局出てきたのは、そんな言葉。

その言葉に反応して、リーズの視界が横に揺れた。どうやら首を横に振ったらしい。

分かりづらいが否定の意を示したのだろう。だが、質問しておいて何だがリーズが泣いているのはバレバレである。

俺は途方に暮れて、沈黙した。

よく考えれば慰めの言葉をかけようにも、透はリーズのことを何も知らないのだ。

俺はリーズの滲んだ視界を眺めながら、彼女が泣きやむのを待った。

第三話

たしかに私の抱えるハンデを無視して、強力な召喚獣だけで状況の好転をと考えるのは浅はかだったかもしれない。
それでも、この結果はあんまりだと思った。
一縷の望みを賭けていた召喚獣は、強力な力どころか戦う力さえないと言うのだ。
ただでさえ私は落ちこぼれだというのに、さらには召喚獣の力も弱いとなると、もうどうしようもない。
私は何としてでもAランクに辿り着かなければならないというのに……。

自分の不甲斐なさが悔しくて、私は目から溢れ出すものを止められなかった。
運命は、何故こうも私を追い詰めるのが好きなのだろうか？
物心が付いた頃から、何度も何度も自分に降りかかる不条理に泣いて、何度も何度もその運命に呪いの言葉を吐いてきた。
それでも、私はこれまで必死に藻掻いてきたのだ。
どうしようもない自分を何とかしようと、あらゆる努力を惜しまなかった。
だが私につきまとう不条理は、その努力を嘲笑うかのように叩き潰す。

これまでは辛うじて挫けずにやってこれたが、今回のことで私はもう心が折れかけていた。
このどうしようもない私を、どうすれば目的にへと至らせることができるだろうか？　その糸口さえ何も思い浮かばない。
ひとしきり泣いた後、私は胸に酷い空虚感を抱えながら、呆然と

視線を彷徨わせた。
私が視線を動かしたのを感じ取ったのか、トオルの声が私に伝わってくる。

『えっと……落ち着いたか？』
『……』
『あ～、えっと、なんだ……これも何かの縁だ。よかったら話を聞くぜ？』
『……え？』
『落ち込んだ時はな、人に話を聞いてもらうといいんだそうだ。話してる内に自分の頭の中で整理ができて、少しは気分が軽くなるんだとよ。この前読んだラノ……本にそうあった』
『……』

もしかして、私を慰めようとしてくれているのだろうか？
意表を突かれて私が思わず沈黙すると、トオルは慌てた声を届けてきた。

『むむ……よ、余計なお節介だったか？　やっぱ、さっき出会ったところの得体の知れない奴には話せるわけないか』

そんなトオルの言葉で、私は漠然と彼の人柄を理解する。
多分、優しい人なのだろう。
まだ初対面に近い私に、親身になって慰めてくれる程には。

『……ううん、そんなことない』

私は首を横に振ってから、目尻に残っていた涙を拭う。
追い詰められていたせいか、私はその優しい誘いに縋り付いた。

私はあまり喋ることができないので、今までこんな風に誰かに話を聞いてもらったことはない。
でも、この心話と呼ばれる召喚獣との意思疎通には声は関係ない。
最初はたどたどしく遠慮しながら話していたものの、そのうち私は胸に溜まっていた様々な感情を吐き出していた。
トオルは、もはや支離滅裂になってしまっている私の愚痴や弱音を、黙って聞いてくれる。

私が自分の声のことと、そのせいで学院での成績が最悪なことを話すと、トオルがポツリと呟いた。

『……俺と同じだな』
『え？』
『いや、こっちの話だ』
『……』

思わず聞き返してしまったが、トオルの言葉はしっかり私に伝わっている。
もしかすると、トオルも私と同じことで悩んでいるのかもしれない。
だがそのことを私が問う前に、トオルが言葉を続けた。

『つまりリーズは、その声が出にくくなる症状のせいで、魔法の呪文が上手く唱えられないんだな？』
『うん』
『そして期待してた召喚獣は、ただの携帯電話だったと……何だか悪いことしちまったな……』
『ううん。トオルのせいじゃない。悪いのは私』

そう、恐らくは私が何かミスを犯したのだろう。

現に、召喚した対象と心話の対象がちぐはぐになってしまっている。本来の召喚対象はトオル自身であったのが、私の何らかのミスによって、その持ち物だけが召喚されてしまったのかもしれない。
少し余裕の戻った頭で、私は自身の召喚術のことを振り返る。

その間に沈黙していたトオルが、ふと何かを思いついたような声を届けてきた。

『……いや、待てよ？　リーズ、その魔法の呪文ってのは、他の何かに記録した音でも発動するのか？』
『音を記録？　そんなことができるの？』

私が驚いた声を上げると、トオルはあっさりとそれを肯定した。

『その携帯電話ならできるぜ。とにかく、どうなんだ？』
『……魔力を持つ者が唱えないと、呪文は発動しない』
『う～ん、じゃあ無理か……』
『でも、魔術師の召喚獣は魔力を主と共有している。だから、もし召喚獣が呪文を発声できるなら、その呪文は発動するはず』
『なるほどな。　……一つだけ、戦いに使えそうな機能を思いついた』

私はそこまでの会話の流れで、トオルの意図することを理解していた。
たしかにそれならば、声によるハンデは埋められるかもしれない。
微かにだが、私の胸の中に希望の光が灯る。

だがトオルが提案したそれは、私の想像を越えたものだった。

>i34589—4164<

第四話

異世界からの声が初めて届いたその日の夜。
リーズが試したいことがあると言うので、その日の俺は早めに就寝することになった。

俺が完全に眠りに就くと、リーズの予測通り、俺の意識は自動的にリーズの元と収束する。俺の視界がリーズの視界と繋がると、リーズは丁度、女子寮から外に出たところであった。
リーズの視界に映る石造りの道が、斜め横からの淡い陽射しに照らされている様子を見て、俺は確認の声を届ける。

『これは、おはよう……だよな？』
『おはようでいい』

リーズが俺の疑問に、肯定の言葉を返した。
俺が自分の部屋のベッドで寝たのが夜の十一時過ぎぐらいだったのが、向こうはだいたい朝ぐらいの時間になるらしい。
リーズが俺の携帯電話を召喚した時、こちらの世界は六限目の十五時過ぎだった。つまり、リーズが召喚術を行っていたのは深夜頃だったということになる。
あの後、リーズが一旦繋がりを切ったのは、女子寮にある自分の部屋に戻って寝るためだったのだろう。
あれから再びリーズから心話が届いたのは、夜の十一時前になってからである。

リーズとの話を終えた時、たしかこっちは下校時間寸前だった。
あれから、満足に寝られる程の時間があったとは思えない。
そんな俺の予測を裏付けるように、リーズの視界は酷くフラフラ

としていた。

『おい、大丈夫か？　あまり寝てないんじゃないのか？』
『大丈夫。三時間ほどは寝た』
『短っ！　本当に大丈夫かよ……』
『大丈夫。慣れている』
『……』

慣れているということは、それぐらいの睡眠時間になるのはよくあるということだ。
それだけで、リーズのこれまでの生活が少し想像できた。
一体何がリーズをそこまで掻き立てているのか、俺は知らない。
ただ、リーズは自身の目的にただならぬ執着を持っていることは知っていた。

俺がリーズの体調を心配したところで、リーズは聞く耳を持たないだろう。
俺はそう判断して、今はそのことについて何も言わなかった。

『それにしても、お前が寝てもこっちに意識は飛ばないのに、俺が寝るとそっちに意識が飛ぶんだな』
『……』
『……何故そこで黙る？』

リーズのその不自然な沈黙に、俺は何か嫌な予感を覚える。
俺がそれを問いただすより先に、リーズが素直に白状した。

『……実は私が寝ている間、私の意識はトオルと繋がっていた』
『えっ、だったら何で声を掛けてくれなかったんだ？』
『……私が寝た時、トオルは……その……』

『あっ』

リーズが寝たのは、恐らく今から三時間とちょっと前だろう。たしかその時間は、丁度俺が風呂に入っていた時だった。
それで俺は、リーズが何を口籠もっているのかを理解する。

『……もしかして、見たのか？』
『ごめんなさい。寝ている間は、どうしても意識を切り離せなくて……』
『……』

俺はその事実に、恥ずかしさのあまり絶句してしまった。
元の世界での俺の体は今、寝相で身悶えている自信がある。

だが、そこはやはり俺も年頃の男。
俺はそれに憤慨する前に、もう一つの事実に思い至った。

『つまりそれは、逆の場合も意識を切り離せないんだよな？』
『……』

今度は、リーズのほうが沈黙する。
その沈黙を肯定と見なし、俺は内心で歓喜した。

『あ、あまり見ないで欲しい……』
『いやぁ、そう言われてもよ』
『……トオル、喜んでる？』
『えっ、あ、いや、そ、そんなことはないよ？』

どうやら思わず言葉が弾んでいたらしい。
あからさまに動揺した俺の声を聞いて、リーズは諦めたように嘆

息した。

『……仕方ない。私も我慢するから、トオルも我慢して欲しい』

『あ、あぁ』

要するにお互い様ということなのだろうが、俺のほうばかり得があるように感じるのは、俺が男だからだろうか？

思えば自分の携帯電話を異世界に召し上げられてしまったことも、今となってはどうでもよくなっていた。

どうせ、電話を掛けてくるような友達もいないのだ。何か連絡があったとしても、せいぜいがたまに親がメールを送ってくるぐらいである。

そんなことよりも、今の俺はリーズの視界を通して見える世界に夢中になっていた。

何せ、異世界である。

しかも魔法が存在している上に、こっちの世界でいう中世の西ヨーロッパに近い建築物が並ぶ異世界だ。

ライトノベルの中でも富〇見ファ〇ジア文庫をこよなく愛する俺にとって、その世界は堪らなく魅力的に映った。

さらには、リーズは俺にとって初めての友達になる。

可愛い女の子である友達と会話ができて、おまけにファンタジーな異世界を体験できるというのは、俺にとって少しばかり高い携帯電話よりもずっと価値があった。

俺は気分をワクワクさせながら、今のリーズの行く先を聞いてみる。

『ところで、今は何処に向かっているんだ？』

『今から、あの校舎で朝の授業がある』
『へぇ。そういうのはこっち世界の学校と似てるんだな』

俺がなんとなくそう呟くが、その言葉はリーズが視線を向けた建物を見て、すぐに撤回することになった。
ローマの円形闘技場を少し小さくしたような外観のそれに、俺は思わず感嘆の声を漏らす。

『大きいな……いつもあそこで授業やってんのか？』
『合同の授業はいつもあそこ。午後からの選択授業になると、もう少し小さな場所で授業を行う』

と、リーズが今度は逆の方向に視線を向ける。
ゴシック様式に酷似した石造りの城のような建物が、その視界の中央に映った。

『いや、あれも十分大きいから。お前の世界の学校って大きいんだな……』
『こちらの世界の中でも、この学院は特別。他にも様々な施設や領域があって、島一つが全て学院の敷地になっている』
『ははっ、島一つって何だよ。そりゃスゲェな』

俺が言葉を弾ませると、リーズが不思議そうに首を傾げる。

『トオル、楽しそう』
『ああ、楽しいぜ？』
『そうか』
『……？』

何やら妙な様子のリーズに、今度は俺が首を傾げた。

そのことで俺が何かを言う前に、リーズが言葉を続ける。

『トオル』

『ん？』

『トオルの目には、この世界がどう映っている？』

『……』

何やら意味深なリーズの言葉に、俺は押し黙った。

なんとなくリーズの声色に諦念のようなものを感じ取り、軽々しく答えることができない。

俺がその質問に答えられず沈黙していると、リーズはまた違う質問をしてきた。

『トオルの世界にも学校があるのか？』

その二つ目の質問は、俺もすんなりと答えられた。

『ああ、あるぜ。お前の通ってる学校よりは数段スケールは落ちるがな』

『私も、そちらの世界に興味がある。トオルの学校を見てみたい』

『いいぜ？　学校と言わず、色んな場所を案内してやるよ』

『ありがとう』

『その代わり、俺が案内する時はちゃんと寝ろよ？』

『……』

俺のその言葉には答えず、リーズは目的の校舎の中へと入っていった。

第五話

私が大講堂の中に入ると、既に同学年である一年生の生徒のほとんどが来ているようだった。　男女あわせた全一年生を収容してもまだ余裕のある規模の屋内は、教壇を中心としてなだらかなすり鉢状のようになっており、それに合わせて湾曲した長机が段々に設置されている。

別に座る席が指定されているわけではないのだが、親しい者とグループを形成して座っている生徒達は、自然と同じような位置に固まって陣取っていることが多い。

私もその例に漏れず、自分がいつも座っている位置にて、いつも一緒に授業を受けている友人が先に着席して私を待っていた。

その友人であるエルヴィ・パルムグレンは、私の姿を遠目に確認するなり、快活な笑顔を浮かべて手を振ってきた。私もそれに応じて、控えめに手を振りながらエルヴィの元へと歩み寄る。

『あれは誰だ？』

『私の友達。私と違って、とても優秀な人』

トオルの疑問に答えながら、私はエルヴィの隣の席に座った。

「リーズ、おはようです！」

「おはよう」

「あらあら、髪が跳ねてますよ？」

エルヴィはそう言って、手ぐしで私の頭を梳かし始める。

それが心地よくて目を細めると、何故かエルヴィのほうが何とも

言えない顔をして喜んだ。

「ん～、今日もリーズは愛らしいです！」

「……」

何か釈然としないものを感じつつもエルヴィに頭を預けていると、机の上に置かれていたエルヴィの鞄が、唐突にゴソゴソと動く。

その鞄の口から、耳の長い小型の獣のような何かが顔を出した。

どこか無垢さを感じさせる黒い瞳と、全身が柔らかそうな灰色の毛皮で覆われているそれは、まるで愛玩動物のような愛嬌がある。

私がそれを見て首を傾げると、エルヴィもそれに気がついた。

「紹介が遅れましたね。その子が私の使い魔なのです。名前はモクというらしいですよ」

「鞄に入れるのは……どうかと思う」

「なんでか狭い所に入りたがるんですよ。鞄にも自分から頭を突っ込んでいただけで、私が押し込んだわけではないのです」

私は召喚獣の種類についての知識は豊富である自信があるが、そのモクという使い魔の姿は私の知識にないものだった。

私がそのことを問う前に、私の疑問を察したエルヴィがモクの補足をしてくれる。

「どうやら新種の使い魔らしいです。学院の記録にないので、詳しいことはまだ分からないのですよ」

「そう」

私がその珍しい使い魔を眺めていると、モクが私に向かって鼻をぴすぴすと動かしてから、私の膝の上へと跳び乗ってきた。

続けてその長い耳ごと頭を、私に擦りつけてくる。
その甘えるような仕草は、本当に愛玩動物のようだった。

「リーズのことが気に入ったようですよ」
「そう」
『……可愛いな』
『うん、凄く可愛い』

私はなんとなく、甘えてくるモクの頭を撫でてみる。
その様子を眺めていたエルヴィが、頬を人差し指で掻きながら、おずおずと聞いてきた。

「それでその……リーズは上手く召喚できたのですか？　課題の期限は明日までですが……」
「できた」
「本当ですか！？」

途端に、嬉しそうな声を上げるエルヴィ。
今はもう私の声のことを知っている彼女は、どうやら私の心配をしてくれていたらしい。

「それで、リーズの使い魔は何処にいるのです？　見たいですよ」

エルヴィが目を輝かせて辺りを見回す。
私が自分の使い魔を取り出すべく鞄に手を入れると、それを見たエルヴィが苦笑した。

「リーズも自分の使い魔を鞄に入れているじゃないですか」
「……」

私が何も言わずエルヴィに自分の使い魔を渡すと、エルヴィが不思議そうな顔でそれを掲げた。

「小さいですね……これがリーズの使い魔なのですか？」
「うん」
「……全く動かないんですが、これは眠っているのですか？」
「起きている」
「名前は何と言うのです？」
「ギャラクシー」
「種族は分かるのですか？」
「ケイタイデンワ」
「むむ、恐らく新種ですね？」
「うん」

エルヴィが難しそうな顔をして唸っていると、私の頭の中でトオルがポツリと呟いた。

『うむ……これぞ健康美人』
「……エルヴィのこと……気に入ったらしい」
「むむ？」

エルヴィが私の顔を見て首を傾げる。
と同時に、私達の背後の席から盛大な笑い声が響いた。

私とエルヴィがそちらに視線を向けると、長く艶やかな光沢のある黒髪に、雪のような白い肌をした少女が視界に映る。
扇子と呼ばれる道具を口元に当てつつ、高らかに哄笑するその少女を、私はよく知っていた。

『うお、今度は和風美人っ！』

「シズルも……気に入ったらしい」
「節操のない使い魔ですね……」

私とエルヴィの反応に戸惑ったのか、シズルという名の少女が笑い声を止めて咳払いをする。
ふと気がつけば、周囲の生徒の視線がエルヴィとシズルに集中していた。

シズルとエルヴィは、同じ一学年の中で常に成績の上位争いをしている有名人である。
さらには、シズルの服装は学院全体の中でも特に悪目立ちしていた。

ヴィントレーゼ魔術学院は、全ての生徒に黒いローブの着用を義務付けている。
学院に在籍しているほとんどの生徒がそれを忠実に守っているのに対し、シズルはそれを無視して出身国の民族服に身を包んでいた。
通常はランク戦と呼ばれる特別な試合と自分の部屋以外では、学院内での自由な服装は認められていない。　だが、シズルの産まれた家の身分の高さと、その類い希な好成績によって、教師達はシズルの服装を黙認している状態なのである。

その特異な服装と好成績によって、無駄に存在感を発揮しているシズルの発言というのは、同学年の生徒に注目されやすい。
今のこの場面でも、シズルは大いに目立って周囲の視線を集めていた。

そのシズルが、私に向かって嘲笑うかのような声を上げる。
「それがお主の使い魔じゃと？　それは何の冗談じゃ？」

「……」

私が押し黙ると、シズルはますます笑みを深くして私を揶揄した。

「ただでさえ落ちこぼれだというのに使い魔がそれでは、もうお主には見込みがないのう。そろそろ諦めはついたかえ？」

「……」

『何だこの嫌味な奴は……』

『シズルは悪い人ではない』

『そうなのか？』

『うん。だって彼女は――』

そこでエルヴィが、私の顔を心配そうに覗き込んでくる。どうやらエルヴィは、トオルと話しているせいで沈黙していた私を、落ち込んでいると勘違いしたらしい。

「リーズ、気にする必要ないです」

「気にする必要、大ありじゃ馬鹿者」

シズルはその顔から笑みを消し、先程とは打って変わって真剣な視線をリーズに向けた。

「お主が落ちこぼれるのは、お主の勝手じゃ。じゃが、ランク戦に参戦するのは二人一組である必要がある。どうせお主らは互いに組むつもりなのじゃろう？　それでは、エルヴィの足を引っ張ることになるぞ？」

「シズル、いい加減にしないと――」

「わらわはリーズと話しておる。お主は黙っておれ」

シズルがそう嗜めるが、エルヴィは尚も何かを言おうとして口を

開く。
だが、エルヴィが何か言葉を発する前に、それを私が片手を挙げて制した。

「リーズ……」
「お主なら分かるはずじゃぞ？　エルヴィは将来、Ａランクにまで上り詰める可能性がある。じゃがそれには、やはりそれ相応の相手と組む必要があるじゃろう。そう、例えばわらわのような実力が拮抗した者とな」

そのシズルの言葉を受けて、エルヴィが眉を吊り上げた。

「誰がシズルなんかと――」
「その通りだ」
「リーズ！？」

私がシズルの言葉に同意すると、エルヴィが悲鳴に似た声を上げて私を見た。
恐らく私が、シズルとエルヴィが組むことを認めたように思ったのだろう。
だが、私の言葉はそこで終わらない。

「だから……私と勝負」
「ほう？」

私は、シズルの真意がなんとなく分かる。
つまりシズルは、私がエルヴィの可能性を潰すかもしれないことに怒っているのだ。
だからこの提案ならば、どう転んでもシズルは納得するはずだった。

「勝ったほうが……エルヴィと組む」
「……その言葉、偽りはないな？」
シズルが視線を鋭くすると、私はそれにはっきりと頷いてみせる。
「うん」
私の返事に唇の端を上げたシズルが、手に持っていた扇子にパチンと音を鳴らして畳んだ。
「よかろう、なら勝負じゃ。日取りは、私達がランク戦に参加できるようになる三日後。仮のペアを作って参戦し、私かリーズ、勝ったほうが改めてエルヴィと組む。それでよいな？」
「いい」
学院生にとって、使い魔との融合が許可されるのはランク戦時のみ。
だから自然と勝負の日取りが、一年生にとって初めてのランク戦の日になった。
「リーズ……大丈夫なのですか？」
「大丈夫……多分」
不安そうに眉をひそめるエルヴィに、私はわりと本気の自信を込めて頷いた。
トオルが提案したことが本当に可能ならば、勝機は十二分にある。
だがそんな私の楽観は、上から舞い降りてきたものによって、早々に打ち砕かれることとなった。

丁度、人の身長の半分ぐらいの大きさをしたソレが、シズルの隣の中空にて制止する。

「紹介が遅れたの。これがわらわの使い魔じゃ」

誇りと自負を込めて、シズルはその使い魔を私達に披露した。

その姿に、エルヴィは驚愕の声を上げる。

「リーズ、この使い魔は……」

「……うん」

縦長の瞳孔をした双眸に、伸縮性のある膜のような二枚の翼。全身が蒼い鱗に覆われ、頭にはソレにとって象徴的な二本の角。

それはあまりにも有名で、誰もが知っている最強の使い魔――

「ドラゴン」

その種族名を呟く私の声が、微かに震えた。

＞i34590|4164＜

第六話

リーズの通っている学院は、思っていたよりも早めに授業が終わった。
俺の通っている高校ならば、後一時限か二時限は授業があるだろうという時間である。
リーズ曰く、本来はこの後にランク戦の予備時間と試合があるらしい。
だが一年生がランク戦に参加できるようになるのは三日後からなので、授業が終わればもうその日の予定は終わりであった。

半数以上の生徒は、それから親しい友人などと一緒に遊びに行ったりするらしいのだが、生憎と今のリーズにそんな余裕はない。
学院の授業が終わるなり、リーズはすぐに女子寮へと戻って、自分に割り当てられている部屋に引き籠もることになっていた。

『ごめん、今日はトオルにこっちの世界を案内しようと思っていたのだけど……』
『気にすんな。今はそれどころじゃないんだろ？』
『うん……ありがとう』

リーズが心話で俺と会話しつつ、早足で女子寮へと戻る。
俺はリーズから学院の女子寮に住んでいると聞いた時、漠然と自分の世界の学生寮と同じ二人部屋のようなものを想像していた。

しかしリーズが帰ってきた建物は、中世で栄華を極めた貴族の館をさらに巨大にしたかのような、壮麗な屋敷であった。
リーズが割り当てられている部屋の内装も、洗練されたゴシック様式の芸術品のような装飾が、いやらしくない程度に施されている。

しかも入り口の扉から見えるだけでも、個室が二つ以上あるような広さだった。

『広っ！　一体何人用の部屋なんだよ』

『一人用』

『マジかよ……』

リーズは自分の部屋へと帰ってくるなり、すぐに実技用に使っているという個室へと入る。

シズルの使い魔を見てから、リーズはずっと焦っているようであった。

俺の知る創作物のファンタジーでも、ドラゴンという架空生物は定番中の定番である。

数ある作品の中でも、ドラゴンは強力な存在として綴られている物語が多い。

やはりリーズの世界でも、ドラゴンというのは強力な召喚獣なのだろうか？　俺がその旨をリーズに聞くと、予想以上に深刻な言葉が返ってきた。

『ドラゴンにも個体差はあるけど、種族でいえば間違いなく最強。相手の使い魔がドラゴンというだけで、大抵の者は歯が立たない』

『そんなに強いのかよ……』

『基礎能力が違う。ドラゴンと融合した術者は、その拳を振るうだけでも小さな魔法並の攻撃力がある。さらには、各個体それぞれの強力な特性を持っていることが多い』

俺に届くリーズの声が、わずかに沈んだ。

『……正直、勝算は薄いと思う』

『……』

戦う前から弱気になるな、とは言えなかった。

俺はそのドラゴンが、どれほど強力な召喚獣なのかを見たことがないのだ。

何も知らないまま、無責任は励ましはできない。

そのことが、俺は歯痒くて堪らなかった。

でも、リーズには俺が励ます必要もなかったようである。

『でも、私は勝ちたい』

弱気になりそうな自分を奮い立たせるように、リーズはその言葉に力を込めた。

『勝って私は、エルヴィと一緒に組みたい』

『そうか。友達だもんな』

俺が若干羨ましく思いながらそう言うと、リーズはそれを否定した。

『エルヴィは友達だけど、それとこれとは話が別』

『そうなのか？』

『真剣に上を目指すなら、組む相手を選ぶのに私情は抜くべき』

リーズは事も無げにそう言ってみせる。

案外、リーズとシズルは似たもの同士なのかもしれない。

『それにしても、そんなにAランクになるっていうのは厳しいのか

？』
『うん。ドラゴンを使い魔に持つシズルでも、組む相手が悪ければ、とてもAランクにはなれない』
『マジか……』

リーズの説明によると、ランクとは学院が定めている強さの基準のようなものらしい。
段階はGからAまであって、ランクが高ければ高いほど、卒業後の待遇が良くなるそうだ。
基準の最高位であるAランクでの卒業生ともなると、それぞれの国の歴史に名前を残している者が沢山いるのだとか。

だがAランクに到達できる者は、世界中から集まった多くの生徒の中でも、ほんの一握りしかいない。
最上級生である六学年の生徒でさえ、半数以上はDランク以下で燻っているのだ。

選ばれた少数の実力者のみが到達できるランク。
リーズの目的は、そんな領域にある。

その最初の段階で躓かない為にも、リーズは何としてでもシズルに勝っておきたかった。

『だから今は、できうる限りのことをしておきたい』
『そうか。俺も自分にできる範囲で協力するぞ』
『ありがとう』

俺はリーズの視界に映る自分の携帯電話を見ながら、リーズに操作を指示して必要なアプリをダウンロードさせる。
後はリーズがそのアプリを使って呪文を録音し、俺の家のパソコ

ンへとファイルを送信する手筈になっていた。

『録音する呪文はもう決まっているのか？』

『うん。シズルの使い魔の属性と能力はだいたい予測がつく。だから、それに対応できる魔法を録音する』

『属性はまだしも、能力なんて外見から分かるのかよ』

『召喚獣の特徴で分かる。私は知識だけは、それなりにあるつもり』

『そうだったな……』

俺は今日の授業を見ていて、リーズについて分かったことが一つある。

リーズは魔法や召喚獣などの知識に関しては、エルヴィやシズルと比べても劣っているわけではないのだ。

ただ学院はあくまで呪文の練度を測るので、成績を決める時はほとんどが実技による評価になる。

いくら知識があっても、途中で呪文を途切れさせて失敗してしまうリーズは、どうしても成績が振るわないのである。

もし学院のテストが、俺の世界の高校と同じような筆記試験だったならば、リーズは成績のトップ争いをしていたかもしれないのだ。

それほどの努力を、リーズはしている。

だがこれまで、寝る時間をも惜しんで勉学に励んでも、リーズが報われることはなかった。

俺ならとっくにいじけて開き直っていた自信がある。

それでなくても、Aランクになるという目標は諦めていただろう。

でも、リーズはいじけることも諦めることもなかった。

それは凄いことだと感心するのと同時に、がむしゃらすぎて生き急いでるかのような印象も受ける。

そのリーズの前のめりな原動力は何からくるのだろうか？
俺は何故かそれが無性に気になって、思わずリーズに話しかけていた。

『なぁ、リーズ』
『何？』
『えっと……』

だがそこで、俺は躊ってしまう。

俺はそれを、本当に聞いていいのだろうか？
人は誰でも、言いたくない事の一つや二つはある。前に話を聞いた時に、リーズがそのことに触れなかったのは、俺に話したくないからではないか？

そんな考えが、俺の頭の中でぐるぐると回る。

『頑張れ』

結局、俺の口から出てきたのはそんな言葉。

『うん、頑張る』

リーズはそれに力強く頷いた。
ヘタレで情けない自分に、俺は内心で溜息をつく。

その頃、「エルヴィを取り合ってシズルとリーズが決闘をする」という噂が一年生の間で広まったせいで、外ではちょっとした騒ぎになっていた。

ずっと部屋に引き籠もっていたリーズは、それを知る由もない。リーズがそのことに初めて気がつくのは、次の日の朝になってからであった。

第七話

シズルとの勝負が決まった次の日の朝。
油断すれば閉じてしまいそうになる瞼を片手で擦りながら、私は朝の授業を受けるべく、大講堂の中へと足を踏み入れた。
流石に一睡もしていないのは堪えるのか、自分の体が鉛のように重く感じる。それでいて、何か足下が浮いているかのような、ふわふわとしたものがあった。

そのせいで、私は大講堂内の異変を認識するのに、数瞬遅れる。
気がつけば、先に来ていた生徒達の視線が、ほとんど私に集中していた。

『な、なんだこれ？　何が起きてんだ？』

丁度、向こうの世界で眠りに就いたトオルが、私の頭の中で困惑の声を上げる。
私を見て何やら楽しそうに騒ぐ同級生達を眺めて、私は首を傾げた。

『分からない。朝の授業を受けに来たら、こうなっていた』

トオルの言葉に答えながら、とりあえず私はいつも座っている席へと向かう。
私が先に来ていたエルヴィの元へと辿り着くと、同級生達が一層騒がしくなった気がした。

「リーズ、気にすることないですよ」

頭に疑問符を浮かべる私に、不機嫌そうな様子でエルヴィがそう言う。
いつも陽気で明るいエルヴィにしては珍しいその反応が気になって、私は口を開きかけた。
だが私がエルヴィに何かを聞く前に、やわらかく丸みを帯びた声が、前の席から割り込んでくる。

「おはようリーズ。ねぇ、エルヴィを取り合ってシズルと勝負することになったって本当なの？」

その声の主に視線を向けると、赤髪を顎の下あたりにまで伸ばした少女が、目をきらきらと輝かせて私を見ていた。
私と同じぐらいの小柄な体型なのに、私と正反対の大きな胸を持つその少女は、カルディナ・オウドリードという名の同級生だ。
毛先が波のようにうねった髪型と、少しだけ目尻の低い双眸は、その実年齢よりもかなり幼い印象を受けるのに、胸だけは大きい。
そのアンバランスさが一部の男子生徒を魅了するらしく、カルディナはかなりモテるらしかった。

そして、それはトオルも例外ではなかったようである。

『これは……何というロリ巨乳……』
『……ロリって何？』
『ロマンのことだ』
『……』

トオルの嬉しそうな声に、どこか面白くないものを感じつつ、私はカルディナの質問に頷いた。

「うん」

「ふわぁ、本当なんだ……三角関係だよ～、愛憎劇だよ～」

カルディナは、その豊満な胸の前で祈るように手を組み、面白がるような声を上げる。

そのカルディナの言葉によって、私は教室で皆が騒いでいる理由をなんとなく察した。

「この騒ぎは……それが原因？」

「そうだけど、それだけじゃないよ」

カルディナがそう言うと、その肩の上に羽根のような耳をした何かが、ぴょこりと顔を出す。

人間の膝下ぐらいの大きさをした、ウサギ科のような外見のそれは、私の記憶が正しければグレムリンという種類の召喚獣だ。

それを使い魔にする術者の趣味なのか、その上半身には専用に繕ったと思われる緑色の上着と、赤いリボンが身に着けられていた。

自身の肩に張り付いているグレムリンに視線を向けて、カルディナが首をコクコクと頷かせる。

恐らくは心話をしているのだろう。つまり、そのグレムリンはカルディナの使い魔らしかった。

「ふむふむ、だいたいみんな賭け終わったみたい」

「……何の話？」

「明後日の勝負で、どっちが勝つのか……というよりは、どのくらいの時間でシズルが勝つのか、みんなで賭けをしていたの。今のところ、秒殺に賭けている人が一番多いんだよ～」

人懐っこそうな笑顔を浮かべて、さらっと毒を吐くカルディナ。

それに、むっつりと黙っていたエルヴィがますます不機嫌そうな顔

になる。
私の頭の中で、それを見たトオルが呻いた。
『うわぁ……こいつ、何だかすっげぇ腹黒い気がする』
『……カルディナは自分に正直な人』
『黒いのは否定しないのな』
『……』
トオルと私がそんなことを話しているとも知らずに、カルディナがニコニコとした表情のまま言葉を続ける。
「それでね、さっきエルヴィがね――」
「カルディナ！」
エルヴィの鋭い声によって、カルディナが怯んで言葉を呑んでしまう。
私はそれに嫌な予感を覚えて、カルディナに続きを促した。
「カルディナ、教えて」
「で、でも……」
言葉を濁しながら、鋭い視線を送り続けてくるエルヴィをちらちら見るカルディナ。
私は彼女が意図することを把握し、それを伝えた。
「大丈夫……エルヴィのことは……気にしないでいい」
私がそう言うと、カルディナはおずおずと先程言いかけたことを再び口にする。

「えっと、みんなが賭けをしてるのをエルヴィが知ってね。それで、その詳細を聞いた途端、怒って一人だけリーズが勝つほうに大金を賭けちゃったの。持ってるお金、全部賭けてやります～って叫んでたよ」

「……」

私が無言でエルヴィに目を向けると、エルヴィは視線を逸らして口笛を吹いた。

無駄に上手いその口笛は、耳に心地の良い軽やかな音を奏でる。

だがそんことで、私が本当に誤魔化されるわけがない。

「エルヴィ」

私の呼びかけに、エルヴィは決まりが悪そうな顔をして口笛を中断し、視線を私に戻した。

「な、なんですか？」

やや上擦った声になるエルヴィに、私は語気を強くして戒める。

「まだ間に合う……取り下げるべき」

「嫌です」

だが、エルヴィはキッパリとそれを拒否した。

私はそれでも諦めず、エルヴィの説得を続けようとする。

「だってエルヴィは……」

「私が誰に賭けようと私の勝手です！　それに、リーズが勝てば何も問題はないですよ。私は最初からリーズが勝つと思っていますし」

「エルヴィ……」

私とエルヴィは、この学院で入学以来の付き合いである。
こうなったエルヴィは、何を言っても聞かないほど頑固なのを、私は経験によって知っていた。

『どうしようトオル。私は絶対に勝たなくちゃいけなくなった』
『どういうことだ？』
『詳しいことはエルヴィの私事に関わるから言えない。でも、エルヴィがお金を失ってしまうのは不味い』
『それなら、最初から金を賭けるなよ……』
『エルヴィは優秀だけど、感情的になりやすい傾向がある』
『まぁ、昨日の様子からしてもそんな感じだったな……』

そのエルヴィは、隙だらけのファイティングポーズを取って、よく分からない励ましの言葉を私に贈る。

「リーズ、ファイトです！」
「キュ！」

それに合わせて、机の上にいたモクが、エルヴィと同じ構えを取って鳴いた。
その姿が若干、変化しているように見えるが、今の私はそれどころではない。

『……今回のことは、私の責任。私がシズルに勝負を持ちかけたせいで、話が拗れた。もし私が負けると、エルヴィにも無視できない影響を与えてしまう。……どうして私は――』
『そんな風に自分を責めるのは、何か違わないか？』

自嘲混じりのような私の弱音を、途中でトオルが戒めた。

『……ごめん』
『いや、謝ることはねーけどよ』
『……』

私が沈黙すると、トオルが慰めるような声色で言葉を続ける。

『とりあえず今は、やれるだけの準備をするしかねーよ』
『……うん』

自分の勝敗次第で、自分以外の運命を巻き込むかもしれないことに、私にのしかかる重圧が数段増した気がした。
その時、私は焦りと自責の念に駆られるあまり、トオルがポツリと呟いた言葉を聞き流してしまう。

『なんとかなると思うんだけどなぁ』

それから二日後、リーズとトオルは、運命の勝負の日を迎えた。

>i34587—4164<

第八話

俺が住んでいる地域の空気では、もはや考えられないほど綺麗に澄み渡った青空の下。
まだ日中の明るい陽射しの中だというのに、その塔はおどろおどろしい存在感を保っていた。

島の北側に存在する、狭間の塔と呼ばれる建築物。
その何の装飾も施されていない要塞のような石の塔は、まるでそれが飾り代わりだとでも言わんばかりに蔓や苔に覆われており、その古さを体現している。

今日は、一年生が初めてランク戦に参加できる日。
リーズの話によると、今からこの塔の中の一室で、シズルとの試合を行うらしいのだが……

『こんな場所で試合できるのかよ？　てっきり大きな闘技場でもあるのかと思ってたんだが……』
『入れば分かる。観客が沢山入れる専用の闘技場はあるけど、そこで試合ができるのはAランクだけ』

俺にそう説明しながら、リーズは強い陽射しから目を守るように、黒い広つば帽子を深く被り直した。
ランク戦の時は自由な服装が認められるらしく、今のリーズは黒いスカートに白いブラウスの上から広幅の黒マントと、ほとんど黒づくしの格好をしている。
その姿は、俺の知るファンタジーの魔術師でも定番のものである為、何の違和感も驚きもなかった。

だが、リーズの隣にいるエルヴィの格好はそうもいかない。
エルヴィは、こっちの世界の南国あたりにいそうな、踊り子のような衣装に身を包んでいた。
その肌の露出の多い民族服は、エルヴィのスレンダーなスタイルと艶やかな褐色肌も相俟って、何とも言えない色気を放っている。
塔の前では、他の一年生達やGランクの上級生など、大勢の人間が行き交っているのだが、その中でもエルヴィの服装はかなり目立っていた。
できれば俺もエルヴィの姿で眼福にあずかりたいのだが、そんな俺の邪な心を察したのか、リーズは中々エルヴィの姿を視界に入れてくれない。

そんなリーズの様子を、エルヴィは賭けのことを怒っていると勘違いしたのか、気まずそうな顔でリーズをちらちら見ていた。
リーズはそれに気がついているものの、賭けのことについて思うところがあるのは事実なので、あえて黙っているようである。

しばらくそのまま待っていると、もう一人の奇抜な格好をした少女であるシズルが、リーズ達に近づいてきた。その隣には、黒いローブのままの姿のカルディナもいる。

俺の世界の和服に酷似したシズルの服装は、紺色の比較的落ち着いた柄をしているものの、学院生はわりと西洋的な服装をした者が多いので、やっぱり目立っていた。

そのシズルがリーズ達の傍に来ると、開口一番に眉をひそめる。
「すまん、すまん。待たせたのぅ……なんじゃエルヴィ？　その妙な格好は？」
「シズルにだけは言われたくないですよ……」

手を腰に当てて、半眼で言い返すエルヴィ。
そんな二人を尻目に、リーズはカルディナに確認をした。
「あなたがシズルの？」
「今回だけね～。私の役目は賭けの結果を見届けるだけだよ。私のグレムリンなら、正確な時間が測れるからね」
「そう」

リーズが頷くと、シズルが挑発的な笑みを浮かべながらリーズの前に立った。
その目に「自分が負けるわけがない」という自信と自負を内包させて、リーズの双眸を見据える。
リーズも、それに応じて強い視線をシズルに返した。

「さぁ、覚悟はいいかえ？　予め言っておくが、わらわは一切手を抜くつもりはないぞ？」
「……望むところ」
「よろしい」

シズルは満足そうに頷くと、カルディナを引き連れて塔の中へと入っていく。
リーズとエルヴィも、その背中に続いた。

塔の内部は、壁を這う巨大な螺旋階段によって構成されていた。それも上階にではなく、地下にどこまでも続いていく石の階段である。

その壁沿いには均等の間隔を置いて、木製の扉が無数に備え付けられていた。その扉と扉の間には突き出し燭台に松明が挿してあり、塔内の闇を払うべく赤い光を揺らめかせている。

弧を描く階段の中心にある空洞から下を見ても、その底がどこまで続いているのかが分からない。永遠と続く松明の炎が、まるで地下の冥界に運ばれる魂のようにも見えた。

『不気味なとこだな』

『うん。少し怖い。何か出そう……』

『……お前、もしかしてお化けとか駄目なのか？』

『……』

リーズは俺の質問に答えずに、シズル達に続いて階段を降りていく。

その広幅の階段では、下に降りていく生徒だけでなく、上に戻っていく生徒も見受けられるようだった。

喜ぶ者や悔しそうな者など、その表情は人よって様々ではあるが、いずれも全くの無傷で戻っていく生徒達に、俺は首を傾げる。

『上に戻っていく奴らって、試合が終わったんだよな？　誰も怪我一つ負ってないようだけど、そんなもんなのか？　実はあまり怪我をしないような試合だったり？』
『怪我はする。でも、生徒に死傷者が出ないよう最大限の安全策が施されている』
『試合が終わったら、すぐに回復魔法を使ってくれる人が待機してるとかか？』
『ちょっと違う。……それも、試合が終われば分かる。言葉では少し説明しにくい』
『ふむ？』

俺とリーズがそんな会話をしていると、やがてシズル達の足が、一つの扉の前で止まった。

「この扉でいいのかの？」
「え～と、一一二〇号室。うん、この扉でいいみたい」

カルディナが、扉に刻まれている数字を確認して頷く。
それは学院にリーズ達が試合の申請をした時に、あらかじめ指定されていた番号だった。

「私、ここから先に行くのは初めてですよ。楽しみですね」
「うん」

エルヴィが楽しそうに声を弾ませるのに、リーズも同意する。
リーズによると、新入生にとってここから先は、誰もが未知の領域であるらしい。

それはシズル達も例外ではなかったらしく、そのドアノブを握るシズルが、緊張の面持ちで扉を開け放った。

次の瞬間、リーズ達の視界に、広々とした草原の光景が飛び込んでくる。
そこにある見渡す限りの草花が、沈みゆく日の光によって黄昏の色に染められ、ささやかな風に揺れてさわさわと音を鳴らしていた。
急に様変わりしたリーズの視界に俺が戸惑っていると、リーズが頭の中で、俺にそれの説明をしてくれる。
『ここは、狭間の世界。召喚獣達が住まう場所』
『マジかよ』
リーズによると、この狭間の世界というのはヴィントレーゼ魔術学院のある島からのみ繋がっているらしい。同じく使い魔の召喚も、この島でのみ行えるのだとか。
だからこそ、この島に魔術学院が作られたのだ。
つまり学院にいた召喚獣達は、元々この世界にいたということである。
『でも、俺のいる世界じゃなさそうだぞ？』
俺は、自分のいる世界では見たこともない異形の鳥（？）が空を飛んでいるのを見て、そう判断した。単に俺が知らない種類という可能性も考えられるが、翼が四枚もあって、頭が二つある鳥なんぞ聞いたこともない。
『うん。だから、トオルのケイタイデンワをこっちの世界に召喚できたのは、とても不思議なこと』

何がどうなって、俺の携帯電話がそちらに召喚されたのかは分からないらしい。
分からないことを今考えても仕方ないし、俺にとってその原因については、あまり興味がなかった。
今はそんなことよりも、リーズの視界を通して見える爽やかな光景を堪能する。
だがこの光景は、肝心の学院生達には評判が悪いようだった。

「初めての試合がただの草原とは……ついてないのぅ」
「そうだね～。先輩が言ってた虹色に光る峡谷が見たかった」
「いやいや、これはこれで綺麗ですよ！　まぁ、珍しい光景とは言い難いですが」

シズル達が口々に好き勝手なことを言いあってる内に、いつの間にかそれは空に存在していた。
丸い球体の形をした、白い光の塊のようなものが、リーズ達の頭上でふわふわと浮いている。
皆がそれに気がつくと、それはゆっくりとリーズ達の傍へと降下してきた。
やがてそれが、丁度皆の視線ぐらいの高さで静止すると、その場にいる全員の頭に中性的な声を届けくる。

＞ようこそ狭間の世界へ。これより、五分後に試合を開始する。試合に参加する者は、各々の召喚獣と融合せよ。試合を放棄する者は、その扉から元の世界に帰られたし＜

まるで決められた文面を棒読みしているかのようなその声に、リーズ達は顔を見合わせた。

『なんだこれ？』

『多分、ランク戦の審判。ヴィントレーゼの初代学院長の使い魔だと言われている。同様の個体が無数に存在していて、入り口の扉の近くに待機しているらしい』
『へぇ～、何だか凄そうな奴だな……』

リーズの説明によると、制限時間である十五分を超過するか、一定以上のダメージを体に蓄積させると、この審判によって強制的に外へと送還されてしまうらしい。

その審判に指示に従って、リーズとシズルは使い魔と融合することになった。
今回の勝負はあくまでリーズとシズルの決闘であるので、エルヴィとカルディナは使い魔とは融合せずに、リーズ達から距離を取る。

「リーズ、ファイトですよ！　リーズならきっと勝てます！」
「キュキュ！キュ！」

遠くで声を張り上げて声援を送るエルヴィに合わせて、その頭によじ登ったモクが、興奮した鳴き声を上げる。
気分を奮い立たせるよりは、思わず和んでしまいそうになるその応援に、リーズは苦笑した。

リーズのその笑みを見て、距離を置いて向かい合っていたシズルが、からかうような声を上げる。

「余裕じゃのう。もしかして、わらわは見くびられておるかえ？」
「……みくびってない」
「それならよい。初めての戦いが、あっさり終わってもつまらんからの。せいぜい藻掻くがよいぞ？」
「……」

自分の勝利を微塵も疑っていないシズルにリーズが沈黙すると、先にシズルの使い魔が眩い光に包まれた。
まるで引き寄せられたかのように、その光がシズルの中へと入り込むと、今度はシズルの体が、先程と同じ光に覆われる。

やがて光が収まると、頭に骨の角を二本生やし、瞳が縦長の瞳孔に変化したシズルの姿が現れた。その袖の下から覗く肌からも、わずかに蒼い鱗が見え隠れしている。
その姿は、シズルの黒髪と身に着けている民族服にとてもよく似合っており、リーズは思わず感嘆の息をついてしまった。

『綺麗だな……』
『うん』

リーズが素直にトオルの言葉に同意する。
その間に、自身の体を眺めていたシズルが愉悦に顔を歪ませた。

「ふむぅ……素晴らしいなこれは」

シズルがそう呟いて、軽く右手を振ってみせる。
ただそれだけで、強い突風がリーズを襲った。
リーズが堪らず尻餅をつくと、エルヴィとモクが抗議の声を上げる。

「シズル！　まだ勝負は始まってないですよ！　卑怯です！」
「キュ！キュキュキュ！」
「すまんすまん、これ程とは思わなくのぅ」

あまり反省していなさそうな声色で謝りつつ、シズルはそのドラ

ゴンの瞳をリーズに向けた。

「さぁ、リーズ。お主もさっさと融合するがよい」

シズルに促され、リーズは自身の使い魔であるケイタイデンワを見る。

リーズはその頭の中で、不安そうな声で俺の名前を呼んだ。

『トオル……』

『大丈夫だ。この時の為に寝る時間削って準備してきたんだろ？その成果を見せてやろうぜ』

『うん……』

リーズが頷くと、俺の携帯電話が眩い光を放ち、リーズの体へと吸い込まれていった。

続けてリーズの体が光に包まれ、視界が眩い光のみになる。

やがてその光が収まると、真っ先に呆けたような顔をしているシズルの顔が映った。

気がつくと、エルヴィやカルディナも同じような顔をしている。

それにリーズが首を傾げると、シズルが盛大な笑い声を上げた。

「ま、全く何も変わっておらぬではないか！　これは傑作じゃ！お主が召喚したのは本当に召喚獣だったのかえ？」

「リーズ…」

「キュゥ…」

腹を抱えて笑うシズルに、流石にエルヴィとモクも不安そうな声を上げる。

だがリーズは、自分に起こった変化を理解していた。
自身の目にのみ見える映像が、リーズの思い描く通りに蠢く。
その様を見て、俺は思わず感嘆の声を上げた。

『すげぇ。まるで攻○機動隊みてぇだ』
『こうか…何？』
『とにかく、凄いってことだよ。ファンタジーじゃなくてＳＦみてぇだ。もしかして体のほうもサイボーグになってるんじゃないか？』
『……よく分からない』

リーズが頭に疑問符を浮かべている間に、審判である白い球体の光が、試合開始が近いことをリーズ達に伝えてくる。

＞試合まで残り十秒。カウントを開始する＜

そのカウントが始まると、笑い声を止めたシズルが、今度はリーズに同情的な言葉を投げ掛けてきた。

「運が悪かったのう、リーズ……お主の魔術に対する姿勢だけは、そこらの有象無象の生徒なんぞよりも好ましく思っておったのじゃが……」

シズルはそう言いつつ、いつでも動き出せるように構える。リーズのことを笑いつつも、シズルに油断は微塵もないようだ。
それに応じて、リーズもいつでも映像パネルがタッチできるよう、両手を構える。
審判が試合開始を告げる寸前、その妙な構えに首を傾げるシズルに、リーズは言葉を返した。

「わたしも……シズルこと……嫌いじゃない」

その言葉がシズルに届く前に、審判の試合の開始を告げる音が鳴り響く。
と同時に、リーズは中空に映し出される映像パネルを素早くタッチした。

ギャラクシーの再生機能が、キュルキュルキュルと音を鳴らす。
続けてシズルが地面に爆音と足跡を残して、リーズに接近しようとした。

人間が持つ走力を遥かに超越した速度での接近。

だがそれは、先に発動したリーズの魔法よって弾き返されることとなった。
小さく発生した稲妻と正面から衝突し、シズルの体が大きく後退する。

「――っ！？　今のはライトニングかえ？　そんな馬鹿な！」

シズルが目を白黒させて、そう叫んだ。
ライトニングとは、風属性に含まれる下位魔法である。当然、その程度の魔法ではドラゴンと融合したシズルの体にダメージはない。
シズルが驚いたのは、その魔法を発動させる為の詠唱が、全く聞き取れなかったことであった。

リーズはシズルに向かって、そのライトニングをさらに連続で起動する。
それはリーズが録音した呪文を、俺がパソコンで限界まで高速化したものだった。

ほぼ無詠唱に近い速度で連射されるライトニングに、シズルはダメージはなくとも、その場から全く動けなくなる。

『トオル、これ凄い』

『てっきりドラゴ〇ボールのサイ〇人みたいに、見えない速度で襲ってくるのかと思ってたけど、そうでもないのな』

リーズはただ指を動かしているだけなので、俺と呑気に喋る余裕さえあった。

だがこの状態が続けば、いずれリーズの魔力が尽きてしまうだろう。

下位魔法ではシズルにダメージを与えられないのだ。

だからリーズは、最初の段階で上位魔法を同時起動していた。

高速再生でも十数秒以上かかったその呪文が、下位魔法の連打でシズルを縫い止めたまま発動する。

その直後、シズルの立つ位置から丁度上空に現れたそれに、シズルが目をむいた。

「ちょ――」

シズルが何か声を上げきる前に、その巨大な隕石がシズルごと地面に衝突する。

リーズは防御魔法を多重発動させて、そのメテオという大魔法の衝撃波から身を守った。

「あっ」

そこで初めて、リーズは自分の失策に気がつき声を上げる。

メテオによる衝撃波が収まると、リーズは慌ててあたりを見回した。

美しい草原であったはずのその場所は、今は地面が捲れ上がり、見る影もなくなってしまっている。

そこに、エルヴィやカルディナの姿もない。

気がつくと、その世界に残っていたのはリーズ一人になっていた。

一定以上のダメージを受けたものは、強制的に外へと送還されてしまうのである。

リーズは周りを巻き込んでしまうことを失念していたのだ。

＞試合時間、十八秒。勝者はリーズ・アンクティルとエルヴィ・パルムグレンのチームとする＜

審判である光の球体が、棒読みでリーズの勝利を宣言した。

第九話

シズルとの試合が終わり、私が元の世界に繋がる狭間の扉をくぐると、荒れ果てた草原から薄暗い螺旋階段へと景色が塗変わった。
私が石で出来た階段の上に立つと、真っ先にエルヴィが私に抱きついてくる。

「リーズ、凄いじゃないですか！　一体あれはどういった特性なのですか！？　私、何が起こってるのか全然分かりませんでしたよ！」

エルヴィが歓喜の声を上げながら、私を抱えてゆらゆら揺らした。
私がその揺れる視界で辺りを確認すると、エルヴィと一緒に強制送還されたはずのカルディナの姿がないことに気がつく。

「カルディナは？」
「賭けの結果報告をしに行ったみたいですよ？」

私にそう説明しながら、エルヴィは私の体を解放した。

「今頃、リーズのことを侮っていた連中は悲鳴を上げてるんじゃないですかね？　秒殺で負けるどころか、秒殺で勝利ですよ！」

試合のことを思い返したのか、エルヴィが興奮した声を上げる。
すると、それまで呆然と立ち尽くしていたシズルが、エルヴィの秒殺という言葉に反応して体を震わせた。

「嘘じゃ……わらわが、よりにもよってこんな負け方を……」

あまりにもあっさり敗北した事がよほどショックだったのか、未

だに信じられないといった様子で、シズルがブツブツと独り言を呟く。

そのシズルの姿を見たトオルが、ふと疑問の声を上げた。

『ん？　そういえば、なんでシズルは何ともないんだ？　リーズの魔法を全部まともに喰らってたように思ったんだが……つうか、服も傷一つないぞ？』

シズルはライトニングを雨のように浴びた時点で、身に着けている衣服もボロボロなっていた。

だが、元の世界に戻ってきたシズルの服には焦げ跡一つ残っていない。

それはメテオの余波を受けたはずのエルヴィも同様である。

私はそのことについて、起こった事をトオルに説明した。

『この世界に戻ると、あちらの世界で変化したもののうち記憶以外が、扉をくぐる前の状態に戻るようになっている』

『へぇ。それも魔法なのか？』

『違う。そうなるのは、世界を渡る時の副次効果らしい』

『どういうことだ？』

『……実は詳しいことは、こちらの世界でも分かっていない。ただ便利だから、学院で使われている。あちらの世界で戦うようにすれば、危なくなった時に強制送還するだけでいいから』

『なるほどな』

私とトオルがそんな話しているうちに、ようやくシズルが少し落ち着いたらしい。

その顔に神妙な表情を浮かべて、シズルは私の前に立った。

「――――っ」

シズルは私に何かを言いかけて、言葉を詰まらせてしまう。
慌てて何かを堪えるように瞼を閉じるが、溢れ出すそれを塞き止められずに、シズルの頬を伝った。

シズルはそれを見られたくなかったのか、右手に持つ扇子を広げて、私の視線から顔を隠す。

「すまぬ、けじめは後で付ける。今は―」
「……うん」

その擦れる声に、私は頷くしかなかった。
私の余計な慰めは、彼女のプライドをさらに傷付けるだけだろう。
だから今は、先に帰っていくシズルの背中を、黙って見送ることにする。

そのシズルの背中が見えなくなったところで、しんみりしてしまった場の雰囲気を吹き飛ばすように、エルヴィが明るい声を上げた。

「これで、改めて私達はチームが組めるわけですね」
「うん」
「リーズの初勝利祝いです！　今日はパーっとやっちゃいましょう！　リーズは何かリクエストはありますか？」

エルヴィが満面の笑顔を私に向けたところで、私はようやく自分の勝利を実感する。
それと同時に、抗えない脱力感が私を襲った。

「じゃあエルヴィ」
「はい」
「私を寮まで……運んで」
「えっ」

私は残った気力でそう言うと、倒れ込むようにしてエルヴィに体を預ける。

シズルと勝負をすることが決まったのが三日前。
私はその日から今日まで、全く寝ていないなかった。

『お疲れ様』
『……』

トオルの声に心地よいものを感じながら、私は意識を沈ませる。
今回は長い時間、トオルの世界が見られそうであった。

この日、リーズ・アンクティルという少女は、その名を警戒と畏怖の対象として、同級生らに刻みつけることになった。

第十話

リーズがあちらの世界で眠りに就くと、やはりリーズの意識は俺の世界にへとやってくるらしい。

休日の朝。俺は目を覚ました時に、頭に響いてきた声によってそれを再確認した。

『トオル、おはよう』
『……おはよう』

起き抜けに可愛い女の子から声を掛けられる。
よく考えれば、これはとても美味しいシチュエーションではないだろうか？
だというのに、何かが釈然としない。

俺は首を傾げながらベットから這い出ると、すぐにその原因に思い至った。
たしかに美味しいシチュエーションではあるのだが、そこに肝心の実体がないのである。

俺が今しているであろう、だらしない表情を見られることがないのは良いが、その代わり俺もリーズの姿を見られないというのは残念でならない。
大事なのは外見より心と言えば綺麗だが、やはり外見があるのも大事だと俺は思った。

俺が住んでいる場所は、少々狭めの土地に二階建ての瓦屋根という、日本では何処にでもあるような普通の一軒家である。
その内装も、多少ごちゃごちゃ散らかっていること以外は、何の変哲もないもののはずだった。
だがそれは、この世界に慣れた俺の認識でしかない。
此処とは違う異世界に住むリーズにとっては、それらが違って見えたらしい。

俺が身だしなみを整えたり、朝食を摂ったりしている間に、リーズは逐一質問を浴びせ掛けてきた。

『トオル、あの箱は何？　中で人が喋っているように見える』
『あれはテレビだよ』
『テレビって何？　魔法？』
『ええっと……なんて説明すればいいのか……』
『トオルが今食べているものは何？　天井にある円盤のようなものは？　食料が詰まっていた白い箱がもう一度見たい』
『……』

俺が答えに窮しても、リーズはお構いなしに質問を続ける。
とにかく此処にあるもの全てが、リーズには珍しく見えるらしかった。
そういえば、シズルとの勝負が決まってからリーズはずっと徹夜続きだったので、リーズの意識がこちらの世界に来るのは、まだ二度目である。

今日はせっかくの休日でもあるので、俺はこっちの世界の色々な場所を案内しようとリーズに提案したが、それよりもリーズは俺の通う学校が見たいと言い出した。

『面白いもんは、あんまりないぞ？』
『多分、そうでもない』

俺はリーズの強い要望に応え、制服に着替えて自分の高校へと赴くことにする。
その道中でも、リーズの質問の嵐は続いた。

俺はそんな矢継ぎ早の質問の応じているうちに、なんとなく一つの傾向に気がつく。
リーズはこっちの世界にあるものの中でも、特に機械類に強い興味を示しているようだった。
道路を走る車や、その端にある自販機など、そういったものがある度に詳しく説明を求められる。
特に電車に乗った時は、小さく歓声を上げたほどだった。
リーズにしては珍しいそのはしゃぎようが、何故か俺には嬉しく感じられて、答えられる質問には全て応じてやるようにする。

そのせいで結局、目的地である学校に辿り着いたのは夕方になってからだった。
途中で電車を乗り回して寄り道しまくったせいで、こんな時間になってしまったのである。

それでもリーズは、まだ満足していないらしい。
むしろ最初の頃よりもテンションを上げつつ、俺がいつも多くの時間を過ごしている場所を、優先して見回るように要求してきた。

そうして、夕焼けに染まる校舎内を、女の子と一緒に歩く。
そうと書くと、非常に甘酸っぱい青春のような感じがするかもしれない。
だが生憎と、傍目から見れば俺は一人である。

しかも休日の学校に、部活などもないのに徘徊する不審な生徒である。

俺はなんとなくビクビクしながら、自分がこの学校で二番目に過ごした時間が長い場所へと、リーズを案内した。

授業の合間の休み時間に、俺が居座っている場所である学校の屋上。

その場所から、黄金色に染められた街並みを見て、リーズは本日二度目の歓声を上げた。

弾んだ声で、屋上から見える様々な場所について俺に解説を求める。

俺にとって学校の屋上とは、友達作りに失敗したが故に、居場所がなくて逃げ込む場所であった。

そのせいか、やたらとはしゃぐリーズとは裏腹に、俺は少し冷めた気分になってしまう。

『楽しそうだな』

『うん』

『……』

俺はそこで、ふと以前にリーズが言っていた言葉を思い出した。

――――トオルの目には、この世界がどう映っている？

もしかすると、あの時のリーズは、今の俺と同じ気分だったのだろうか？

そう思うとつい、俺は口から余計な言葉を漏らしてしまった。

『お前さ、もしかして自分の学校嫌いか？』
『……』

その唐突な質問に、リーズは沈黙する。
俺はなんとなく、その沈黙は肯定を示しているような気がした。
リーズのその反応が意外で、俺は首を傾げる。

『俺から見れば、すっげぇ楽しそうな場所に見えるんだがな』
『……楽しくなんかない』

ポツリと漏らされる、リーズの言葉。
まるで泣いているかのような声色によって、それが紛れもない本音だということを、俺は理解した。

『私にとってあの学院は……苦しいだけ』
『……俺が知らないだけで、あの学校に何か後ろ暗いことがあるとか？』
『そういうわけじゃない』
『じゃあどうして？』
『……』

リーズは沈黙して、俺の疑問には答えない。
俺も、そこに何か重たい事情があるのを察して、それ以上踏み出せなくなる。

だから代わりの言葉を、俺は選んだ。

『リーズの目には、今のこの世界がどう見えている？』
『え？』

リーズが戸惑うのを無視して、俺は夕日を視界に収めてリーズの返答を待った。
しばらくして、リーズは困惑しながらも俺の問いに応じる。
『とても綺麗。トオルの世界の夕日は、私のいる世界のものよりも赤い輝きが強い。少し羨ましい』
『あれはな、実は俺の世界の空気が汚れに汚れているせいなんだぜ？　汚染されてんだ。俺の世界は』
『え……』

言葉を失うリーズに、俺は苦笑して言葉を続けた。

『それ以前に、俺は此処からの景色が嫌いだ。この景色を眺めてるような時は、陰鬱な気分の時が多かったからな』
『……』
『見ている人間が違うだけで、こんなにも感じることが違う。でも本来は何も知らないお前が感じたことが本当で、俺がこの景色が嫌いなのは、俺の先入観のせいなんだろうよ』
『……』

リーズは沈黙を保って、俺の言葉に反応を示さない。
だが俺の声は、リーズに届いているはずだった。

『お前は強くなったんだ。落ち零れの時とは違って、これから少しは余裕もできるだろ。だから、一度周りをよく見てみるといい。お前の学校生活は、苦しいだけじゃないはずだぞ？　だってお前には――』

その言葉の途中で、俺の中からリーズの意識が離れるのを感じる。
恐らくは、あっちの世界で目が覚めてしまったのだろう。

「タイミング悪すぎだろ……」

せっかく無理してクサい台詞を吐いていたというのに、これはない。

俺はその運命の空気の読めなさに、その場で項垂れた。

トオルが何かを言いかけたところで、リーズは目が覚めた。

自分の住んでいる寮の、いつもの見慣れた天井が視界に入る。

時間的には深夜だが、窓から射し込む月の光によって、室内は比較的明るい。

リーズがなんとなくボーッと天井を眺めていると、ふと自身の傍らに人影があることに気がついた。

それに顔を向けると、自分の寝ているベットの傍らで、両腕を枕にして寝ているエルヴィが視界に入る。

「リーズぅ……無理させて…ごめんなさい」

そんな寝言を漏らすエルヴィの姿を見て、リーズは目を細めた。

そして、先程トオルに漏らしてしまった言葉を、リーズは後悔する。

「私こそ…ごめん」

その言葉は誰に届くわけでもなく、ただ夜闇の中へと霧散した。

第十一話

ランク戦とは、両者の合意と申請がない限り、その対戦相手は同ランクの中からランダムで決定される。
それは、ランク戦に参加したばかりの一年生達も例外ではない。
故に、未だGランクから昇格できずにいる上級生にとっては、この時期は格好のチャンスであった。
まだランク戦に不慣れな一年生が多く参加するので、それよりは幾分か戦い馴れている上級生が、勝ち星を増やしやすいのである。

そのような事情があって、この時期に上級生と一年生の試合が組まれると、上級生側は自身の幸運にほくそ笑み、一年生側は自身の不運を嘆くのが通例であった。

だから、赤い荒野のフィールドで私と対戦することになった上級生も、試合前はその通例に則ってほくそ笑んでいたのだが……

「ちょっ、待――」
「こんなの聞いてないぞ！」

その上級生である二人組の男は、今はそれぞれの喚き声を上げながら、自身の不運を嘆いていた。

連続再生の多重起動によって、雨のように降り注ぐライトニングに、男達が荒野を這いずるようにして逃げ回る。
シズルと違い、様子を見ようと開始直後に距離を取ったのが幸いしたのか、上級生の男らは辛うじて魔法の連撃から逃れることに成功していた。

だがそれも長くは持たず、上級生の片割れがライトニングをその身に受けてしまう。
その一瞬の硬直を逃さず、私はライトニングの連射を、その片割れの男に集中させた。
その姿が掻き消えるほどの数のライトニングが、全てその男に命中する。

「チャーリーィィィィイイイイイイイイ」

逃げながら相方の名前を叫ぶ上級生の声に合わせて、ライトニングの集中砲火を受けた男が、この世界から消えた。

「てめぇぇぇぇぇぇぇ、よくもチャーリーをっ！」

相方のことを想い、上級生の男が怒りの声を上げる……逃げながら。

「絶対に負けてやらないからな！　やれるものならやってみやがれ！」

男が私に向けて、勇ましく中指を立ててるジェスチャーをする……逃げながら。
融合した使い魔の特性なのか、その男の速力だけはドラゴン並であった。

『蝶のように、じゃなくてゴキブリのような逃げっぷりだな』
『その例えは可哀想……』

血相を変えて走り回る男に、少し憐れみを覚えないでもない。

でも結局私は、裏で再生させていた大魔法を容赦なく放った。

それによって唐突に空が暗闇に包まれ、そこから多大な力を内包した球体が、逃げ回る男の近くへと舞い降りる。

「……へ？」

青く発光する球体が宙に静止するのを見届けて、男が間抜けな声を上げた。

その次の瞬間、青い球体が轟音を伴いながら弾け、広範囲に渡って紫電の渦を巻き起こす。

周囲一体を全て覆い尽くすかのような攻撃に、男は為す術もなく巻き込まれた。

風属性の大魔法の一つである、サンダーストーム。

その余波を、私はシールドと呼ばれる防御魔法を多重起動させて防ぐ。

今回はエルヴィも私の傍にいることで、その防御魔法の内側にいた。

やがてサンダーストームの攻撃が終わり、空の色が元に戻ると、男が強制送還によって姿を消す。

続けて審判の棒読みの声が、私達の勝利を宣言した。

＞試合時間、二十六秒。勝者はリーズ・アンクティルとエルヴィ・パルムグレンのチームとする＜

そのあっさりと終わってしまった試合に、私の隣にいたエルヴィが困ったような笑顔を浮かべる。

何故エルヴィが、そのような表情を見せるのかが分からず、私は首を傾げた。

「私の出番が、欠片もなかったですよリーズ……」

「……あ」

私が自分の失策に気がつくと、エルヴィはますます苦笑を深くする。

私にとって二回目の試合である今回は、エルヴィもモクと融合することで試合に参加していたのだが、その力を試す間もなく、私が終わらせてしまったのだ。

試合が終われば、私達は早々にこの世界から出なければいけない。

エルヴィは名残惜しそうに、自身の融合した姿を眺めた。

モクの長い耳と酷似したものを頭に生やし、体の節々をやらかそうな灰色の毛皮に包んだその姿は、その褐色の肌と奇抜な服装によく似合っていて、とても可愛いと思う。

トオルなどは、その姿を見たときに「モエー」とかいう奇声を上げていたほど気に入っているようだった

「まぁ、力を試すのは次の機会にしましょう……」

「ごめん」

「リーズが謝る必要ないですよ！　それよりも、勝ったんですから喜びましょう♪」

「……うん」

私とエルヴィが狭間の扉をくぐると、元の世界の螺旋階段に戻ってくる。

すると、丁度試合を終えて階段を上っていたシズルと、鉢合わせ

することになった。

「――あっ」

期せずして、お互いの声が重なる。

シズルは今日の通常授業を休んでいたので、昨日の決闘以来、ずっと私と顔を合わせていなかった。

そのシズルが気まずそうに顔を伏せると、その後ろからカルディナが顔を出す。

「あ、エルヴィとリーズも試合終わったの？」

「うん」

「どうだった？」

「勝った」

「おめでとう～。私達も勝ったんだよ～」

カルディナが嬉しそうに声を弾ませると、私の隣にいたエルヴィが、カルディナとシズルの顔を交互に見て首を傾げた。

「もしかして、シズルとカルディナは正式に組んだのですか？」

「そうだよ？　私の使い魔の能力と、シズルのドラゴンは相性が良いことが分かってね」

「むむむ……少し意外です」

「そう？」

私達がそんな会話をしていると、それまで俯いて沈黙していたシズルが、意を決したように顔を上げた。

表情を引き締めて、シズルは私と目を合わせる。

その張り詰めた空気を察して、カルディナとエルヴィが気を遣っ

て口を閉じた。

「遅くなってすまぬリーズ。わらわは、これまでの非礼をお主に詫びよう。……勝負は、お主の勝ちじゃ」

「うん」

プライドが高く、さらには自分の努力に誇りを自信を持っているシズルだからこそ、その言葉には重みがあった。

恐らく、自分の敗北を受け入れるまで、かなり苦悩したのだろう。

今日の授業を休んだのも、そのせいかもしれない。

それでも、最後には全てを呑み下してみせるのがシズルという少女だった。

「……だが、次は負けぬぞ？　自分の力をもっと磨き、完璧に使いこなした上で、再びお主らと相まみえよう。それまで首を洗って待っておれ」

「うん。私も……負けない」

不敵な笑みを浮かべるシズルに、私は強い視線で応じてみせる。

そのシズルらしい締めくくり方に、エルヴィとカルディナが、シズルに見えないよう苦笑しているのが分かった。

緊張感があるようで、どこか暖かく弛んでいる雰囲気に、私も思わず笑ってしまいそうになる。

だが、その心地良い空気は、螺旋階段の下のほうから歩いてきた凄まじい存在感を持つ二人組によって、吹き飛ばされることとなった。

一人は、長い白髪に赤い瞳をした長身の少年。
もう一人は、亜麻色の髪を長く伸ばした、私よりもさらに小柄な少女。
その少年も少女も、全身を黒に統一した衣服に身を包んでおり、その全身に施された銀の装飾品のせいで、二人が歩く度にジャラジャラと音が鳴っていた。

別に二人は歩いているだけで、特に何かをした訳ではない。
全身の至る所に穴を通して、銀の装飾品を身に着けている少年の外見も、視界に入らなければ、誰も怯むことはないだろう。
目の下に濃いクマを作り、自身の使い魔を抱え込むようして猫背になっている少女も、外面は見るからに陰鬱そうな空気を放っているが、見なければ気にならないはずである。

だが、その二人が近くを通過するだけで、私達の視線はその二人に釘付けとなってしまった。
それは私達だけではなく、塔にいたGランクの全生徒が、同じようにその二人に視線を注いで硬直している。

その二人が歩くだけで、塔内に奇妙な静寂が漂っていた。

やがてカルディナがその二人組の姿を見送ってから、微かに震えを含んだ声を上げる。

「カイム・ヴェルレーとリリス・ヴェルレーだね」
「有名人なんですか？」

険しい表情をして冷や汗を拭うエルヴィの質問に、カルディナが深く頷いた。

「兄妹で組んでるBランクの人だよ。かなり強くて、Aランクになるのは時間の問題だって言われてる」
「なんでそんな人がここにいるんです？　今日はGランクの試合の日でしたよね？」
「何やら違犯をして、BランクからGランクに落とされたと聞いたの。……じゃが、それにしても―」

シズルが何かを言いかけて、言葉を呑む。
その表情が悔しそうに歪むのを見て、なんとなくシズルが何を言いかけたのか理解した。

圧倒的強者。
本来、このランクにいるはずがない者。
あの二人の姿を傍で見ただけで、Gランクの生徒達は、その絶望的な力の差を思い知らされた。
それはシズル達も例外ではなく、未だ自分達が未熟な一年生であるのを自覚させられる。

だが私はそれとは別に、どこか妙な違和感を、さっきの二人から感じていた。
それを目聡く感じ取ったのか、トオルが私に声を掛けてくる。

『どうかしたか？』
『ううん……多分、気のせい……だと思う』
『なんだそりゃ』
『……』

気になることはあるが、関わるべきではないかもしれない。
私はそう思い、とりあえず二人のことは忘れることにした。

だがリーズは、後に意外なところであの二人と相まみえることになる。

第十二話

リーズとエルヴィの二勝目と、シズルとカルディナの初勝利。
お互いに勝利という形で終えた今日のランク戦の後、リーズ達は一旦、カルディナの住む女子寮の部屋へと赴くことになった。
カルディナ曰く、昨日の試合で行っていた賭けの配当が、ようやく纏まったらしい。
結局、あの賭けはエルヴィの一人勝ちという結果になってしまい、その配当金が相当なものになってしまったので、女子寮にまで取りに来て欲しいとのことだった。

リーズ達が狭間の塔を出てから、その話をカルディナから聞かされると、横からそれを聞いてたシズルが、目を丸くして首を傾げる。

「賭けとは何の話じゃ？」

そんなシズルの疑問に、リーズ達は思わず顔を見合わせた。
リーズ達の反応に戸惑っているシズルの様子からして、本気で彼女は賭けのことを知らなかったらしい。
あれだけ生徒の間で話題になっていた事柄を、シズルが今まで知らなかった原因に、リーズ達は知らず同じ結論に思い至った。

「ほら、シズルは目立つけど友達がいないから……」

カルディナが声を潜めてそう言うと、シズルが手に持っていた扇子でリーズ達を指しながら、憤慨の声を上げる。

「聞こえておるぞ！　失礼な！　友達ぐらいおるわ！」
「例えば誰です？」

何気なくエルヴィがそう聞いてしまうと、シズルは言葉を詰まらせて思案した後、視線を明後日の方向へと向けた。

「それは……えっと……」

シズルは頬に伝う冷や汗を、それは気温のせいだと言わんばかりに、扇子でパタパタと煽る。

やがて自分の隠された事実に気がついたシズルが、顔を青くして消え入りそうな声で呟いた。

「お、お主らは……友達ではないのかえ……？」

そんな上目遣いのシズルの言葉に、エルヴィとカルディナは生暖かい笑顔を浮かべて顔を見合わせる。

「なんだか、私の中のシズルの印象が変わりましたよ……」

「私も～」

その一連の流れを、身につまされる思いで見ていた俺は、思わずシズルに同情の声を上げていた。

『ぼっちは辛い……、マジ辛いぞ。どれくらい辛いかというと、思わず昼飯をトイレで摂ってしまいそうになるぐらい辛い』

『……トイレで？』

『実際にやったことはねーけどな』

『……』

俺のその余計な言葉に、どうやらリーズが危機感を募らせたらしい。

リーズは真剣な表情をして、シズルの正面に立った。

「シズル」
「なんじゃ？」
「トイレでご飯は……食べちゃ駄目」
「そんなことせんわ！」

堪らずリーズにそう叫ぶと、シズルは怒りの形相を浮かべたまま、先にカルディナの住む女子寮の方角へと歩き始める。
カルディナとエルヴィは、その背中に苦笑しながら後に続いた。

その歩き出した方角が、リーズの帰る寮とは違う方向だということに、俺は気がつく。

『リーズが住んでる女子寮とは違う場所なんだな』
『うん。女子寮は基本的に、出身国がある地域によって違う』
『へぇ～。地域によって分けてんのか』
『各女子寮は、それぞれの故郷の生活様式に、できるだけ合わせるよう配慮が成されている。特にシズルのいる女子寮などは、外装からして違うものになっている』
『なるほどな』

リーズの歩きながらの解説を俺が理解すると、今度はそのリーズの視界の端に映ったものが気になった。

『あの右の方にある塔は何だ？　何だか狭間の塔に似ている気がするけど……』

俺の言葉を受けて、リーズはその塔に顔を向ける。
リーズ達がランク戦を行った狭間の塔よりも、さらに外観に古め

かしさを加えた上で、その中央をぶち抜くように老木が生えている塔だ。
その老木が、俺にはまるで苦悶に喘ぐ人間のようにも見えた。
そのせいで、ただでさえ不気味な塔の外観を、さらにおぞましいものにへと演出してしまっている。

その塔を眺めていたリーズが、何故かゴクリと唾を飲み込んだ。
そんなリーズの様子に気がついたカルディナが、そのリーズの視線の先にある塔の名前を呟く。
「冥界の塔……だね。リーズはあれに興味があるの？」
「そういうわけじゃない」
「んん？」

首を横に振るリーズの様子に、カルディナが首を傾げる。
それを見たエルヴィが、苦笑を浮かべながら声を上げた。
「あの塔は、見るからに曰わくありげな感じですからね……。リーズは、霊魂の類のものが苦手なのですよ」
「へぇ～、ちょっと意外だね」

カルディナが何気なくそう言うと、リーズが気丈な声でそれを否定する。
「違う……別に怖くはない」

その会話を聞いていたのか、先頭を歩いて背中を見せていたシズルが、唐突にリーズ達を振り返った。
その顔に挑発的な笑みを浮かべて、シズルがリーズの双眸を見据

える。

「なら、わらわ達の勝利祝いじゃ。今夜あたり、少しやってみるかえ？」

「何を？」

「冥界の塔の探索じゃよ。……肝試しとも言うの」

「あ、それ面白そうだね～」

そのシズルの言葉に、リーズが内心で激しく動揺したのを、俺は感じ取った。

『やっぱりお前、お化け怖いんじゃねーか』

『怖くない』

リーズは意地なってそれを否定する。

それに何かを察したエルヴィが、リーズの顔を心配そうに覗き込んだ。

「リーズ、無理することはないですよ？」

そんなエルヴィの気遣いの言葉がトドメになり、リーズはもう完全に意固地になってしまう。

そして実は心にもないことを、リーズは口走っていた。

「無理はしてない……面白そう」

「私もちょっと気になってたんだよね～」

「たしかに楽しそうですけど……むむ」

そんな三人の反応に、シズルは満足そうに頷く。

「ふむ。なら、決まりじゃの？」
「……」
シズルが、ニヤニヤとした笑みを浮かべながら、リーズに確認した。
リーズは内心で怯みながらも、それに気丈に頷いて見せる。
そんなリーズの強がりにより、今日は冥界の塔で肝試しをすることが決定してしまった。
どうやら今夜は、リーズにとって長い夜になりそうである。

第十三話

それは、夜の闇が薄い満月の日に行われることになった。

俺の世界でいうと、今の時刻は学校が終わって自宅に帰宅したぐらいの時間だが、リーズの世界では完全に真夜中である。

普通の生徒ならば、とっくに次の日に向けて睡眠をとっているような時間帯。

そのような時刻に、リーズとエルヴィ、そしてシズルとカルディナの四人で、冥界の塔と呼ばれる建築物の扉の前へと立った。

その夜の闇を纏った外観は、日中の空の下で見るよりも遥かに禍々しい印象を受けてしまう。

塔の天井を突きや破って生えている老木の姿も、今では本当に人間の苦悶の声が聞こえてきそうなほど、おぞましい様相になっていた。

その見るからに何かが出てきそうなその塔の外観を眺めて、リーズとシズルは揃って口の中の唾を飲み込む。

リーズだけではなく、今回のことを言い出したシズルまで顔面を蒼白にさせているのを見て、エルヴィが呆れた声を上げた。

「自分も怖いなら、何で肝試しをしようなんて言い出したんです？」

「わ、わらわは怖くないぞ！　怖がってるのは、リーズではないかえ？」

「私も……怖くない」

意地を張り合うリーズとシズルに、エルヴィは苦笑してしまう。
そんな内心では怯えに怯えているリーズ達とは裏腹に、カルディナは冥界の塔に興味津々といった様子で目を輝かせていた。
「カルディナは楽しそうですね？」
「冥界の塔は、最近は特に生徒達の間で噂になっているから興味があったんだよ～」
「それは初耳ですね……どのような噂なのですか？」
「この塔にはね、文字通り、冥界に繋がった狭間の扉が残っているらしいよ」
カルディナ曰く、冥界の塔という名前は、この塔の本来の正式名称ではないらしい。
ただ、とある事情により廃棄されることになったこの塔に、忍び込んだ生徒達が何度も怪奇現象と遭遇していることによって、そういう名前が付いてしまったのだとか。
「少なくとも、何かがあるのは確実らしいよ？　この塔は立ち入り禁止にはなっているけど、忍び込む生徒は多いんだって。その生徒ほとんどが、何かしらの怪奇現象に襲われてるの」
「そ、そうなのですか……」
カルディナの話を聞いて、流石にエルヴィも少し怖くなったのか、連れてきたモクを縋るように抱きしめる。
不覚にも、しっかりとその話を聞いてしまったリーズとシズルは、もう喋る余裕さえないほどになっていた。
そんな三人に構わず、カルディナは実に楽しそうに声を弾ませながら、冥界の塔の扉に手を掛ける。

「じゃあ行くよ？　心の準備はいい？」
「……」

誰も返事をしなかったことを気にした様子もなく、カルディナが半分壊れてしまっている鉄扉を押す。
すると、ギギギギギといった不気味な音を響かせて扉が開き、塔内の闇に月明かりを射し込ませた。

だが、それだけで塔内の闇を払えるはずがなく、カルディナが予め持ってきていた松明に火を灯す。それによって、狭間の塔のものと酷似した螺旋階段がずっと下に続いている様子が照らし出された。

『そういえば、灯りには松明使うんだな……魔法でパーっと照らしたりはできないのか？』
『そういう魔法も、ないこともない。でもそれには、誰かが常に声を出して詠唱している必要がある。そういうのは、魔力の消費も大きい』
『あ～、確かにそれはめんどくさいな』
『うん』

リーズが俺の疑問に答えながら、冥界の塔の内部へと足を踏み入れる。
余裕のあるカルディナを先頭にして、エルヴィが後ろに続き、最後尾にリーズとシズルが横に並ぶという配置で中に入り、塔内の螺旋階段を降りて行った。

皆が口を閉ざしたまま、黙々と階段を降り続けるという状況に耐えられなくなったのか、リーズは俺に追い詰められた声で懇願してくる。

『トオル、お願い。何でもいいから喋って欲しい。静かになると怖い……』
『やっぱり怖いのか……えーっと、どんな話がいいよ？』
『声がしているだけでいい。だから歌って』
『歌！？　いや、まーいいけどよ……いや、恥ずかしいなこれ…』
『はやく、トオル』

急かすリーズの声に応じて、俺は自分の好きなアニソンを選んで、歌うことにした。

『きたいの～うらにはぁ～よそうどおりのまぶしさ～♪』
『……トオル、音痴』
『……』

ボソっと呟かれたリーズの感想に、俺がショックを受けて黙り込む。
それと同時に、それまで辺りの闇を払っていた松明の炎が、ふと唐突に消えてしまった。
視界が一寸先をも見渡せない暗闇に包まれると、続けてリーズは何者かに押し倒されてしまう。

その突然の出来事に、リーズはパニックを起こしてしまった。

『トオル！　歌って！　歌って！』
『つたえにきたよ～きずあとたどって～♪せかい～♪』
『トオル！　音痴！』
『うるせぇ！』
『トオル、どうしよう！』
『俺の携帯に照明になるものが付いてる。だから落ち着け』

リーズは俺の指示に従って、まずはギャラクシー起動させる。
その画面から放たれる光だけで、とりあえずリーズを押し倒した者の正体は判明した。

自分の体にしがみつき、目を固く閉じて体をカタカタと震わせているそれに、リーズは安堵の息をついて、その名を呼ぶ。

「シズル……」

リーズが携帯の照明を点灯させ、近くを見渡せる程度には辺りが明るくなった所で、やっとシズルが落ち着きを取り戻した。

シズルは我に返ると、自分の失態を誤魔化すように一つ咳払いをしてから、リーズを解放して立ち上がる。
その耳まで赤くなった自分の顔を隠すようにして、シズルは扇子を広げた。

「す、少し転んでしまっての……」
「シズル……その言い訳は……苦しいと思う」
「――っ」

やはり自覚があるのか、シズルは声を詰まらせてますます赤くなる。
と、そこでシズルはあることに気がつき、首を傾げた。

「そういえば、カルディナとエルヴィはどうしたのじゃ？」
「っえ」

リーズはパニックによって失念していた二人の姿を探して、辺り

を見渡す。
だがその二人の姿は、どこにも見当たらなかった。
その事実に、リーズとシズルは顔を見合わせる。
リーズもシズルも一瞬、互いに怯んだ表情を見せるが、すぐに二人とも表情を引き締めてみせた。
その二人の瞳に、怯えを掻き消す強い意志の光が灯される。
「二人を見つけるまでは帰れんの」
「うん」
「何が相手かは知らぬが、わらわのパートナーを拐かした罪は重たいぞえ？」
「そう」
塔に入った頃の怯えようとは打って変わって、不敵な笑みを浮かべるシズルに、リーズは心から同意した。
『お前ら、やっぱり似てるな……』
『そう？　自分では分からない』
リーズは俺の声に応じながら、消えた二人を探すべく歩みを再開させる。
とりあえずリーズとシズルは、塔の最下層を目指すことにした。

第十四話

私とシズルが最下層を目指して階段を降り始めると、すぐに冥界の塔の天井にある僅かな隙間をくぐって、青いドラゴンが舞い降りてきた。

どこか焦った様子でシズルの傍にまで飛んできたドラゴンは、シズルを心配するかのように鼻先を擦りつける。

そのドラゴンの頭を愛おしそうに撫でるシズルが、ふと思い出したように呟いた。

「そうじゃった。さっき取り乱……転んでしまった時に、思わず呼んでしまったのを忘れておった」

「……」

あくまで転んだだけだと言い張るシズルに、私はもう何も言わないことにする。

今はとにかく、エルヴィとカルディナが消えてしまった原因を突き止めるのが先決だった。

「だがもしかしたら、こやつの出番もあるやもしれん。連れて行こうと思うのじゃが、よいかえ？」

「いい」

私は頷きながら、少し早足で螺旋階段を降りていく。

エルヴィとカルディナがどうなってしまったのか、私は心配で堪らなかった。

もしかしたら、無事ではないのかもしれない。

そんな嫌な憶測が心をかすめるたびに、胸の中の不安が膨らんでいく。

それは隣のシズルも同じなのか、自然と早足になってしまう私に、文句を言わずにペースを合わせてきた。

沸き上がってくる不安を紛らわせるかのように、シズルが私に話し掛けてくる。

「その光は、使い魔の特性なのかえ？」

「うん。本来はシャシンやビデオを記録する為に使うものらしい」

「シャシン？　ビデオ？　なんじゃそれは？」

「……これ」

私はシズルに、今起動しているビデオ録画を見せることで、それを説明した。

それを隣から覗き込んだシズルが、そこに映されている映像に思わず感嘆の声を漏らす。

「ふむぅ……お主の使い魔は、本当に不思議じゃのう」

「私も……そう思う」

私達はそんな会話をしながらも、先へと進む足は止めていない。

だがそんな私達の歩みは、宙に浮かぶ二つの赤い光点が視界に入ったことで、中断することとなった。

私は少し怯みそうになる心を意志の力で叱咤しながら、その赤い光点に向けてギャラクシーの放つ照明を向ける。

その光に照らされて姿を現したものに、私とシズルは同時にそれの正体を口にしていた。

「ナイトメア？」

それは黒い毛皮とフサフサの大きな尻尾が特徴的な、小型の召喚獣の名称である。

先程の赤い光点のように見えたのは、その召喚獣の赤い瞳がギャラクシーの光を反射していたせいのようだった。

私とシズルがナイトメアと呼んだその召喚獣の外見を見て、トオルが少し和んだような声を送ってくる。

『何だか犬みてーな外見だな……。ナイトメアってのは強いのか？』

『希少種ではある。強いかどうかは、同じ種族でも個体差が大きいから分からない』

『でも、強そうには見えねーよな』

『……うん』

召喚獣の強さに姿は関係ないことは分かっているのだが、思わずトオルの言葉に同意してしまう。それ程に、その召喚獣は愛らしい姿をしていた。

私がその非常に可愛らしい召喚獣を眺めると、ふとそのナイトメアに既視感を覚える。

この召喚獣を、私はごく最近に見かけなかっただろうか？

私がそれに首を傾げると、そのナイトメアが唐突に人間の言葉を喋り始めた。

「こんばんは。貴方達、一年生よね？　ここで何をしているの？」

私はそれに、目を丸くしてシズルと顔を見合わせる。
その様子を見ていたトオルが、私の頭の中で驚いたような声を上げた。

『召喚獣って、喋れるんだな……』
『違う。たしかに召喚獣には人語を話せる種も存在するけど、ナイトメアはそうじゃない』
『じゃあ、どういうことだ？』
『恐らくナイトメアの特性によって、主の声を私達に伝えているのだと思う。正確には、伝えているように錯覚させている』
『え、錯覚なのかこれは？』
『多分そう。ナイトメアには、その赤い瞳によって他者の視覚や聴覚に影響を与える特性がある』

私がトオルにそう解説してる間にも、ナイトメアは言葉を続けていた。

「ここは危ないから、帰ったほうがいいわよ？」
「そういう訳にもいかんのじゃ」

シズルが眉をひそめてぼやくと、ナイトメアが小首を傾げて事情を伺ってくる。

「何かあったの？」
「友人が二人、この塔で姿を消してしまったのじゃ。あやつらの無事を確認するまでは、帰るわけにもいかなくてのぅ……」
「……なるほど、なんとなく事情を理解したわ」

ナイトメアがそう言うと、私とシズルに背を向けた。

「付いて来て」

そのナイトメアの誘いに、私はシズルと顔を見合わせから、後に続くことにする。

やがてさらに塔の下層にまで降りていくと、その途中で階段を上ってきた者と遭遇した。

その者の姿を見て、私は何故ナイトメアに既視感を覚えたのかを理解する。

長い亜麻色の髪に、その下に濃いクマができている碧眼の双眸。

全身を黒色の服で統一し、その上からあらゆる銀の装飾を身に着けているその姿は、私がランク戦を終えた時に、遠くから見ていた者と同一人物であった。

ナイトメアが、その少女の腕の中へと飛び込む様子を見届けながら、私はその少女の名を呟く。

「リリス・ヴェルレー……」

「あら、自己紹介の必要はなさそうね」

私のその声に反応を示したのは、本体ではなくナイトメアだった。

その本体であるリリスは、気怠そうに背筋を曲げて顔を俯かせてしまっている。

ナイトメアが、その陰鬱な雰囲気を漂わせているリリスを補うようにして、明るい声を上げた。

「じゃあ、貴方達の名前を教えてもらえるかしら？」

その奇妙な様子に戸惑いつつも、私達はそれぞれに自分の名前を告げる。

「リーズ・アンクティル」

「一年生のシズル・ミナモトじゃ。よろしくの」

私達の自己紹介に、リリスではなくナイトメアが頷くと、改めてその赤い瞳を私達に向けた。

「じゃあ、シズルとリーズ」

ナイトメアが私達の名を呼びながら、リリスの腕の中から出てきて姿勢を正す。

そして真面目な声で、ナイトメアは私達にそれを言い放った。

「今から冥界に、貴方の友達を助けに行きましょう」

私はその言葉の意味を理解するのに、少しだけ時間を要した。

＞i354438－41164＜

第十五話

リリスの提案により、リーズとシズルは冥界の塔の最深部ではなく、その途中にあるという備え付けの個室へと案内されることになった。

三人で螺旋階段を降りながら、リリスからナイトメアを通じて説明される冥界の塔の事情に、シズルが眉間に皺を寄せる。

「ではこの塔は、本当に冥界へと繋がっておると言うのかえ？」

「少なくとも、私はそう信じてるわ。あの場所は冥界だって」

シズルの懐疑的な声に、リリスの使い魔であるナイトメアは、自信を含ませた声で応じた。

その口ぶりだと、リリスは既にその冥界らしき場所に行ったことがあるようである。

リリス曰く、この塔が廃棄されることになったのは、その冥界と繋がってしまったことが原因だったらしい。

そして長年放置されている内に狭間の扉だったものが壊れてしまい、そこにあった異世界への入り口の枠組みがあやふやになって、塔内で無作為に散在するようになってしまったのだとか。

恐らくエルヴィとカルディナは、偶然に発生したその入り口に足を踏み入れてしまったのだろうと、リリスは推論を述べてみせた。

それらをリーズ達に話している間、リリスは常に体をフラフラとよろめかせて、足を動かしている。

その様子を見ていた俺が、その足取りに思わず心配の声を上げてしまった。

『それにしても、あのリリスって人、何か危なっかしいな』
『うん』

リーズも同じことを思っていたのか、その視線は終始リリスの足下に注がれている。どうやらリリスが躓きそうになったら、素早く助けるつもりでいるらしい。

どこまでも長いこの階段を、もし転がり落ちたりしたなら、普通に死んでしまうだろう。
俺とリーズは、どこかハラハラとした気分でその足取りを見守っていた。

だが結局、最後までリリスが躓くことはなく、リーズ達は無事に目的の部屋へと到着することになる。
かつては管理者用の休憩室だったらしいその部屋は、今ではすっかり朽ち果てて……はおらず、最近に改装されたかのような真新しい部屋に変貌していた。

ひたすら白と黒に統一された内装や、至る所に飾られているドクロの形をした燭台など、かなり悪趣味な部屋に仕上がってはいるが、間違いなくそこには生活臭がある。

その部屋にリーズとシズルが目を丸くすると、ナイトメアが苦笑混じりの声を上げた。

「言い忘れてたけど、私は此処に住んでるの」
「えっ……？」

リーズが思わず耳を疑って、聞き返してしまう。
その衝撃の事実に、シズルが頬を引き攣らせた。

「よく学院が許可したものよの……というか、危険ではなかったのかえ？」
「此処だけは大丈夫なのよ。この室内にある臨時用の狭間の扉は、まだ壊れていないから。あと学院には無断で借りてるから、秘密にしててね」
「無許可……」
「……」

あっさりと明かされる校則違反に、リーズとシズルは絶句する。

リーズを通してその話を聞いていた俺は、思わず疑問の声を上げていた。

『それって大丈夫なのかよ……』
『全然大丈夫じゃない。バレたら懲罰もの』
『所謂、不良生徒ってやつか。まさか異世界の学校にいるとは……』
『……？』

俺の言葉がよく分からなかったのか、リーズが頭に疑問符を浮かべると、その視界の端で蠢くものがあった。
リーズがそれに気がついて、ふと視線をそちらに向ける。

すると、その先にあった天蓋付きのベッドにて、長い白髪の男が上半身を起こしているのが視界に入った。
その赤い瞳をした見覚えのある男に、リリスが慌てて駆け寄る。

「あ、ごめんなさい兄さん。起こしてしまいましたか？」
「……」

ナイトメアのその声に、兄と呼ばれた男が視線を彷徨わせてリーズ達を見回した。

『こいつって、たしか……』

『カイム・ヴェルレー』

リーズが、心話の中でその名を呟く。

それは元Bランクの実力を持つリリスの相方であり、また実兄でもある人物であった。

まだ少し寝惚けているのか、どこか反応の薄いカイムに、リリスがナイトメアを通してリーズ達を紹介する。

「ええっと、この二人は一年生の――」

「シズル・ミナモトじゃ。よろしくの」

「リーズ……アンクティル……よろしく」

「……」

だがリーズ達の言葉に、カイムは興味を示した素振りさえ見せずに無視した。

そのカイムの反応に、シズルが不満そうに呟く。

「なんじゃ、無愛想な奴じゃのう……」

そのシズルの声は、リリスにも聞こえているはずだった。

だがリリスは、自分の兄の態度を咎めることもなく、ナイトメアに言葉を続けさせる。

「二人のお友達が冥界に迷い込んだみたいなの。だから、ちょっと向こうに行ってきますね。兄さん」

「……」

兄さんと呼ばれたカイムは、何も語らず無表情のまま、リリスの頭を撫でた。

それに、リリスは心地よさそうに微笑む。

その様子を見ていた俺は、何かそこに小さな違和感を覚えるが、それが何なのかが分からない。

だが俺は、その違和感に何とも言えない気持ち悪さを感じた。

『う～ん、仲のいい兄妹に見えるんだけど……』

『……』

『リーズ？』

俺には、今のリーズがどんな表情をしているのかが分からない。

だがシズルが、リーズの顔を見て首を傾げているのを視界の端に捉えて、何か様子がおかしいのだということは分かった。

『一体どうした？』

『……そうだ、もしかしたら……トオル、ちょっと聞きたいことがある』

『何だ？』

『このアプリの機能について、もう一度詳しく教えて欲しい』

リーズの視界を通して、俺が携帯電話の画面を覗く。

そこに映し出されたものを見て、俺はだいたいのことを察してしまった。

『なるほどな……つうか、これは使えるかも』

『うん』

ギャラクシーに新しい発見があったのは嬉しいのだが、俺はそれに少し不安を覚えてしまう。
それでどうするのかはリーズ次第だが、これは一波乱ありそうだと俺は思った。

第十六話

リリスの部屋にあった狭間の扉をくぐると、途端に吹き付けてきた極寒の風に、私は堪らず目を細めて顔を庇った。
その痛みを伴うほどの寒さに、私は思わず声にならない悲鳴を上げてしまう。
激しく荒れ狂う風によって、それ以外の音を全て遮ってしまうような環境の中、ナイトメアの声が不自然なほどはっきりと、私の耳に届いた。

「死ぬほど寒いから、使い魔と融合した方がいいわよ？」
「そういうことは、扉をくぐる前に言って欲しいのう！」
「――っ！」

ナイトメアに言われずとも、私は既に自身の使い魔との融合を試みている。
私がギャラクシーとの融合を果たしたのを感じると、寒さへの耐性が強化されて、それまで私を苛んでいた痛みが引いた。

見ると、シズルとリリスもそれぞれの使い魔と融合を果たしているようである。
リリスは自身の使い魔と融合を果たした影響なのか、目の下のクマが綺麗に消えていた。その青白かった顔色に生気が戻り、臀部から生えている大きな黒い尻尾を、フルフルと左右に振っている。
その様子は、先程までの陰鬱そうな人物とは別人のようであった。

そんなリリスに思うところがあるものの、今はそれを保留にする。
融合によって余裕のできた私は、周囲を見回して辺りの景観を確かめた。

私が足を踏み入れたそこは、見渡す限りの地面が白色に染められた、雪原の上だった。
空が分厚い雲に覆われ、地上に降り注ぐ光のほとんどを遮断されたその世界は、激しい吹雪の影響も相俟って、酷く視界が悪い。
そんな中で、遠くにチラチラと見え隠れするものに、リリスがこの世界を冥界だと主張する理由を私は思い知らされた。

まるで水中にいるかのような動きで、その透き通った体を宙に漂わせているそれに、シズルが少しだけ畏怖の入り交じった声で呟く。

「あれは……幽霊かえ？」
「そうよ。……ああ、気をつけてね。あの幽霊達って生身の人間を見ると――」

そのリリスの言葉が終わる前に、シズルの体が小さな炎に包まれた。

シズルを襲ったその炎に、私は驚愕に目を見開く。
ドラゴンと融合したシズルの体に、その程度の炎でダメージがあるわけではない。私が驚いたのは、それがフレイムという火属性の下位魔法だったからだ。

突然の攻撃に虚をつかれ、シズルが呆けたような表情をするのと、リリスの言葉が終わるのは同時だった。

「生身の人間を見ると、攻撃してくるの。呪文が使えるみたいだから注意してね」
「……だから、そういうことは事前に言ってくれんかの」

シズルが抗議の声を上げている間にも、幽霊がまるで笑っているかのような声で呪文を唱えてくる。
しかも周囲をよく見渡すと、幽霊はシズルの視線の先にいる者だけではなかった。
最初のシズルへの攻撃を切っ掛けに、別の幽霊達がどんどんその姿を現し始める。
気がつけば無数の幽霊達が、私達を取り囲むようにして宙を漂っていた。

地上どころか空の上まで、まさに全方位にいる幽霊達が一斉に、私達に向かって攻撃呪文を唱えてくる。
流石にシズルも、それには焦ったような声を上げた。

「こ、これはまずいのう」
「……」

私は幽霊達を一掃すべく、手早く高速詠唱による大魔法を起動しようとして……すぐに思い止まる。
大魔法を起動すれば、その絶大な威力によって周囲を巻き込んでしまうからだ。
シズルやリリスは、私の防御魔法の内側に来ることで余波から守れるだろう。
だがもしエルヴィやカルディナが近くにいたとしたら、彼女らに危険が及んでしまう。
今回はランク戦と違って、その身に深いダメージを負っても、強制送還してくれる者がいないのである。

だから私は大魔法をやめて、ライトニングの連続起動で応戦しようとした。
だがその前に、幽霊達が一斉に唱えていた呪文を乱れさせ始めた

のに気がつき、私は手を止める。

その詠唱をしては失敗を繰り返すようになった幽霊達を見て、ナイトメアと融合したリリスが得意気に声を弾ませた。

「私の能力があれば、幽霊は怖くないわよ。奴らは魔法を封じれば、他に攻撃手段がないからね」

リリスは、融合によって赤くなった瞳に淡い光を湛えながら、周囲の幽霊達を見渡す。

ただそれだけで、幽霊達は完全に呪文を封じられていた。

その様子を見て、トオルが私の中で疑問の声を上げる。

『あれは、どういうことなんだ？』

『多分、詠唱の認識を錯覚によってズラしているんだと思う。流石に元Ｂクラスだけあって、その影響を与える範囲が格段に広い』

『……すまん、よく分からん』

『分かり易く説明すると、相手に呪文をどこまで唱えたのかを勘違いさせて、途中で詠唱を失敗させてるということ。つまりリリスのナイトメアの能力は、相手の呪文の一切を封じることができる。……そしてその能力の影響は多分、呪文のみに限らないと思う』

『なんか反則みたいな能力に聞こえるんだが？』

『……うん』

トオルが反則だと称した能力を駆使して、リリスは幽霊達の間を悠々と歩んでいく。

シズルはそのリリスの能力を垣間見て、驚愕を通り越して苦笑いをしていた。

「Ａランクになるには、あやつを越えねばならんということか……」

その瞳に静かな闘志を滾らせて、シズルはリリスの背中に続く。
私も同じようにリリスを後を追いながら、その視線は周囲の幽霊達を見回していた。

そして、その中にあるものを見つけて、私は自分の推測に確信を得る。

『やっぱり……』
『どうかしたか？』
『うん』

私はトオルにそれを説明しながら、リリスの背中を見据えた。

その瞳に、シズルとは違う感情を含ませて。

雪原を歩んでいくと、エルヴィとカルディナとの再会はすぐだった。
遠くから私達の姿を確認したエルヴィが、嬉しそうに声を弾ませ

ながら、こちらに駆け寄ってくる。
その無事そうな姿に、私は小さく安堵の息を吐いた。
「リーズも此処に来てたんですね！　階段を降りてたら、急に此処に放り出されて驚いたのですよ。それで、今はどうやって帰ればいいのか途方に暮れてまして……あれ？」
エルヴィが、リリスの姿に気がついて目を丸くする。
するとシズルが、この世界に来ることになった経緯までを、エルヴィとカルディナに説明した。
「つまり、彼女のお陰で私達は大事にならずに済んだのですね……。ありがとうございます！」
「いえいえ、可愛い後輩に何事もなくて良かったわ」
リリスは先輩を気取りたかったのか、なるべくすました顔でそう応じる。
だがその大きな尻尾を激しく左右に振っているせいで、色々と台無しになっていた。
むしろ私より背が低いリリスは、エルヴィと並ぶとどっちが年上なのか分からなくなる。
思わず弛みそうになる頬を必死に堪えているエルヴィに、助け船を出すようにしてシズルが声を掛けた。
「それにしてもお主ら、よく無事じゃったのう……」
「え？　何がですか？」
「ん？　お主らは幽霊に襲われなかったのかえ？」
シズルがそう尋ねると、エルヴィとカルディナは顔を見合わせた。

そして、二人とも首を傾げながらシズルに視線を戻す。

「幽霊とは何ですか？」

「別に何も出てこなかったよ？」

「……んん？」

エルヴィとカルディナの反応に、今度はシズルが首を傾げる。

私はそれに少し逡巡したものの、今は口を閉ざすことにした。

第十七話

リリスの協力のお陰もあって、無事にエルヴィとカルディナを発見することができ、リーズ達は早々に雪原の世界から帰還することになった。

元の世界のヴェルレー兄妹が住み込んでいる部屋へと帰ってくると、リーズ達はそれぞれ自身の使い魔との融合を解く。

するとナイトメアとの融合を解いたリリスが、急に体をふらつかせて倒れ込んだ。

「リリス先輩！？　大丈夫ですか！？」

「大丈夫。少し立ち眩みがしただけだから……」

喋らないリリスの代わりに、ナイトメアがそう説明する。

だが中々に立ち上がれないでいるリリスの様子を見る限り、それがただの立ち眩みではないのは明白だった。

床の上で藻掻くリリスに、慌ててエルヴィとカルディナが駆け寄って手を貸す。

リーズは自分の妹が倒れたというのに、ベッドに腰掛けたまま身動き一つしないカイムを見て、迷っていたことに踏ん切りがついたようだった。

俺はなんとなくそれを察して、リーズが今から背負い込もうとしているものに、強い不安を覚えてしまう。

『本当にいいのかよ？　上手くいったとしても、絶対に恨まれるぞ？』

『いい。リリスは、あんな状態になっていてもエルヴィとカルディ

ナを助けるのに協力してくれた。そんな人を、私は放置しておけない』
『リリスにとったら余計なお世話だぜ？』
『それでも』

リーズは俺にそう言い切ると、リリスが落ち着くのを待ってから、予め考えていたことを彼女に伝えた。

「私とランク戦の試合をしたい？」

リーズのその提案に、ナイトメアが戸惑った声を上げる。
いつもは陰鬱そうに伏せられているリリスの瞳にも、今は少しだけ驚いたような感情の動きを見せていた。
リーズはその目を見据えて、はっきりと頷く。

「うん」
「別に良いけど……私は顔見知りだからって手を抜いたりはしないわよ？」
「それでいい」

リーズのその申し出に、エルヴィとカルディナが目を丸くする。
リリスの能力を実際に見て知っているシズルは、その無謀とも思えるリーズの挑戦に懐疑的な声を上げた。

「一体、何を考えておるのじゃ？　勝算はあるのかえ？」
「……」

シズルは沈黙で応えるリーズに何かを感じ取って、今度は探るような視線を向けてくる。
リリスも、リーズのそれが単なる気紛れではないと判断したのか、

ナイトメアの声色を真面目なものに変えた。

「日取りはいつにする？」
「出来るだけ……早くがいい」
「？　随分と急ぐのね？」
「うん。早く……戦いたい」
「……いいわ、じゃあ明日に試合の申請をして、明後日に相見えましょう」

話が決まると、それまで静かにベッドに腰掛けていたカイムが立ち上がり、リリスの隣に並ぶ。
二人の好戦的な視線が、強者としての迫力を伴ってリーズに集中した。

「リーズ・アンクティル、私達は貴方の挑戦を受けて立つわ」

リリスのその言葉に、リーズは負けじと強い視線で応じた。

「エルヴィ……勝手に決めて……ごめん」

リーズ達が冥界の塔を後にすると、リーズは開口一番に謝罪の言葉をエルヴィに掛けた。

ランク戦とは、原則的に二人対二人で行われる。

つまりリーズがヴェルレー兄妹と戦うということは、必然的にリーズの相方であるエルヴィも兄妹と戦うことになるということだ。

今回の試合は、エルヴィに対して事前に何の相談もせず、リーズの独断で決めたことである。

だから本来、エルヴィは怒って当然の立場なのだが、彼女は特に気にした様子なく笑って見せた。

「いいですよ。リーズには何か思うところがあったのですね？」

「うん」

『いい友達だな……』

『……うん』

俺の言葉に、リーズが申し訳なさそうな声で応じる。

どうやらエルヴィの人柄に甘える形になってしまったことを、リーズは反省しているようだった。

だがリーズが気分を沈ませる前に、先程から何かを聞ききたそうにウズウズしていたシズルが、堪えきれずに声を上げる。

「それで、一体何があったのじゃ？　思えば冥界に行くことになってからずっと様子が変じゃったが……」

「あそこは……冥界じゃ……ない」

「何か知っているのかえ？」

「うん」

リーズはシズル達に、自分が幽霊達の中に見覚えのある顔を見つけたことを説明した。

それは昨日の夕方にあったランク戦の相手である、上級生の二人組とそっくりだったのである。

この短い期間にあの上級生二人が死んだ可能性もあるが、それよりはもう一つの説のほうが可能性が高いとリーズは判断した。

それは召喚された前例が少なく、あまり知られていない種族の召喚獣――

「ドッペルゲンガー……」

エルヴィが、その種族名を呟く。

彼女もその召喚獣のことを知っていたらしく、その名前だけで大体のことを理解したようだった。

ドッペルゲンガーとは、人の持つ記憶の何かを模写する特性を持つ種族のことである。

あの雪原地帯は、そのドッペルゲンガーの巣だったのだ。

そしてそのドッペルゲンガー達は、自分達の縄張りに侵入してきたリーズ達を撃退するべく、リーズ達の戦闘の記憶から、対戦相手を模写したのだろう。

流石に召喚獣と融合した姿や特性までは模写できないらしいのだが、人の身でも可能な呪文くらいなら唱えてくるらしい。

「なるほど、私はまだ全然試合をこなしてませんからね。だから、幽霊に襲われることがなかったということですか」

「つまりあの時の幽霊達の大半は、リリスが今まで戦ってきた連中を模写したドッペルゲンガーだったということかえ？　それなら、

リリスも気がつきそうなものじゃがのう……」
「多分リリスも……本当は……分かっている」
「どういうことじゃ？」

リーズは自分の使い魔であるギャラクシーを取り出し、ビデオを起動してみせた。
これを照明代わりに使う時は、ビデオを録画状態にする必要があったので、リリスと塔で出会った時の記録も残っている。

そこには、リリスが口を絶えず動かし続けている様子が映し出されていた。
そこから聞こえてくる呪文の内容を聞いて、シズルが納得したような声を上げる。

「なるほどの……」
「どういうこと？」

いまいち話の流れを掴めていないカルディナが首を傾げると、シズルは不覚を取っていた自分を恥じるような声で説明した。

「わらわ達が冥界の塔でリリスと会った時、呪文など唱えておらんかったのじゃ。わらわの認識ではな」

つまりシズルは、リリスと出会った時からずっとナイトメアに、リリスが唱えている呪文への認識を消されていたのである。
恐らくリリスは、リーズ達に唱えている呪文の内容を聞かれたくなかったのだろう。

「だから使い魔に喋らせておったのか……」
「リーズ、この呪文は……」

「うん」

エルヴィも、その呪文の内容を理解して、だいたいの事情を察したようである。

リリスがあの世界を冥界だと言い張っていたこと。
そこにいた人の記憶から模写を行うドッペルゲンガー。
目の下にクマを作り、酷く憔悴したリリス。
永遠と詠唱が続けられる呪文とその効果。

それらが示す一つの推測を、リーズは口にした。

「リリスの兄は……もう死んでいる」

第十八話

波乱の肝試しを終えた翌朝。
私にとってはいつもと変わらない時間に学院へと登校すると、ちょうど大講堂の入り口あたりでエルヴィと鉢合わせることになった。
昨日帰宅したのが遅い時間だったこともあって、珍しくエルヴィの登校が遅めになったらしい。
未だ半分ほど閉じてしまっている瞼を右手の甲で擦りながら、エルヴィは力のない声を上げた。

「リーズぅ……おはようです」
「おはよう」

私が挨拶を返すと、エルヴィは大きな欠伸をして、また右手の甲で瞼を掻く。
その様子を見て思ったことを、私はそのまま口にした。

「エルヴィ……眠そう」
「眠いです。昨日はあまり寝る時間が残っていなかったですし……リーズはわりと平気そうですね？」
「私は……馴れている」
「流石リーズです……シズルは多分、普通に遅刻してきますね」
「……うん」
『あいつ、朝弱いのか？』

エルヴィと会話を交わしていると、私と感覚を共有していたトオルが、その話題になったシズルのことを聞いてくる。
私はそれに、何だか胸の奥でモヤッとしたものを感じた。

『そういうわけじゃない。シズルには少しサボリ癖があるだけ』
『サボリ癖って……出席とか大丈夫なのか？　そういうのって怒られたりしないのかよ？』
『成績さえ伴っていれば咎められることはない。そもそも教師は、生徒の出席を元から確認していない』
『あ～、そういえばそうだったな』

トオルの何気ない声に、胸の中のモヤモヤが強くなる。
そのモヤモヤに駆り立てられるように、私は意図していなかった言葉を漏らしてしまった。

『……トオル、シズルのことが気になる？』
『まあ、見てて愉快な奴だしな』
『そう』
『ん？』

私の反応に、トオルが頭に疑問符を浮かべていることが分かる。
でも、私も自分の胸の中にあるモヤモヤの正体が掴めない。

私はその胸の異変のことを考え込みながら大講堂に入って……先程まで考えていたことを、全て忘れてしまった。

大講堂内にいる数多くの一年生達が、一斉に私達に視線を向けてきたのである。
その大量の視線を浴びてしまっているこの状況に、隣にいたエルヴィも驚いて目が覚めたようであった。

『なんだか既視感のある光景だな……つい最近、同じことがあったような？』
『うん。多分今回も……』

「一体、何ですかこれは？　私達、なんでこんなに注目されているんでしょう？」

私がそのエルヴィの問いに答える前に、私達を待ち構えていたらしいカルディナが、先に声を上げた。

「リーズ、エルヴィ！おはよう」
「おはよう」
「おはようございます。カルディナは知ってますか？　私達、なんで注目されているのでしょう？」
「ああ、それはね――」

そのカルディナの言葉を先取りして、私は上から声を被せる。

「また賭け？」
「うん。その通り」

私の呆れた声を、カルディナは気にかけた様子もなく笑った。

「今回も、一年生のほとんどが参加するみたいだよ？　ドラゴンに圧勝した一年生対元Bランクの猛者。注目の組み合わせだけど、やっぱり大半の人はヴェルレー兄妹に賭けてるみたい」
「懲りませんねぇ……」
「みんな、お祭り騒ぎがしたいだけなんだけどね」
「……」

私はそれに、何となく思うところはあるものの、今は黙っておくことにする。

それを煽っているというか、それ以前に賭けを企画しているのは

恐らくカルディナだと私は思っていた。
でも今回は、エルヴィが大金を賭けてしまうこともないし、私にとっても特に害はなさそうなので気にする必要はない。
私のそんな内心を知らずに、カルディナは楽しそうな声で言葉を続けた。
「でも今回の試合は、一年生だけじゃなくて上級生も注目すると思うよ？」
「そうですか？　同級生はともかく、Gランクの私達との試合なんて上級生は気に留めないと思いますけど……」
「少なくとも、私がいる寮の先輩は興味を持ったよ？　何せ、相手はBランクでも有名だった猛者だからね。最上級生だって、多くの人がCランクにもなれないんだよ？　そんな相手を、わざわざ一年生側から指名したんだもの。今頃、話が広がってるかもしれない」
カルディナのその言葉に、私とエルヴィは顔を見合わせる。
その様子を見て、カルディナが少し寂しげな表情を見せた。
「ここで勝ったら、一年生の最強はどの二人だという問いに、誰もがリーズ達の名前を挙げるようになると思う。……何だか一歩先に行かれた気分」
「カルディナは、私達が勝つと思っているのですか？」
「思ってるよ？」
あっさりとそう言ってみせるカルディナに、私とエルヴィは目を丸くする。
私は確かに勝つ自信があるのだが、端から見れば無謀な挑戦としか思えないはずである。

それなのに、カルディナは本気で私達が勝つと思っているようだった。

「というか、勝たなきゃならないんだよね？」

「……そうでしたね」

僅かに声のトーンを落としたカルディナの言葉に、私とエルヴィは自分達の目的を思い出す。

それに少しだけ沈んだ表情になる私達に、ふとカルディナが声色を真剣なものに変えた。

「それで、一つアドバイスがあるよ」

指を一本立てて、カルディナは私とエルヴィの顔を見回す。

「気をつけてね。知り合いの先輩から聞く限り、あの兄妹で警戒するべきは妹じゃなくて、兄のほうだよ」

「え？」

「ヴェルレー兄妹がAランクに近いとまで謳われるほどの強さを誇っていたのは、兄の力が群を抜いて凄かったからなんだって。脅威度的には妹とは比べものにならないらしいよ」

「……」

『マジかよ……』

カルディナがもたらした情報に、トオルが私の中で呻くような声を上げる。

その情報は、私にとっても衝撃だった。

私はリリスのあの能力を警戒して、そちらにばかり目を向けてしまっていた。

だがその兄はもっと驚異的な力を持っているのだという。

思わず弱気になりそうになる私の心を、しかしエルヴィの声が押しとどめた。

「大丈夫ですよ、リーズ」

「エルヴィ？」

首を傾げる私を、エルヴィが自信の色を含ませた瞳で見据えて、笑って見せる。

「今回は私も一緒なのを忘れないで下さい。私の使い魔だって、リーズの使い魔に負けないぐらい凄いんですよ！　だからきっと、大丈夫です」

「……うん」

私は素直に頷いて、自分の気を引き締めた。

自分の力と、そしてエルヴィの力を信じて。

そして次の日、私とエルヴィはヴェルレー兄妹との試合を迎えることになった。

第十九話

リーズの視界を通して異世界を覗くようになって、俺は幾つか絶景と言えるような場所を見てきたが、今回のそれは今までのと比べても格別であった。

ヴェルレー兄妹との試合を行う場所へ赴くべく、リーズ達が狭間の扉を開くと、空の雲が近くに感じるような高原のフィールドに出たのだ。

その遠目に、かなりの高度を持つ岩山から流れる滝が見え、その水がキラキラと七色の光を内包して輝いている様に、リーズが思わず息を呑む。

同じくリーズの視界を通してその壮大な景観を眺めた俺も、感嘆の声を上げた。

『これは……綺麗としか言えない自分の語彙のなさが悲しくなるな』

『……私もこの景色を言葉で言い表す自信はない』

標高が高すぎるその滝は、下に水を届ける前に霧状になってしまう。

それによって七色に輝く水が空気中に拡散し、遠目から眺める景観全体を彩っていた。

俺とリーズは、しばらく自分の目的も忘れて、その景色に見入る。

それはリーズの隣にいるエルヴィも同じだったらしく、呆けたような顔でリーズと同様の場所を眺めていた。

そんな二人の様子を見たリリスが、堪えきれずにといった様子で苦笑する。

「気持ちは分かるけど、えらく余裕があるのね？」

既にナイトメアと融合を果たしているリリスは、隣に立っているカイムと共に、リーズとエルヴィの姿を見据えた。

その兄妹に対峙するリーズとエルヴィも、既に自分の使い魔と融合している。

そんな中で、リリスの兄であるカイムだけが、未だ自身の使い魔と融合をしていなかった。

それどころか、近くにカイムの使い魔がいる気配さえしない。

俺はそのカイムの様子を見て、リーズに確認の声を上げた。

『融合できない……ってわけじゃないんだよな？』

『多分、融合はできる。中に入れられてそれを動かしているのはドッペルゲンガーだけど、あの体は本物だから』

『まぁ……つまりあれってカイムの遺体ってことだよな？』

『そうなる』

俺はそれに、思わずおぞましいものを感じてしまう。

リリスは自分の兄の死を受け入れられないが為に、あの雪原で見つけたであろう兄とそっくりなドッペルゲンガーを、兄の魂だと信じ込んでいるようだ。

そして、そのドッペルゲンガーを魔法と能力によって束縛し、兄の遺体に憑依させることで、生前の動きを再現しているのである。

だがそれには、以前にリーズが言っていた照明の魔法と同じように、魔法の効果を切らさないよう、リリスは呪文を頻繁に唱え続ける必要があった。

つまりリリスは、兄が死んでから不眠不休の状態で呪文を繰り返し唱え続けていたのだ。

当然、そんな状態をいつまでも続けられるわけがなく、リリスは放って置いてもいつか限界を迎えて、兄の体からドッペルゲンガーを手放すだろう。

でも恐らく、リリスは自分が壊れるまでそれを止めない。

だからリーズは、此処でリリスを止める必要があった。

リーズとエルヴィは、そんな自分達の目的を胸に秘めて、強い視線をリリス達に送る。

その視線を、リリスは違う意味で受け取ったようだった。

「余裕を見せられるだけ、自分達に自信がある……ってことか」

リリスは、身の丈に合わない自信に溢れた駆け出しの後輩を、慈しむような目でリーズ達を見る。

それは先輩としての優しさとも取れるが、リーズに言わせれば完全な侮りであった。

でも今は、その油断は好都合である。

そして出来るならば、リリスが油断している内に全てを終わらしたかった。

＞試合まで残り十秒。カウントを開始する＜

この試合の審判である光の球体が、静かにカウントを始める。

それでもリリスは、兄の体を使い魔と融合させる気配を見せず、

その赤い瞳を妖しく煌めかせるのに留まっていた。
今のリリスは、現在も唱え続けている詠唱のせいで、他の呪文を封じられている状態である。
だからその能力のみで、リリスはリーズ達を相手取るつもりのようだった。

例えばそれがリーズ達以外のGランクの生徒ならば、本当にそれだけでリリスは簡単に勝利を収めただろう。
だからこそ、リリスはわざとGランクに落ちてきたのだと、リーズは推測していた。

やがて審判のカウントが終わり、試合の開始が告げられると、リーズは素早くカメラのアプリを起動させる。
すると、リーズの周囲に幾つもの鋼色の球体が出現し、その中央にあるレンズが次々とリーズに映像を送信してきた。
リーズの視界に、様々な角度から映し出された映像が、小さく幾つも表示される。
その鋼色の球体はリーズの意志に添って自立的に動き回っており、リリスの姿を的確に映し出していた。

『……トオル、これ凄い』
『融合状態でカメラを起動するとこうなるのか……これは、他のアプリでも何かしら特殊な反応があるかもしれないな。また色々試してみるのも面白そうだ』
『うん』

リーズは俺とそんな会話をしながらも、リリスの動きに反応して後方に跳躍する。
元々リーズが立っていた場所にて拳を空振りさせ、リリスが驚愕の表情を見せた。

リーズの視界では、リリスは未だ試合の開始地点で棒立ちのままである。
だがカメラから送られてくる映像では、リリスが開始直後に動き出して側面から攻撃を仕掛けてくる様子が、はっきりと映しだされていた。

『そういえば俺の世界では、メドゥーサっていう見ただけで石化してしまう化け物に対抗して、盾に反射した姿を見ながら戦ったという物語があったな。このカメラって、そういうもの全般に有効なんじゃね？』
『うん。隠れた敵の探索にも便利そう』

リーズはリリスから距離を取りながら、フレアという炎属性の中位魔法を多重起動させた。
人の体の数倍はある炎の塊が、リーズの頭上に幾つも出現して飛来してくるのに、リリスが戦慄の声を上げる。

「なんで魔法が使えるの！？」
「……」

リリスのその疑問に、リーズは沈黙で応じる。
恐らくリリスは、例の詠唱阻害をリーズ達にかけていたのだろうが、生憎とリーズの魔法はギャラクシーによる自動処理である。

何の問題もなく発動したフレアを、リーズは全てカイムに向けて放った。
それを見たリリスが、声にならない悲鳴を上げる。

リーズの目的は、端からカイムの体を破壊することであった。

元の世界でそれを行えば、野生のドッペルゲンガーが学院に解き放たれてしまう上に、リリスの抵抗を考慮すると大変な騒ぎになってしまうだろう。
だからリーズは、わざわざカイムの体をこの世界に誘い込む為に、ランク戦を申し込んだのである。
この世界で審判が強制送還するのは、あくまで生きている選手のみであって、ただの遺体が破壊されても強制送還が行われることはないと、リーズは解釈していた。
それはリリスも同じであり、だからこそ兄の体が破壊される心配のないランクにまで落ちてきたのだ。

そんなリリスの誤算は、Gランクにリーズ達が存在していたことである。

よく考えるとリリスの行動はこの上ない浅慮であるが、極限まで衰弱している彼女の判断力だと、それは仕方がなかったのかもしれない。

しかしリーズはそれを好機と捉えて、カイムの体の破壊を試みた。
炎の内部で爆ぜるような音を鳴らしながら、幾つものフレアがカイムに向かって殺到する。

だかそこで、リリスがある意味で予想通りの行動に出てしまった。

辛うじてフレアよりも先に兄へと駆け寄ったリリスは、カイムの体を抱きしめることで、自分の体を盾にしたのである。
幾つものフレアがリリスに着弾し、辺りに炎をまき散らしていく。
やがてその余波が収まると、リリスは強制送還によって姿を消していた。

だがその跡に残された者の姿を見て、リーズは思わず生唾を呑み込む。

＞試合時間、二十八秒。勝者はリーズ・アンクティルとエルヴィ・パルムグレンのチームとする＜

審判によって勝利宣言が為されても、リーズ達は臨戦体勢を解かない。

その二人の視線は、カイムの口から這い出てきたそれに注がれていた。

「リーズ……あれは」

「うん」

エルヴィの警告の声に、リーズが頷く。

俺はそのカイムの口から出てきた、白い蛇のような使い魔の正体を、リーズに聞いた。

『あれは、どんな召喚獣なんだ？』

『ナーガ。種族は上位精霊なのかドラゴンなのか、未だに学院でも意見が分かれている召喚獣。その力は――』

リーズの説明が終わる前に、カイムがその白ヘビとの融合を果たし、縦長の瞳孔の双眸に下半身を蛇の形に変形させた姿を現した。

それと同時に、それまでまばらだった空の雲が、カイムの頭上にある地点を中心にして、渦を巻くように蠢き始める。

遠目に見えていた七色の滝の水が、その色を泥に濁らせながら急激に増量し、美しかった景観がおどろおどろしいものへと変貌して

いった。
リーズの視界の外からさえも集められる空の雲は、やがて地上から太陽の光を覆い隠すほどに増えていき、世界に深い闇の帳が下りる。

その暗がりの中で一際目立っている、カイムの赤い光を放つ瞳を見据えながら、リーズが俺への説明を終えた。

『その力は、天候さえをも操る』

リーズのその言葉を合図にしたかのように、空から凄まじい豪雨が降り注ぐ。
先程まで美しかった景観は、今やナーガの水によって完全に浸食されてしまっていた。

その恐ろしい程までの力を目の当たりにして……しかしエルヴィは、逆に闘志を漲らせて笑って見せる。

「ここからが本番ですよ、リーズ」
「うん」

そんな相方を頼もしく思いながら、リーズは負けじと自分を奮い立たせた。

見据える先は、天候をも操る神のごとき存在。
その超越者を相手取っての力試しに、リーズとエルヴィは一歩を踏み出した。

第二十話

視界が著しく制限されてしまう程の豪雨の中、大地を揺るがすほどの質量を持つそれをカイムの背後に見て、私は足を止めて防御魔法を多重起動させようとした。

「リーズ！　私に防御魔法はいりません！　代わりに私に向けて水属性の攻撃魔法を撃って下さい！」

だが、それと同時に叫ばれたエルヴィの言葉によって、私は起動させる魔法を急遽変更する。

自分の体を防御魔法による障壁で覆いつつ、私はエルヴィに向かってアクアブレスという水属性の下位魔法を撃った。

その魔法がエルヴィの背中に着弾した直後、津波のように襲いかかってきた大質量の水に、私とエルヴィの体が呑み込まれる。

そのあまりの圧力に、私は自分を覆った障壁ごと荒れ狂う水に押し流されてしまった。

もし生身のまま呑まれていれば、私はそのまま溺れてしまっていただろう。

普通ならば水中で呪文など唱えられないのだが、私の場合はギャラクシーによる詠唱のおかげで防御魔法を継続して維持できる。

それでも、私は水に流されるがまま身動きができなくなってしまった。

そんな中、水中を凄まじい速度で移動するカイムが、こちらに向かってくる姿を視界の端に捉える。

体勢の整わないこの状態のせいで、私はカイムに対して魔法の照準を合わせるのに手間取ってしまい、先に相手の接近を許してしま

った。

カイムが私を覆う障壁を打ち壊すべく、拳を繰り出してくる。
もしそれで私の障壁が破られたとしたら、そのまま私は水に呑まれて敗北するだろう。

だがそれは、私の前にその身を躍り出したエルヴィによって、阻止されることとなった。

カイムの拳とエルヴィの手の平が衝突した場所を中心に、外側に向かって激しい衝撃が伝播する。
それによってさらに高圧力の水流が出来上がり、それを利用してエルヴィは、私を障壁ごと抱えて頭上にある水面へと向かった。

私はその障壁の内側から、エルヴィの姿を確認する。
頭にあった耳のようなものが大きなヒレ状のものに変形し、体の節々にあった毛皮を水色に発光させた姿になっていたエルヴィに、私は予め説明されていたモクの能力を思い返した。

どうやらモクは、属性のある魔法を浴びると、それを吸収して特性を変化させることができるらしい。
今回の場合は、モクと融合したエルヴィが私のアクアブレスを吸収して、水属性に対応した特性を持つ姿に変化したのである。

それによって、カイムに匹敵する水中移動能力を得たエルヴィが、膨張する水に押し出されるようにして、水面から飛び出した。

私はその中空に飛び出すタイミングを見計らって、予め起動していた大魔法であるサンダーストームを、カイムがいる方向の水面に向かって、二発同時に撃ち放つ。

二つの青い球体が弾け、その紫電の渦が水中にて荒れ狂った。
流石にその攻撃に逃げ場はなく、カイムはその攻撃に巻き込まれたはずである。

サンダーストームの余波を背中に受けたエルヴィが、今度は耳を鉛色の尖ったものに変化させ、毛皮を青白く発光させた状態になった。

そのエルヴィは私を抱えたまま、元は滝の頂上であったはずの場所を足場にして降り立つ。
続けて、カイムの攻撃を受け止めた為に赤く腫れ上がってしまった右手を、痛そうに抱え込んだ。

「……今ので終わりましたかね？」

むしろ終わっていて欲しいと願うような顔で、エルヴィが恐る恐る背後を振り返る。
だがエルヴィの願望とは裏腹に、多少体を焦がせただけのカイムが水面を飛び出してきた。

「あ、あんまり効いてませんね……」
「……」

思わずエルヴィがぼやくのと同時に、カイムが唱えていた魔法が発動する。
不可視のそれがカイムの掲げた右手から打ち出されると、私達とカイムの丁度中間あたりでそれが弾けた。

水属性の大魔法である、フリーズストーム。

周囲一帯を急速冷凍するその魔法は、辺りにある水を巻き込んで凍りつかせていく。
豪雨により水に覆われてしまっている障壁の外側まで凍りついてしまうと、私はそれに閉じ込められてしまうだろう。
だがその前に、エルヴィが私の前に立ちはだかって、その魔法を吸収し尽くした。
再び水属性の形態に戻ったエルヴィが、吸収した力に指向性を持たせて解き放つ。
それは巨大な氷塊となってカイムを襲い、その体を弾き飛ばした。

「無駄です！　属性のある魔法は、私には効きませんよ！」
「凄い、エルヴィ」

どこか得意気に宣言されるその言葉に、私は素直に称賛の言葉を贈る。
でも私の中では、トオルが呆れた声を上げていた。

『つまり無属性なら効くんだよな？　なんか、自ら自分の弱点を暴露しているようにも聞こえるんだが……』
『……エルヴィは少しドジなところがあるだけ』
『それフォローになってない気がするぞ』
『……』

当然その言葉を受けて、カイムも攻撃手段を変えてくる。
今度は自らが呼び込んだ水を操ることで、幾つもの巨大な水柱をカイムの周囲に立ち上げ、それを蛇の姿を象ったものへと変形させた。
それらが一斉に襲ってくると、エルヴィは慌てて私を抱えて、水の中へと飛び込む。

魔法による攻撃は吸収できても、能力による攻撃は吸収できないのだ。

それまで足場にしていた岩場が、その蛇によって粉々に打ち砕かれる様を背後にして、エルヴィが全力でカイムから距離を取った。

どうやら今の形態だと水中でも言葉を伝えられるらしいエルヴィが、逃げ続けながら私に声を掛けてくる。

「どうしましょう？　このまま正面からぶつかり合っても、今の私達だと勝算は薄そうですよ？」

「うん……」

私は徐々に追いついてくるカイムの姿を後ろに眺めながら、必死に思考を張り巡らせる。

それに併行して、トオルが私に考えたことを提案してきた。

『前にシズルに使ったメテオじゃ駄目なのか？』

『たしかにあれなら、大ダメージは与えられるかもしれない。でもあれは、それだけで使っても、カイムやシズルぐらいの速度を持つ相手には避けられてしまう。それに、今のカイムは大ダメージ程度では動きを止めることはない』

『あ、そうか……』

トオルが、カイムが既に死んでいたことを思い出して呻く。

今のカイムは、どれだけダメージを受けても強制送還されない代わりに、その体が形を保っている間は永続的に動き続けることができる状態だった。

大魔法を受けても多少のダメージしかない驚異的な耐久力の上にそれでは、本当に手の施しようがない。
だがそこで、トオルが何かを思いついたような声を上げた。
『こういう時、俺が知っているゲームだと、ゾンビには回復魔法が効いたりするんだが……そんなことはないよな？』
『カイムに回復魔法をかけても、傷が治るだけ。それに回復魔法や防御魔法は元々、両者合意の上で行うのが前提のような魔法で、メテオよりさらに命中率が悪い』
『やっぱりそうか……』
『……あ、でも』

私はそこであることを思いつき、エルヴィの顔を見た。
エルヴィがそれに気がついて、私に顔を向けてくる。

「どうしました？」
「一つ……聞きたい」

私は障壁の中で口を動かし、一つの確認をエルヴィにした。
その話をエルヴィが聞くと、すぐに私が何を狙っているかを理解したようである。

「大丈夫です。私は光属性や闇属性も吸収できますよ」

私はその言葉を確認すると、エルヴィと顔を見合わせて頷き合った。

もうかなり距離を詰めてきていたカイムを背後に見ながら、エルヴィは再び水面から外に飛び出す。

それに追随して飛び出してきたカイムが、すぐに唱えていた魔法を発動させた。
それがグラビトンという上位の無属性魔法であったことに、私は感謝する。
たしかに今のカイムの不死性は脅威だが、その分行動原理が単純化していた。

私は、それを先読みして起動していたグラビトンでカイムの魔法を相殺すると、続けて同時起動していたエイドという光属性の防御魔法をエルヴィに掛ける。
するとエルヴィの頭にあった耳が光沢のある羽毛に変形し、その背中に二対の灰色の翼が姿を現した。

光属性の力を纏ったエルヴィは、一旦私を手放してカイムに突進を掛ける。

背中に生えてた翼によって、空中の機動力を得たエルヴィは、その宙の上という土俵に上がってしまっているカイムを捕らえることに成功した。

エルヴィはそのカイムの体を抱きしめるように空中で固定すると、続けて吸収していたエイドを解放する。
まるで天使のような姿になったエルヴィに抱かれ、カイムは徐々にその体から力を抜いていった。

やがてカイムの体から完全に力が抜けると、使い魔との融合まで解除され、カイムの姿が元に戻る。
空を覆っていた雲を支配していた力が無くなり、その切れ間からポツポツと太陽の光が射し込み始めた。

『これは一体、何がどうなったんだ？』
『カイムの体の中にいるドッペルゲンガーに防御魔法を掛けて、魔法への抵抗力を一時的に上げている。それによって、中のドッペルゲンガーがリリスの魔法に僅かでも抵抗できようにした』
『なるほどな……』
『でもリリス側も常に詠唱を続けている状態だから、エイドを解除すればすぐに元に戻ってしまう。だから――』

「エルヴィ」
「分かってますよリーズ」

やがて完全に力が抜けたカイムの体を、エルヴィはナーガという使い魔と引き離した上で手放す。

私は落下するカイムの体に向けて、無数のフレアを発動した。
恐らく、元の世界で悲鳴を上げているであろうリリスに思いを馳せながら……。

＞i358874―4164＜

第二十一話

狭間の扉をくぐり元の世界へと戻ると、リーズ達はリリスの絶叫のような悲鳴によって迎えられることになった。
階段の上に座り込み、胸を掻きむしって泣き叫ぶリリスの姿に、エルヴィは堪らず瞳を伏せてしまう。
だがリーズは、リリスを視界の中央に収めて視線を逸らすことはなかった。

リリスは狭間の扉から出てきたリーズ達に気がつくなり、目尻を吊り上げて立ち上がろうとする。
使い魔であるナイトメアが光に包まれ、融合を試みるリリスに、リーズとエルヴィが身構えた。

しかし使い魔の光はすぐに消失し、リリスは立ち上がれずに倒れ込んでしまう。
同じように、リリスの使い魔であるナイトメアも、その身をぐったりと床に横たえてしまっていた。

自身の使い魔の状態に動揺した表情を見せるリリスに、エルヴィが声を掛ける。

「……使い魔との融合は、その主と疲労なども分け合うことになります。リリス先輩が限界なら、その使い魔が限界であるのも当然なのですよ」
「うるさい……」
「今ならまだ間に合います。リリス先輩も、そのナイトメアもすぐに治療を受けて――」
「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさい！　兄さんを殺した

くせにっ！」

涙に濡れたその双眸で、リリスは憎悪の色を込めた視線をリーズ達にぶつける。

だがリーズは、その視線を冷ややかに受け流してみせた。

「お兄さんは……既に死んでいた」

「違う！　生きてた！　だって私は兄さんの魂を見つけたもの！」

「あれは……魂じゃない……ドッペルゲンガー」

「そんなわけない！　だって兄さんは頭を撫でてくれたもの！　私と一緒にいてくれたもの！」

「それはあなたが……操作しただけ」

「違う！　違うよぉ…っ！」

リリスは、違うという言葉を繰り返しながら、自身の耳を塞ぐようにして頭を抱える。

錯乱してしまっているリリスに、今は何を言っても無駄だと判断したのか、リーズは咽び泣くリリスに背を向けた。

それに少し躊躇した様子を見せたものの、エルヴィもその後に続く。

狭間の塔の螺旋階段を上り始めたリーズの背に、リリスの呪詛のような言葉が浴びせられた。

「絶対に許さない……許さないんだからっ！　お前らは絶対、私が殺してやる…っ！」

その声に、リーズは振り返らない。

リーズの姿が見えなくなるまで、繰り返し叫ばれていたリリスの宣言に、俺のほうが思わず焦った声を上げてしまった。

『おいおい、いいのかよ？　何か物騒なこと叫んでるぞ？』

『いい。……リリスが私が恨んでいる間は、リリスは生きようとするはず』

『……お前が、そこまでする必要あるのかよ？　リリスとは冥界の塔が初対面なんだろ？』

『リリスは、面識がなかったはずのエルヴィとカルディナを助けるのに協力してくれた』

『だからってよ……』

『……』

俺の渋るような反応に、リーズは暫く沈黙した後で言葉を続ける。

『……この学院で、知らない誰かの危機を救うなんて行動は、とても貴重なもの。あの時、冥界の塔にいたのがリリスでなかったら、エルヴィとカルディナは助からなかったかもしれない』

『……どういうことだ？』

俺が疑問の声を上げると、丁度リーズ達が狭間の塔から外に出た。まだ多くの生徒達が狭間の塔の門を行き交う中で、唐突にエルヴィが立ち止まって緊張の面持ちをみせる。

「リーズ」

「うん……」

その場にいるGランクの生徒達とは、明らかに圧力の違う視線を無数に感じて、リーズも緊張感を高める。

周囲を見渡すと、多くの生徒達に紛れてこちらの様子を伺ってい

る者の姿がチラホラと見受けられた。
そのリーズ達を推し測る視線に、エルヴィが呻くような声を上げる。

「これからは、楽には勝たせてもらえそうにないですね」
「……うん」

リーズは頷くと、その視線の渦の中で、歩みを再開させる。
そして先程の俺との心話の続きを、リーズは行った。

『トオル、使い魔を得た魔術師の力のことをどう思う？』
『凄い力だと思うぞ。カイムとか見てると特にそう思うな』
『そう、使い魔を得た魔術師の力は凄い。この世界で、使い魔を持った魔術師に対抗できるのは、同じく使い魔を持った魔術師だけ。……そうなると当然、それぞれの国が持つ戦力は、そんな魔術師の数と質に依存する』
『……』
『私の後見人は、この学院を戦術兵器の生産場だと言ってた』

俺はその話で、なんとなくリーズ言った「貴重な行動」という言葉の意味を理解した。
それだけでなく、リーズやシズルなどの熱意と、その他の一年生達との温度差の理由も、何となく分かってくる。
もしかしたら、国ごとに寮が別れている理由はそこにあるのかもしれない。

『お前がそれだけ余裕がないのは、お前の故郷に関係があるのか？』
『……』

そんな俺の質問に、リーズは沈黙で答えた。

今なら話してくれそうな気がしたので俺は勇気を出したのだが、それは見事に挫かれてしまう。

俺がそれに気分を落ち込ませていると、リーズの進行方向に見覚えのある人物が二人、待ち構えているのに気がついた。

エルヴィもその姿に気がついて、二人に向かって手を振ってみせる。

「シズルとカルディナですね。あっちのほうが先に試合が終わっていたようです」

「うん」

リーズとエルヴィがその二人の傍にまで来ると、シズルはリーズの顔をしげしげと覗き込んでから、満足げに頷いた。

「どうやら勝ったらしいの。流石はわらわを倒した者じゃ」

「うん……」

「勝ったのじゃから、もっと嬉しそうな顔をせい……と言うのは無理そうじゃの」

「……」

沈黙して俯いてしまうリーズに何を思ったのか、シズルは扇子を広げて口元を隠しながら、話題を切り替える。

「ところで今さっき、わらわは少しばかり小金を稼げることが決定しての……」

「もしかして、私達に賭けてたんですか？」

エルヴィの苦笑を含んだ声を無視して、シズルが言葉を続けた。

「その礼と言ってはなんじゃが、今宵はわらわの寮へと来るがよいぞ？　その稼いだ小金で、わらわの国の料理を馳走してやろう」

シズルのその言葉にリーズが顔を上げて目を丸くすると、シズルが不服そうに眉をひそめる。

「なんじゃ？　その意外そうな目は？」

「……何でもない」

俺はなんとなくシズルに救われたような気分になった。

そして、エルヴィやカルディナがリーズの近くにいることに感謝する。

彼女たちなら、リーズの抱いている固定観念を崩してくれそうに思えたのだ。

『リーズ、お前の国から見るとこの学院は、ちょっとイメージが悪いのかもしれない』

『……』

『でも前も言ったけど、もうちょっと視野を広げて学院を見てみたら、印象が変わるかもしれないぞ？　だってエルヴィもシズルもカルディナもいい奴じゃねーか。殺伐とした奴なんて案外少ないと思うんだがな』

『……うん』

前回と違い、今度はしっかりとリーズの返事が聞けたことで、俺は満足する。

もしかしたら、リーズにとって本当の意味での学院生活はこれか

ら始まるのではないだろうか？

俺は次にこの世界を覗くことを楽しみにしながら、元の世界へと意識を浮上させた。

第二十二話

リリスとのランク戦の後、私とエルヴィはシズルの部屋に招待されて、彼女の国の料理をご馳走になった。
トオルがあっちの世界でワシツと読んでいた内装と、少し似ている部屋での食事に、私は少し浮かれていたのかもしれない。

いや少しどころか、かなり浮かれていたのだろう。
トオルが朝食に食べていた魚と似ているものを口にした時など、エルヴィに「なんだか幸せそうな顔をしてます」と言われるぐらいには浮かれてしまっていた。
シズルの部屋での食事に、私は何だかトオルの世界に来たかのような気がしたのだ。

もちろんそれは錯覚なのだが、私にはその錯覚が堪らなく嬉しかった。

そのせいだろう。
私は、シズルから勧められた透き通った液体を、何の疑問も抱かずに口にしてしまった。
その液体の正体が何であったのかは分からない。
だが私はたった一口で、喉を過ぎ去る熱い何かと共に、意識をトオルの世界へと渡らせてしまった。

私の視界がトオルの視界と繋がり、あっちの世界の情景を私に送ってくる。
トオルは今、広く物静かな場所で本を読んでいるようだった。
あっちの世界の文字は分からないので、トオルが何の本を読んでいるのかは分からない。

とりあえず、私はトオルに意識が繋がったことを伝えようと、心話を送った。
その時、私はトオルに話し掛けられることが妙に嬉しくなり、意図せず甘えるような声を出してしまう。

『とおる～』
『ん？　リーズか？　何だその声？』

恐らく、いつもと様子が違うのであろう私の声に、トオルが戸惑った声を上げる。

あの液体の効果なのだろうか？
いつもと違い、妙な充足感や高揚感に満たされている自分を、私は自覚した。
そのありえないほどの開放感に、私は我慢できずにトオルの名前を呼んでしまう。

『とおる～とおる～』
『？　さっきから何か変だぞお前？』
『うん～。実は――』

私はシズルの部屋で勧められた液体を飲んだことをトオルに伝えると、彼はすぐにあれが何だったのかを理解したようだった。

『酔っぱらってんのかよ！　ってか一口でそれって、お酒弱いなお前……』
『あれはオサケと言うのか。……そういえばとおる、私はさっきオシャケと似ている魚を食べた』
『鮭な。まあ同じものだとは限らないんだけど、どうだったよ？』

『このよにこんなうまいものがあったのか』
『源頼朝みたいなこと言うんだな……』

私と会話しながら、トオルは視線を上げて立ち上がる。
何やら沢山の数の書物が保管されているその部屋を見て、私は疑問の声を上げた。

『とおる、此処は？』
『俺の通ってる学校の図書館だ。お前の世界にはないのか？』
『世界中の魔導書が集められた図書館塔がある』
『へぇ～』
『……とおるは、もうその本を読み終わった？』

私は、トオルが読んでいた本を途中で閉じたことが気になって聞いてみる。
すると、彼は当然のようにそれを答えてみせた。

『いや、まだ途中だったけど続きは今度にする。お前、こっちの世界の文字が分からないんだし、退屈だろ？』

トオルのその言葉に、私は胸の中がさらに暖かくなるのを感じる。

彼は、本当に優しい人だ。
私が部屋に籠もってひたすら呪文の録音を試みている時や、勉強をしていた時などでも、彼は文句一つ言わずに私を見守ってくれていたというのに。

そもそも、彼には私に協力する義理なんてないはずなのに。

それでいて、私がトオルの世界に意識を繋げると、彼は私を優先

しようとする。
私はその彼の厚意が心地よくて、つい甘えてしまっていた。
トオルは、どうしてそこまでしくれるのだろう？
私はそれが聞きたくなって、思わずトオルに呼びかけていた。
『とおる～』
『何だ？』
『……何でもない』
『ん？』
だがその質問をするのに、私は躊躇してしまう。
そもそも、私はそれにどういう答えを期待していたんだろうか？
彼の優しさに理由はないかもしれないというのに……。
トオルはそんな私の内心に気がついた様子もなく、少し申し訳なさそうな声を上げた。
『といっても、今はまだ学校が終わったわけじゃねーから、大した所は行けないけどな。文化祭の準備のせいで屋上にも行けねーし……』
『ぶんかさい？』
『この学校で開くお祭りみたいなもんだ。今はそれに向けて学校中の生徒が準備してんだよ』
『とおるは、何故それに参加しない？』
私はトオルの視界に人がいないことに気がついて、頭に疑問符を浮かべる。
『あー……俺がいるとちょっと都合が悪いんだ』

『……』

私はそのトオルの声に、どこか寂しげなものを感じ取った。
彼にも学校で何かしらの事情があるらしいことは、薄々勘づいている。
でも、私が自分の事情を隠しているというのに、彼にだけにそれを聞くのも虫が良すぎると思った。

でも私は、トオルにそれを話すことはできない。
私があの学院に来た経緯を知れば、トオルはどういう反応を示すだろう？
軽蔑するだろうか？
嫌悪されるだろうか？
私はそれが怖くて、トオルに自分の事情を知られたくなかった。

いや、トオルにそれを黙っている状態で彼の厚意を受けている私は、既に彼を騙していることになるのかもしれない。

そう思うとチクリと胸に罪悪感が刺して、私は無性に何かしらの償いがしたくなった。

でも、私に何ができるだろう？

そう考えた時、私はふと一つのことを思いついた。

『とおる、こっちの世界で呪文を唱えたことは？』
『無いぞ。お前が送ってきたファイルをパソコンで再生しても何も起こらなかったしな』
『とおるやパソコンには魔力がないから、呪文は発動しない。でも私と繋がっている今なら、私の魔力で使えるかもしれない』

『マジかよ！　……いや、といっても俺も声に問題があってだな……』
『短い練習用の呪文がある。……とおるがあまり使いたくないのなら推奨はしない』
『めちゃくちゃ使いたい』
『じゃあ――』

私はトオルに、指先にごく小さな火球を作り出す呪文を教える。
あまり火力がなく、実戦では全然使えない魔法ではあるが、その分呪文は二言で済むほど短いものだ。
それでも、その特殊な呪文の発音にトオルは四苦八苦したが、何とか唱えることに成功した。

すると、トオルの指先に小さな火球が出現し、それがふわふわと浮く。
トオルがその指を軽く折ってみせると、火球がのろのろとした動きで飛び出した。

やがて図書館の壁にそれが衝突すると、そこに貼ってあった紙に焦げ穴が空いてしまう。

私の世界の呪文に比べれば、それはあまりに侘びしいものではあったが、トオルはそれがいたく気に入ったらしかった。

「すげ！　魔法がっ……！」
『とおる、声が出ている』

あまりに嬉しかったのか、トオルが思わず声を上げる。
するとトオルの背後で、何かがドサドサと落ちる音が響いた。

トオルが慌ててそこを振り返ると、人気のなかったはずの図書館に、一人の女生徒の姿を確認する。

肩ぐらいまで伸ばされた黒髪に、目の下のホクロが特徴的な女の子だ。

少し目尻の上がったその双眸のせいで、少し冷たい印象を受けるものの、かなり整った顔立ちをした少女である。

その少女が足下に幾つもの本を落とし、トオルを驚いたような顔で見ていることで、私もトオルもだいたいの状況を把握した。

『もしかして見られたか？』

『……多分』

トオルの目から視線を外さないその少女を見て、私はとてつもなく嫌な予感に襲われた。

私はトオルの表情が気になって、でも彼の顔をみられないことに気がついて……唐突に、私はあることを理解する。

そこで私は、強制的に意識を浮上させられた。

「リーズ、起きてください。こんなとこで寝ては風邪をひきます。せめて寝床に……」

シズルの部屋のタタミと呼ばれる床で仰向けに寝ていた私は、エルヴィのそんな声で目を覚ました。

その私の目から流れるものを見て、エルヴィが動揺した声を上げる。

「リ、リーズ？　もしかして怖い夢でも見ましたか？」

私は首を横に振って、エルヴィの言葉を否定した。

でも、胸の中が強い寂しさに襲われて、私は涙を止められない。

私は、トオルと繋がることで一番近い場所にいるかのような錯覚をしていた。

でも違う。

本当は、一番近いようで一番遠い。

私もトオルも、お互いの世界に渡ることはできないのだ。

私はどう足掻いても彼と直接会うことはできないのだと、今さらながら理解した。

第二十三話

『あ…ありのまま今、起こった事を話すぜ！
俺が彼女に魔法を使っているところを見られたと思ったら、いつのまにか洗いざらい全て吐かされていた。
な…何を言っているのか分からねーと思うが俺も何をされたのか分からなかった』

と、有名な少年漫画の台詞風に、リーズが再び意識を繋げてきた時の為の説明を考える。
そんな少し現実逃避気味の思考をしながら、俺は間に机を挟んで座っている女子生徒を眺めた。

少しつり目気味の双眸のせいか、可愛いではなく美人という言葉が似合いそうな容姿をした女の子だ。
彼女自身の自己紹介によると、名前は白崎絢音（しろざきあやね）で俺の一つ上の先輩らしい。

その絢音に俺の魔法が目撃されてしまった後、俺は彼女からマシンガンの如く繰り出される質問の雨を浴びせられて、すっかり圧倒されてしまった。
口数の少ない俺とは、正反対のような喋りっぷりである。

今はやっとその質問の嵐が止まり、絢音は顎に手を当てて俺の話を吟味している最中のようだった。
やがて暫く思案していた絢音が、何かを納得したような声を上げる。

「なるほどな～。異世界に携帯電話がね～」

「……信じるのか？」

あまりにあっさりと俺の話を信じる彼女に、俺のほうが戸惑ってしまった。

話しておいて何だが、普通こんな話を聞かされても、頭がイカれた奴だとしか思わないのではないだろうか？

だが絢音は俺のその言葉に、首を傾げてみせた。

「ん？　嘘なんか？」

「嘘じゃない」

「なら、疑ってる時間が勿体ないわ」

「そ、そうか……」

何かが少しズレている彼女の返答に、俺はもう何も言えなくなる。

どうやら、この絢音という先輩は少し変わり者らしかった。

「ようやく、リアルが二次元に追いついてきたか！　このまま高校生活中に何も起こらなかったらどうしようかと思ってたわ」

「……」

前言撤回。

少しどころか、かなりの変わり者のようだ。

何やら危ない部類の人間に関わってしまったのではないかと、俺は少し不安になる。

だが絢音はそんな俺の不安を察した様子もなく、俺の顔を覗き込んできた。

「君、砂川透やんな？」

「何で…俺の名前を？」
「そりゃ知ってるよ。君は二年生にもその名が知れ渡っているぐらいに有名人やで？」
「……」

自覚はあったはずなのに、俺は自分の悪名のことを失念していた。
この学校での自分の立ち位置を再確認させられ、俺は思わず項垂れてしまう。

そんな俺の様子に、絢音は指を口元にあてて苦笑した。

「でもまあ、噂になっている人物像とは随分とかけ離れてるみたいやね……外見以外は。正直、顔はもの凄く怖いもん。それに加えてあの噂やと、友達おらへんのちゃう？」
「……ほっといてくれ」

図星をつかれた俺が眉間に皺を寄せて拗ねる。
すると、絢音は笑みの色を苦笑から快活そうなものに変えて、それを提案してきた。

「なら、私がこの学校で一番目の友達に立候補してええか？」
「は？」

俺はその彼女の意外な言葉に、思わず聞き返してしまう。
ここまで悪名が広がってしまっている俺相手だと、一緒にいるところを目撃されるだけでも、絢音に高確率で変な噂が流れてしまうだろう。
そんな俺と友達になりたいとは、どんだけ奇特なのだろうか。
いや、もしかすると絢音自身も、俺と同じように友達がいないの

かもしれない。
なぜなら今は、普通の生徒ならば文化祭の準備に精を出している時間である。
だというのに、彼女は一人で図書室に本を持ち込み、暇を潰していたのだという。

それは絢音がクラスで孤立していることを意味するのではないだろうか？
俺がそのような旨を絢音に聞くと、彼女は肩を竦めて心外そうな声を上げた。
「私、仲間は多いねんで？　ただ文化祭ってその名称のわりには文化系じゃなくて体育会系のノリでやってるやろ？　私、そういうの苦手なんよ……」

彼女の「仲間」という表現が少し気になるが、そういうことらしい。
俺が納得したのを満足そうに見届けてから、彼女は言葉を続けた。
「それで、よければ君に私の仲間を紹介してあげてもええよ？　どうしても女の子しかおらへんけど……それでええなら、友達増えると思うで？」
「マジかよ」

絢音の願ってもない提案に、俺が思わず机に身を乗り出しそうになる。
だがそれを、彼女は右の手の平を俺に向けて静止した。
「ただし、条件があるで」
「……なんだ？」

俺はそれに、若干の警戒を込めつつも、絢音に続きを促す。
彼女はそれに頷くと、その条件を俺に提示した。

「私も、君が見ている異世界のことをもっと知りたいねん。だから私に、件のリーズちゃんを紹介して欲しいんよ。それに、君の魔法だってもっと見たい」
「紹介……と言われても」

それにはまず、リーズに確認を取る必要がある。
だがリーズの意識は、未だこっちの世界に来ていないようだった。
あの様子なら、またすぐに眠ってこっちの世界に来ると思っていたのだが……。

絢音もそれを察したのか、俺にそれを確認してくる。

「今は、そのリーズちゃんとは意識が繋がってないんだっけ？」
「ああ」

俺がその気になれば、あっちの世界へと意識を繋げることもできるはずなのだが、今は何故か意識を向こうへ飛ばすことができなかった。

向こうで何かあったのだろうか？

俺がそれに首を傾げていると、絢音が少し残念そうな声を上げる。

「まぁ、また明日でええわ。それまでに、君のスマフォにスカイプを入れておいて」
「スカイプ……なるほど」

スカイプとは、ユーザー同士なら無料で電話ができるソフトウェアのことだ。
それにはテレビ電話のような機能もついており、ギャラクシーの前面や背面のカメラを使ってビデオの送受信が可能であったりする。
確かにそれを使えば、互いに姿を見ながら話すことができるだろう。
間にギャラクシーを通しているので、もしかしたら心話のように言語も通じるかもしれない。

俺と絢音はその後、下校時間まで他愛もない話をして時間を潰した。
薄々勘づいてはいたが、絢音は俺と同じ趣味をしているようである。
しかも好きなアニメやら漫画、ゲームなどの傾向まで似ており、非常に会話が弾んでしまった。
会話が弾むといっても、俺は自分の声のせいもあって、気の利いた返事ができるわけではない。

だが絢音はそれを気にした様子もなく、俺の分を補うようにして喋っていた。
そんな彼女が、この学校で初めての友達であるということが嬉しく、俺は自然と声が穏やかになるのを感じる。

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまい、すぐに時刻は下校時間前になってしまった。
絢音は一旦教室に戻ってから帰宅するらしく、俺より先に図書室を後にする。

俺がその背中を見送ると、同時にリーズの声が俺に届いた。
『トオル…』
『おう、リーズか。もうちょっと早く来てれば絢音に紹介してやれたのに』
どことなく元気がないように感じるリーズの声に、俺は内心で首を傾げる。
もしかして、飲んだ酒の影響で気分が悪いのだろうか？
俺がそんなことを考えていると、リーズが申し訳なさそうな声を上げた。
『……ごめん……実はかなり前から繋がっていた』
『あぁ、それで向こうと繋がらなかったのか。何で声をかけてくれなかったんだ？』
『トオル、楽しそうだったから』
『何を遠慮してんだか。絢音、お前と話したがっていたぞ？』
『……』
『リーズ？』
俺はリーズの沈黙に、何かを躊躇っているような様子を感じ取った。
もしかして、リーズは絢音に対してあまりいい印象を持たなかったのだろうか？
『……トオル、彼女が言ってたスカイプというものを教えて』
『絢音が苦手なら無理しなくていいんだぞ？』
『違う。彼女のことは別に……嫌いじゃない』

『それならいいけど……』

リーズの言葉に、何か変な間があった気がする。
だが俺がそれを疑問に思う前に、リーズは言葉を続けた。

『そのスカイプは、トオルも使える？』
『おう、家にあるパソコンなら繋がるぞ。お前が目を覚ましたら試してみるか？』
『うん』

リーズの返事を聞きながら、俺は帰宅するべく椅子から立ち上がる。
そこでふと、俺は机の上に本が一冊残っていることに気がついた。
俺の記憶だと、それは絢音が下校時間までの暇つぶしにと持参していた本のはずである。

恐らく忘れてしまったのだろう。
俺はその本を回収しておいてやることにした。
連絡先は聞いてあるし、また明日にでも渡してやればいい。

だがそこで、俺はなんとなく本の中身が気になり、ページを開いてみることにした。
表紙には厳重にカバーがしてあり、その本の中身が何なのか知らなかったのである。

俺はその本の中程のページを開き、その内容をバッチリと視界に収めてしまってから……バタンっと大きな音が鳴るほどの勢いで本を閉じた。

『――っ！――っ！』

『すまん……』

頭の中で取り乱した声を上げるリーズに、俺は謝罪する。
だが流石にこれは、俺も想定していなかった。
そう、絢音は所謂――

『ト、トオル！男の人と男の人がっ！』
『本当にすまん……』

俺はリーズに再度謝りながら、何だか無性に絢音とリーズを会わせたくない気分になってしまう。

この時、俺は絢音の言う「仲間」がどういった人達を指すのか、まるで理解していなかった。

第二十四話

そのスカイプというアプリは、間にギャラクシーを中継しているお陰で心話と同じ効果があるらしく、私とトオルにある言語の壁を解決してくれるようだった。

でも互いに自分の声に問題がある為、会話自体はいつもの心話のほうがやりやすかったりする。

しかし、ギャラクシーに映し出されるトオルの顔を見ながらの会話は、とても新鮮で楽しかった。

そのせいか、彼の表情の動きの一つ一つが、妙に私の記憶に焼き付いてしまう。

でもトオルは、あまり顔を見合わせての会話は好ましくなかったらしく、ずっと気恥ずかしそうにしていた。

聞けばトオルは、あっちの世界の人に顔が怖いと評されることが多いらしく、あまり自分の顔を見られたくないらしい。

確かに、彼の顔は少しだけ威圧的に見えるかもしれない。でもちゃんとよく見れば、彼の双眸の奥に優しい色があることが分かるだろうに。

私は、それが腹立たしくもあり、でも少し嬉しくもあるような気分になった。

彼のことを理解している人が少ないということに、何故か安心してしまうのだ。

私は頬が弛むのを自覚しつつも、自分の胸に燻るこの気持ちが、未だよく理解できずに首を傾げる。

でもそんな私の安心感は、脳裏に浮かんだアヤネという人物の姿によって、不安に変わってしまった。
あっちの世界で、トオルと同じ学校に通う少女。
彼女も、きっとトオルのいい所に気がついてるように思う。

そして、私よりもずっとトオルと近い。
彼女の知識も、その好みも……そして何より、アヤネはトオルと同じ世界にいる。

「リーズ？　どうした？」

私の表情の変化に、トオルが私を気遣うような声を掛けてきた。
それに私は沈黙で応じながら、トオルを映し出すギャラクシーの画面を指でなぞる。

こんなに近くに見えるのに、やっぱりそこは遠い。

私の様子にトオルが首を傾げるのを見て、やっと私は声を絞り出した。

「……なんでもない」
「そうか？」

訝しげな視線を送ってくるトオルに、私は内心を見透かされるのを恐れて、思わずスカイプを終了させてしまう。

『ごめん』

心話で、一言だけトオルに言葉を届けた。
今は彼に、自分の顔を見られたくなかったのだ。

と、そんなスカイプでの会話を、私はシズルが用意した寝床の上で行っていた。
シズルの部屋で目を覚ました時、私は我慢できずに、その場でスカイプを試したのだ。

そしてやはり、それは途中で起きてきたエルヴィとカルディナに全て見られていたらしい……シズルだけは、まだ眠っているようだったが。

私の様子を固唾を呑んで見守っていた二人は、私がスカイプを終えた瞬間、それぞれ種類の違う悲鳴を上げた。

「ふぁ～、どういうことなのかよく分からないけど……もしかして、リーズに春が来ちゃった？」
「リーズ、いつの間にそんな表情をするように……何だか私のリーズが遠くに行ってしまった気分です……」

何だか興奮した声を上げるカルディナと、ガックリ項垂れるエルヴィの騒がしさに、流石のシズルも目を覚ましたようだ。

「な、なんじゃ？　何が起こったのじゃ？」

寝惚け眼を右手で擦りながら、シズルが戸惑った声を上げる。
だが二人はそんなシズルを放置して、私に質問の雨を浴びせかけ

てきた。

「それで、今のは何処の誰なの！？　その使い魔の能力は何！？」
「リーズ、騙されては駄目です！　男は皆、嘘つきな狼だと私は聞きましたよ！」
「何の話しじゃ？　リーズがどうかしたのかえ？」

三者三様の反応に私は困惑しつつも、とりあえず私はトオルのことを伝えるべく、口を開いた。

「えっと、彼は……私の友達」

私はその友達という響きに、何故か違和感を感じてしまう。
そんな私の様子を見て、カルディナとエルヴィは顔を見合わせた。

「……友達？　もしかして、自覚がないのでしょうか？」
「えっ、あんなトロトロの顔したり、切なそうな顔しておいて？　ただの照れ隠しじゃないの？」
「いえ、リーズならありえるのです。これまで初恋もなかったようですし」
「う～ん、なら余計なこと言わないほうがいいのかな……」
「だから何の話なのじゃ？　わらわを無視するでない」

何やらボソボソと話し合うエルヴィ達に、私は首を傾げた。

「どうしたの？」
「いや、何でもないよ？」
「はい、何でもありませんね」

どうやら二人で何かしらの結論を出したらしく、エルヴィ達は妙

に生暖かい視線を私に送ってくる。

そんな中、いつの間にか拗ねてしまったシズルが、部屋の端で寂しそうに座り込んでしまっていた。

結局、私達はシズルの寮から直接学校へと赴くことになった。
お酒の影響ですぐに寝てしまった私と違い、昨日のエルヴィ達は夜遅くまで騒いでいたらしく、みんな起きる時間が遅くなってしまったのだ。

元々起きる時間が遅い私よりも遅かったのだから、もうそれぞれの寮に一旦戻れるような時間はない。

なのでシズルの部屋にて、皆が慌ただしく登校の準備をする。

その間にトオルも眠りに就いたのか、こっちの世界へと意識を繋げてきた。

『おはようリーズ。さっきは何があったんだ？』

『……おはよう』

『？』

トオルの質問は黙殺したまま、私達は揃ってシズルの寮を出ることになった。

だが学校に向けて歩き始める前に、寮の外で私達を待ち構えていた人物と鉢合わせる。

その見覚えのある姿を見て、私は思わず息を呑んだ。

それはエルヴィ達も同じだったらしく、皆がそれぞれ緊張の面持ちを見せている。

その腰のあたりまで伸ばされに金髪に、琥珀色の瞳をした長身の女性を見て、トオルが私に質問の言葉を届けてきた。

『あれは誰だ？　何かみんな知ってるみたいだが……』

『うん、かなりの有名人。名前はエルザ・フォーレル。……この学院の最高位であるAランクの一人』

『こいつが……』

相手のその肩書きに、私は思わず緊張感を高めてしまうが、別に彼女から威圧感のような気配を感じるわけではない。

ただ意志の強そうな双眸ときつく引き締められた唇は、彼女に凛々しいイメージを与えると共に、この場をどこかピリッとした空気に張り詰めさせていた。

そんな空気の中、エルザが私達の顔を見回してからその口を開く。
「リーズ・アンクティルとエルヴィ・パルムグレンはどこだ？」
その彼女が口にした名前に反応して、私とエルヴィが一歩前に出た。
それを見たエルザが、私達に向けて言葉を掛けてくる。
「リリスの件……と言えば分かるだろう？」
そのエルザの言葉に、私は頷いた。
すると、私の返事を確認したエルザは、私達に向けて深々と頭を下げてくる。
その唐突な上級生の行動で戸惑う私達に、エルザが言葉を続けた。
「すまなかった。あれは本来、私が解決するべきことだったのだ。だが、Gランクに身を置くようになった彼女には中々に手が出せなくてな」
「貴方は……リリスの何？」
「友人だ」
はっきりとそう言い切る彼女に、私はエルヴィと顔を見合わせた。
そして前々から疑問に思っていたことを、エルヴィが言葉にする。
今回のことの発端となった、その原因――
「カイム先輩は何が原因で亡くなられたのですか？」
「……病死だ」
エルザは若干の間を空けた後、そう答えた。

だが彼女は嘘が苦手なのだろう。
エルザの迷うような声は、私やエルヴィにも、それが真実の答えでないことが伝わってきた。
そのことはエルザ自身も自覚しているらしく、私達の表情を見て困ったように眉間に皺を寄せる。
「気にするな……とは言えないか。ここまで関わってしまったのだからな」
そこで一拍の間を空けた彼女は、迷いを断ち切るように口を開いた。
「察しの通り、カイムは誰かに殺された可能性がある。リリスは病死だと思っているが……いや、彼女はショックのあまり、そもそも死んだことを信じていなかったな」
エルヴィはそれに驚いた顔をしていたが、私は薄々そう勘づいていた。
カイムが魔法で治療する間もなく外傷で即死したと考えると、あの遺体は綺麗すぎる。でもカルディナによると、何か死に至るような病気を患っていたという噂もなかったらしい。
勿論、他にも様々な可能性が考えられるし、明確な根拠があるわけではない。
なので本当にこれは勘でしかないのだが、私はカイムの死と、それを取り巻く状況に妙な不自然さを感じていたのだ。

だがエルザは、そこに思いを馳せようとする私を制止するような声を上げた。

「だが、そこからは私に任せてくれないか？　リリスを打ち倒すほどの君達だ。恐らく例の特別試合の対象者に選ばれるだろう。今はそちらに集中するといい」

私がそれに何かを言う前に、エルザの背後で、どこか籠もったような鳴き声が響いた。

エルザがそちらに振り返るのにつられて、私もその鳴き声の元へと視線をやる。

そこには、頭に螺旋を描くようにして捻れた角を二つ生やし、赤褐色の羽毛に包まれた召喚獣の姿があった。

『あれって多分、エルザの使い魔だよな？　何て召喚獣なんだ？』

『バフォメット。種族は上位の悪魔とされている』

『強いのか？』

『その攻撃は山を二つに切り裂くと言われている。さらには、その攻撃は擦っただけでも人の命を刈り取ることが可能らしい』

『……』

トオルはバフォメットの能力を聞いて、絶句してしまったようだ。

気持ちは分かるが、実は文献にあるバフォメットの能力はそれだけではなかったりする。

そのバフォメットの姿を見たエルザが、疲れたような溜息を吐いた。

「やれやれ、お前はいつまで経っても私に反抗的なのだな」

「ガウっ！」
「分かった分かった……すまない、急用ができた。また改めてお礼に伺わせてもらう」

心話で何かを話したのだろう。
エルザが私達にそう言葉を残すと、そのバフォメットに急かされるようにして走り去ってしまった。

私達がそれに目を丸くして見送ると、トオルが私に疑問の声を届けてくる。

『随分慌ただしく走っていったけど、一体どうしたんだろうな？』
『……エルザのバフォメットはもの凄く大食らいらしい。起きている時は、一時間に一回は食事を要求すると噂に聞いた』
『つまり飯喰いに行っただけかよ……』

トオルが呆れたような声を上げる。
朝からわざわざ待ち構えていたというのに、あっさり話しを途中で切ってバフォメットを優先したエルザに、エルヴィ達も苦笑を見せていた。

ちなみに私達は、そのエルザに呼び止められたせいで遅刻することになった。

＞i36240－41164＜

第二十五話

リーズ達が、揃って学校を遅刻をした日の午後。
その日はそれ以外に何事もなく、通常のランク戦にリーズとエルヴィは臨んだ。

＞試合時間、三秒。勝者はリーズ・アンクティルとエルヴィ・パルムグレンのチームとする＜

戦いの終わりを告げる棒読みの音声が、異世界の空に響く。

リーズにとって五戦目となるランク戦は、それまでの戦いの中でも最速のタイムを叩き出して終わることとなった。
試合内容は、開始直後に放ったリーズのライトニングが、相手に全弾命中しての瞬殺。

その結果は、まだランク戦は駆け出しの初心者である同級生の対戦相手にとって、あまりに酷い仕打ちである。
また出番が少しも無かったエルヴィは、その情け容赦ない結果に苦笑してしまった。

「手加減……というのは傲慢かもしれませんが、もうちょっと手心があってもいいような気がしますよ？」
「それは相手に……失礼」
「う～ん」

エルヴィが釈然としていなさそうな表情を見せながらも、モクとの融合を解除する。
リーズもそれに続いて、ギャラクシーとの融合を解いた。

いつもなら、後は狭間の扉をくぐって元の世界へと帰るだけである。

だが今回は、審判から発せられる音声に続きがあった。

＞尚、リーズ・アンクティルとエルヴィ・パルムグレンの両名に、本塔への召集がかかっている。この世界から退室後、すぐに赴かれたし＜

その審判の言葉に、リーズはエルヴィと顔を見合わせる。

このことは事前にある程度予測していたのか、二人に戸惑った様子は見受けられなかった。

「やっぱり特別試合のことですかね？」

「多分そう」

『何の話だ？』

話が掴めず、俺はリーズに疑問の声を上げる。

たしか今朝に会ったエルザも、そのような単語を口にしていた気がした。

俺が頭に疑問符を浮かべていると、リーズが丁寧にそれを説明してくれる。

『この学院の一年生は、初めてのランク戦から無敗が続くと、特別な試合が組まれることになっている』

『特別な試合？』

『通常、ランク戦は同ランクの者同士でしか行えない。けどその特別試合は、上のランクの中から学院が選んだ者と試合を組まされる

ことになる』
『へぇ？　それで勝ったらランクが上がるとか？』
『ランクが上がるのは、定期的にある成績査定の時だけ。その試合で勝っても、すぐに特別な何かがあるわけではない』
『ん？　じゃあ、その試合は何の意味があるんだ？』
『もっともらしい建前は幾つかある。けどその試合の本当の意図は、無敗が続く一年生に敗北を味わわせるのが目的』
『あ～なるほど。要するに天狗になる前にその鼻を折りたいってことね』
『……テング？』

リーズはその聞き慣れない単語に首を傾げながら、狭間の扉をくぐって元の世界に戻る。

するとそこには、今回の対戦相手であった同級生の男達が待っていた。
あの悲惨な敗北の後にしては、妙に明るい声で、リーズ達に言葉を話し掛けてくる。

「噂通り、強いね二人とも。悔しいけど完敗だよ」

と言いつつ、全然悔しそうでない様子の男に、俺は彼らの狙いが大体読めてしまった。

確かにエルヴィとリーズは可愛いし、奴らの気持ちは分かる。
だが俺はそれに対して、何故か妙にイライラしてしまった。

「お前らって、ヴェルレー兄妹に勝ったんだろ？　その話、聞かせてくれない？」
「この後は暇？　よかったら――」

その言葉が終わる前に、リーズは男達に背中を向けて、さっさと歩き出してしまう。
男達のナンパに困惑していたエルヴィも、慌ててそれに続いた。
俺はそれに何となくほっとしつつも、リーズに確認するような言葉を掛けてしまう。

『いいのかよ？』
『いい。あの二人には、あまり興味がない。それに、今は本塔に召集がかかっている』
『特別試合か……』

リーズの話が本当であれば、その特別試合は負けて当然のような相手と組まされるのだろう。
だがリーズは、そこで負ける気はさらさら無いようだった。

『もしその試合で勝てたなら、次の成績査定で上のランクに上がれるのは確実だと思う。だから、その特別試合でも勝っておきたい』
『……』

俺は、そのリーズの声に微かな焦りのようなものを感じ取って沈黙してしまう。

言葉だけを聞くと、リーズのその勝ちたいという気持ちは、普通のように思えるだろう。
でも俺は、リーズのそれに未だ余裕のないものを感じていた。

流石にリリスと戦う以前よりは緩和されているものの、彼女の生き急ぐような姿勢はまだ消えていないのだ。

リーズのそんな危うい熱意とは裏腹に、隣にきたエルヴィが楽しそうに声を弾ませる。

「リーズ、特別試合の相手が楽しみですね！」

「うん」

仲睦まじい二人の様子に、俺は少しエルヴィが羨ましくなった。

思えばエルヴィは知っているのだろうか？

リーズが俺に話したがらない、その秘密を。

もしそうだとしたら、リーズはいつか、俺にも話してくれるだろうか？

俺はもっとリーズのことが知りたかった。

そしてその願いは、思わぬ形で叶うことになる。

この学院の中心とされている本塔。
その狭間の塔と酷似した造りの建築物の前で、リーズ達と同じく塔に召集されたらしい一年生の少年と鉢合わせしたのである。

鳶色の瞳に、短い栗色の髪をした少年の姿を目にして、リーズが凍りついたようにその動きを止めた。
それとは対称的に、その少年は気安げにリーズに声を掛けてくる。

「やぁ、リーズ。久しぶりだね」
「……」
「この島に来てから会うのは初めてだね。元気してた？」

その親しげな男の態度に苛つきを覚えつつ、俺はリーズにその男のことを質問した。

『この男は知り合いか？』
『……』
『リーズ？』

俺の声にも、その少年の声にも、リーズは反応を示さない。
だが戸惑う俺と違って、その少年はリーズの無反応に構わず言葉を続けた。

「君が此処に来たってことは、リーズも中々に順調のようだね。この調子なら、僕らのどちらかが目標を達成できるんじゃないか？」
「やめて……」

リーズが、少年の目標という言葉に反応を示す。
その声に怯えが含まれているのを、俺は感じ取った。

だがそんなリーズの反応を無視して、少年は声の調子を落として話しを続ける。

「ああ、そうそう。君、ヴェルレー兄妹と戦ったんだろ？」
「……」
「余計なことをしてくれたよ。あのまま放っておけば、リリスも潰れていただろうに。君は自分に課せられた使命を忘れたのかい？」
「……えっ」

そこでリーズは何かを察したらしい。
知ってしまったその事実に、リーズが呻くような声を上げた。

「もしかして……」
「ん？　あぁ、そうそう。カイムを殺したのは僕だよ」
「……」

その言葉に対するリーズの反応を見て、その少年は心外そうな声を上げる。

「何を驚いた顔してるのさ？　それも僕たちの使命の一つだろ？」

その少年の言葉に、俺は頭を金槌で殴られたような衝撃を覚えた。

第二十六話

運命というものは、いつも本当に悪戯が好きだ。
そして、それはいつも私にとって最悪の結果をもたらしてくる。
もしもこの世に、その運命を司る何者かがいたとしたら、私はそいつを絶対に許さないだろう。

狭間の塔を白塗りにして真新しくしたような、石造りの塔。
この学院の中枢とも言えるその場所で、私は今もっとも会いたくなかった人物と再会してしまった。

私と同じ使命を課せられてこの島に来た、仲間。
私がもっとも嫌悪していて、それでいて私と同類の男。

その男が喋る言葉を、トオルも聞いている気配を感じて、私は思わず悲鳴を上げそうになった。

「やめて……」

呻くように嘆願するも、その言葉は男に届かない。
こんな時に、上手く喋れない自分の声を呪う。
私は、またこの声のせいで大切なものを失うのだろうか？

そして男がリリスの件に言及した時、私はだいたいの経緯を察してしまった。

――それも僕たちの使命の一つだろ？

男から発せられたその言葉に、私は血の気が引く思いをする。
その言葉を、トオルも聞いているのだ。
みっともない言い訳が、幾つも私の頭に浮かぶ。
だが、それらはどれも言葉にはならず、私はただトオルの名前を呼び掛けるに留まった。
『トオル……』
『……』
『トオル？』
でも、私のその呼び掛けに、トオルは応じない。
もしかして、トオルは男の話を聞いて、私を見限ったのではないか？
その最悪の可能性に、私は凄まじい喪失感に襲われた。
思わず足から力が抜けて、その場で膝をついてしまう。
そんな私の肩に、エルヴィがそっと手を置いてきた。
「リーズ、大丈夫ですか？　特別試合の話は私が聞いておきますから、リーズは寮に帰って休んで下さい」
「……えっ？」
「だって顔が真っ青ですよ？　……大丈夫、私はリーズを信じてますから」
そう言ってエルヴィは、私を慰めるように体を抱きしめてくる。

それによって私が少し落ち着きを取り戻すと、続けてエルヴィは、あの男に敵意の視線を向けた。

男がそんな私達を見て、呆れたように肩を竦める。

「一体、何がどうなってるんだい？　もしかして、僕に先に獲物を取られたのがショックだったとかかな？」

「貴方とリーズを同じにしないで欲しいです」

「同じだよ」

男ははっきりとそう断言する。

そして私は、それを否定したくても否定しきれない。

私は何とか足に力を入れて立ち上がり、エルヴィの言葉に甘えて自分の寮へ帰ることにした。

「リーズ……」

エルヴィが心配そうな声を掛けてくるも、私はそれに応じる余裕がない。

私のことを案じてくれている友達に対して、私は何も返事ができずに寮への帰路についた。

『トオル……』

その帰り道の途中で、私は未練がましく、またその名を呼び掛けてしまう。

だが今度は、その呼び掛けにちゃんと返事があった。

『あれ？　もう特別試合の話は済んだのか？』
『トオル！？』
『え？　あれ？　もしかして、お前泣いてる？』

私の視界がぼやけたのを感じたのだろう。
何故だか、今はトオルに泣いていることを知られるのが少し悔しくなって、私は気丈にそれを否定した。

『泣いていない』
『いや、これはどう見ても――』
『トオル、何故返事をしなかった』

トオルの声を遮っての私の質問に、彼は素直に応じてくれる。
『いや、丁度目覚ましが鳴って目が覚めたんだよ。何だか気になる話をしてたから、これでもすぐに、そっちの世界へ繋ぎ直したつもりだったんだが……』
『……』

私はその他愛もない理由に少し安堵した。
それでも、トオルはしっかりとあの男の言葉を聞いていたようである。

『トオルは、あの男の話を聞いていた？』
『ああ、あれはどういうことなんだ？　っていうか、あの男は誰だよ』
『……ごめん、ちゃんと話す』

そう言いつつも、私は以前よりもずっと、その話をすることの抵抗が強くなっていた。

トオルに見捨てられたと勘違いした時に味わった、あの喪失感。
それをまた味わうかもしれないことを、私は恐れてしまう。

私が家族を失った時も、絶望感に近い喪失感があった。
そして、そこから私は強くなったと思っていたのだ。
でも違う。
それは全くの勘違いで、私は逆に弱くなっていたのかもしれない。

長らく続いた孤独の時間は、やっぱり少しずつ私の心を蝕んでいて、その隙間をトオルが埋めていたのだ。
そして今、私はそれを失うかもしれない。
それを恐れて、私が中々に話せずにいると、彼が私を慰めるような声を上げた。

『……リーズが話したくないなら、俺は我慢するぞ？』
『え？』

トオルの意外な言葉に、私は思わずそれを聞き返してしまう。
そんな私の反応に、トオルが言葉を続けた。

『何だかお前、辛そうだしよ……そこまで無理して話さなくてもいい』
『……トオルは、いつも優しい』

トオルのその優しさに、私は強い罪悪感に駆られる。
そのお陰で、私はやっと踏ん切りがついた。

『あの男の名前は、アベル・アンクティル。私と同じ国から、この島にやってきた』
『っえ？　アンクティルって、もしかして兄妹なのか？』
『違う。アンクティルというのは、私が収容されていた施設の出身者が名乗る姓。私はその施設から、とある使命を受けて学院に送られた』
『じゃあ、あのアベルって奴が言ってたことは――』
『本当のこと』

トオルの声を継いで、私は肯定の言葉を告げる。
だがその話を聞いての彼の反応は、私にとって予想外だった。

『まぁ、何か理由があるんだろ？』
『……何でそう思う？』
『なんとなくだ！』
『……』
『いや、お前の性格のことを考えると、そうかな～と。というか、お前が単なる悪人なら、まずリリスを助けたりしねーよ』

まだ彼に全てを伝えたわけではないのに、私はその言葉だけで救われたような気がしてしまう。
だがそれに続く彼の言葉はさらに、それまでの不安を吹き飛ばすほど嬉しかった。

『それに、なんでだろうな？　どんなことを聞かされても、お前なら許せる気がする』
『トオル……』

彼に、私の抱えることを話せる切っ掛けが出来てよかった。
召喚したのが、彼の携帯で本当によかった。
私は今日初めて、運命の巡り合わせに感謝した。

＞ｉ３６４１１―４１６４＜

第二十七話

私は、素晴らしい両親の元に生まれた。

平民の家ではあるものの、私を愛してくれる両親がいて、他の家庭よりも少しばかり裕福。

父と母の仲はとても良く、そして二人とも穏やかで優しい人。

そんな、理想的な家庭だった。

ただ、問題があったのは私。

私は産まれた時から、声が出しにくい症状を抱えていた。

我ながら、わりとお利口で大人しかった性格も災いしたのだろう。

何が原因なのかも未だよく分かっていないそれを、医者は心理的な抑圧によるものだと診断してしまった。

そして、世間と両親は上手く言葉が伝えられない私よりも、その医者のことを信じてしまったのだ。

「リーズ、そんなにお利口にしなくてもいいのよ？　貴方はまだ子供なんだから……」

母は口癖のように、そう繰り返した。

「我慢しないで、我が儘をもっと言っていいんだぞ？」

父は何度も、私にそう諭した。

でも私の症状が、それで治るわけではない。

私はその声と世間に流れる妙な噂のせいで、友達は一人もできなかった。

そのうち私は、自分のことで悩む両親がいたたまれなくなり、一度だけわざと我が儘を言ってみせた。

そうすれば、父も母も少しは安心してくれるだろうと思ったのだ。

でも、それがいけなかった。

私が我が儘を言うと、父と母は「やはりリーズは我慢していたのだ」と思ってしまったらしい。

そして私は完全に、親に「お利口にさせられている」可哀想な子供だということになってしまった。

のどかで平和だったせいか、私の故郷の人達は、そんな些細な問題を抱える私の家庭を、殊更噂にして騒ぎ立てる。

とても優しかった父と母は、ますます私の事で悩むようになり、そしてそれは少しずつ家庭を蝕んでいった。

仲が良かったはずの二人はたびたび喧嘩をするようになり、私に対しては腫れ物にさわるように接するようになってしまう。

そのうち母は、私に対して特に神経質になってしまい、徐々に心を病んでいった。

そのせいで、父の仕事にも影響が出始める。

私のせいで、幸せだったはずの家族はどんどん壊れいった。

二人の間に、私が産まれたことが間違いだったのだ。
私が存在しなければ、父も母も幸せだったろう。
だからどうにかして、私をなかったことできないだろうか？

幼い心で、私は頻繁にそう思うようになり、人から隠れてこっそり泣くようになっていた。
私が、国から遣わされて来た魔術師の男に声を掛けられたのは、そんな時である。

ランドリアという国が新しく設立した、ヴィントレーゼ魔術学院に入学できる資格を持つ子供達を集めて、育成するという施設。
私の魔力は、ヴィントレーゼの入学条件である魔力量を十分に満たしており、その男は私を施設に引き抜きに来たようだった。

だが、あまりいい噂を聞かないその施設へと私が入ることに、私の両親は渋った。
そこで私は、後に単独でその男と接触し、ある条件と共に私を施設に連れて行くよう願ったのである。

「君の両親から、君に関する記憶を消せるかだって？」
「うん……」
「……できないことはない。でも、消してしまった記憶は二度と戻らないぞ？」

私はその男の言葉に少しだけ躊躇いつつも、しっかりと頷いてみせた。

そして、男はちゃんと私との約束を守った。
私のことを忘れて、病んでいた母がすっかり治ったのを見届けて、

私は自分の判断が正しかったことを確信する。
幸せを取り戻していく両親を、私は外から他人として眺めて、これで良かったのだと自分に言い聞かせた。

そうして、帰る場所を自ら手放した私は、男に連れられて、その施設へと入ることになる。
だが、そこでも私は……いや、それまで以上に私は、自分の声に悩まされることになった。

確かに私の魔力だけは入学条件の水準を十分に満たしているものの、私は自分の声のせいで、呪文をろくに唱えられなかったのだ。
だからといって、その施設で教師を務めている者達は、容赦などしない。

その施設は、私が耳にした悪い噂通り、とても厳しい場所だった。
それでいて、私は自分の抱える声のせいで、特に辛い修練を課せられる。

当然のように睡眠時間は極限まで削られ、私は何度も疲労で倒れた。
だが気を失った私を起こすのは、治療ではなく叱咤と共に放たれる攻撃。

過剰なほどに甘やかされて育った私にとって、それは地獄のようにも思えた。
でもそれだけ、私達が住むランドリアという国が、私が考えるよりもずっと危機的状況にあるらしい。

というのも、ランドリアという国はヴィントレーゼ魔術学院の卒業生が極端に少なく、周辺の国々と比べて、戦力が随分と劣ってい

るとのことだった。

今のランドリアはたった一人だけＡランクの魔術師がいるため、辛うじて侵略からは免れている。

だが、その随分と年老いてしまった魔術師が亡くなれば、ランドリアは容赦なく蹂躙されるであろう。

だから施設に入った私達に与えられた使命は、Ａランクに達してランドリアの重要な戦力となること。

そしてあわよくば、隣国の戦力になりそうな生徒を減らすこと。

前者はともかく後者の使命には、微かにこの国の狂気を感じてしまう。

だが、この国を守るということは、私の両親だった人も守ることになるのだ。

私はそれだけを原動力にして、その施設で生き続けた。

やがて私は件の学院へと入学する年になり、施設から受けた使命とアンクティルという姓を携えて、ヴィントレーゼ魔術学院へと向かうことになる。

その途中で、偶然にも私は自分の両親が住んでいた街へと立ち寄ることになった。

私はそこで、幸せになった両親の姿が見られることを期待してしたのだ。

もしかしたら、私に妹か弟ができてきるかもしれない。

その子は私と違って、流暢に言葉を話すけれど、ちょっぴり我が儘で……。

それで父に叱られて泣いてしまい、母に慰められるのだ。
そんな、家族のささやかな幸せの構図。

しかし私のそんな想像は、すっかりやつれてしまった父と母の姿を見ることによって、全て吹き飛んでしまった。
大きく裕福そうだった家も荒れ果ててしまい、記憶にあった幸せの面影は欠片も残っていない。

調べた所によると、母は私の記憶を失った後、一時は快方に向かったのだが、すぐにまた心を病ませてしまったらしい。
そして、記憶にない誰かを捜して夜な夜な徘徊するようになり、父はそんな母の介抱と仕事に追われて、体を壊してしまっていた。
例え記憶を消されても、母は心のどこかで私を覚えていたのである。

私の軽率な行動は、大切な人達に最悪の結果しか残していなかったのだ。

しかも、それはもう取り返しが付かない。
消してしまった記憶は、元に戻らないのだ。
魔術を知った今だからこそ、それが分かってしまう。

私は何の為に、これまで辛い思いをして生きてきたのだろうか？
私は胸に深い絶望感を抱えて、入学する者を学院がある島へと運ぶ船に乗り込んだ。

そして、私はエルヴィと出会ったのである。
彼女は、あまり話すことができない私とは反対に、随分とよく喋

る人だった。
反応が薄い私に語りかけて何が面白いのか、にこにこと笑顔を絶やすことがない。

私は最初、そんなエルヴィの言葉に応じる余裕はなく、ほとんど彼女を無視していた。
だがその彼女が話す内容の一つに、私は一筋の光明を見つけて顔を上げる。
それは学院にいるとされる、とある者についての話だった。

「単なる噂ではなく、本当にいるらしいですよ？　しかも彼の者は、気に入った相手の願いを何でも一つだけ叶えてしまうとか」
「……何でも？」
「あくまで気に入った相手に一つだけですが、本当に何でも叶えられるそうです。そして、その者にはAランクで上位に入ると出会えるらしいですよ。ただし、近年は気に入った人が誰もいなかったのか、誰かが願いを叶えて貰ったという話は途絶えています」
「……」

私は施設に課せられた使命よりも、優先するべき目標ができてしまう。
もしその話が本当なら、私がその者に願うことで、私の両親を救うことができるかもしれない。

でもその為には、まず私はAランクになる必要があるようだった。
だから私は――

『何か話を聞く限りは、俺がお前を軽蔑するような要素は思い当たらないぞ？』

リーズのその話を聞いて、俺は思ったことをそのまま口にしていた。

彼女の行動は確かに軽率だったかもしれないが、そこに悪意は欠片もない。

そしてリーズが抱える暗殺のような使命も、彼女がリリスを助け

た時点で、本気で実行する気がないのは分かっていた。

『でも私は……』

『なんつーか、お前は自分を責めすぎだと思う』

『……』

そこで意味ありげな沈黙をするリーズに、俺は急に気恥ずかしくなって、それを誤魔化すように話の続きをした。

『それで、お前が会いたい奴ってのは、この学院のお偉いさんなのか？』

『そう。この学院でAランクに達した者の中でも、さらに上位の数人しか謁見できない相手がいる』

『へぇ？　ここの学院長とか？』

『違う。そもそも、それは人間じゃない』

『へ？』

『この学院を創設した者であり、狭間の世界を統べるドラゴンの王。つまり全ての召喚獣達の頂点であり、最強の使い魔……』

俺はそこで、もう次に飛び出してくる単語が読めてしまった。

まったく、この世界はどこまでファンタジーなんだか……

それは、剣と魔法が存在する世界には付きものの存在――

『魔王』

第二十八話

リーズから過去の話を聞いた日の朝。
その話を聞き終えた時、既に俺は完全に学校を遅刻していた。
両親は既に仕事に出掛けているため、遅刻しても俺を咎める存在は家にいない。
だからといって遅刻が許されるわけでもなく、俺は慌てて制服に着替えて、学校へと赴くべく家を出た。
だがそこで、丁度家の門に備え付けてあるインターホンを押そうとしていた、白崎絢音と鉢合わせる。
その絢音は俺の姿を見ると、怪訝そうな表情を浮かべて首を傾げた。
「何で制服着てんの？」
「え？」
「今日、創立記念日で学校休みやで？」
「……あ」
俺はそこでやっと、自分の間抜けさに気がついた。
だが俺はそれを恥じらう前に、絢音の後ろに控えていた二人組の姿を見て、驚愕以外の感情が全て吹き飛んでしまう。
一人は長い黒髪を後ろに流した、吊り目の少女。
もう一人は、癖の強いブラウンの髪を顎の下あたりで切り揃えた少女。
二人とも女性にしては長身の体に、白いボタン式の学生服に酷似

した衣装……所謂、特攻服を着込んでいるのを見て、俺は恐る恐る絢音に質問した。

「その人達は？」

「昨日言ってた、仲間や。紹介するって約束してたやろ？」

「……」

俺はそのまるで予想していなかった相手に、どう反応していいか分からずに戸惑う。

そんな俺の様子を見て、絢音が困ったように苦笑した。

「あぁ、言っておくけど、二人ともレディースとかそういう類の人やないで？」

「じゃあ何で……そんな格好を？」

「趣味や」

「……お、おう」

何か釈然としないものを感じるが、俺はとりあえず納得することにした。

俺が改めて二人に視線を送ると、それぞれが自分の名前を名乗ってくる。

「心奇愛（ルキア）と申します」

「私は、伽紗鈴（きゃさりん）。呼びにくかったら、リンって呼んで」

その奇妙な名前に、俺が思わず首を傾げると、絢音がすかさず補足してくれた。

「ペンネームや。二人とも私と一緒に同人誌描いてる仲間やねん」

「そ、そうか……」

何だか誤魔化されている気がするが、絢音が約束を守ってくれたことには違いない。
なので俺はそれに感謝して、二人が少しばかり個性的であることには目を瞑ることにした。

「それで……わざわざ家に？」
「私も早くリーズちゃんに会いたかったしな。今は彼女と繋がってるん？」
「あー……」

リーズは俺との話を終えた後、風呂に入ると言って一旦繋がりを切っていた。
俺がそれを絢音に説明すると、彼女は俺にニヤニヤとした表情を向けてくる。

「もしかして、覗きの邪魔やった？」
「の、覗かねーよ」

その絢音の言葉に、俺は少し……いや、かなり動揺した声を上げてしまった。

だが俺は、今まで本当に覗いたことはない。
これまで何度も誘惑に負けそうになったのだが、リーズから向けられる信用をどうしても裏切れずに、今のところ踏み止まっていた。
実はこっそり不可抗力の可能性に期待していたのだが、リーズは俺が眠っている時間を避けて入浴するようになってしまっている。
なので、俺は未だそんな場面をお目に掛かっていない。

それでも、なんとなく狼狽えてしまう俺を見て、絢音がまた苦笑する。

「じゃあ、リーズちゃんが風呂から出てくるまで、待たせてもらっていい？」

「あ、ああ」

そうして俺は、三人を家に招き入れることになった。

話してみると、彼女らは本当に普通の人だった。

まあ同人誌を描いているだけあって、多少そっち方面の知識に詳しい人達ではあったが、それは俺も同じである。

ルキアはその服装とは裏腹に、とても礼儀正しく物静かな性格をしていた。

それとは対称的に、リンは快活そうな性格をしており、二人とも俺の声のことを気にした様子もなく話してくれる。

聞くと三人とも朝から何も食べていないらしく、俺は冷蔵庫から適当に見繕って食事を賄うことにした。

その三人分用意されたチャーハンを見て、ルキアがその静かな声に感動を含ませる。

「強面で料理がおできなさるとは、本当にラノベの主人公のようですね」

ルキアの言葉に続けて、リンも同じように感動した声を上げた。

「しかも、チャーハンだなんて……もう、それだけで胸にきちゃう」

いや、それただの冷凍食品だから。

という俺のツッコミを遮るようにして、絢音が先に声を上げた。

「彼、良いキャラしてるやろ？　しかもな、此処だけの話……透は魔法使いや」

絢音のその言葉に、ルキアとリンが驚いた表情で顔を見合わせる。

そして今度は呻くような声を、二人が上げた。

「……同年代の人だとお見受けしたのですが、透さんは三十歳を越えておられましたか」

「き、気にする必要ないと思うわ。その内いい人が現れるわよ」

何だか嫌な誤解をする二人に、俺は慌てて口を開く。

だが俺が何か言葉を発する前に、ルキアが言葉を続けた。

「それにしても、透さん……いい筋肉をされているようで」
「へ？」
「たしかに。しかも首のあたり見てると、わりと実戦向きな感じがするわね。もしかして透って、喧嘩強いんじゃない？」

前言撤回。
筋肉とか、喧嘩とかいう単語が飛び出すあたり、やっぱりこの二人は何かがズレている気がする。

その二人の言葉を受けて絢音も興味を持ったのか、その目がギラリと光った気がした。

「透、ちょっと上着脱いでみ？」
「……えっ」
「次の作品のモデルにしたるで？」

俺はその言葉に、絢音の持っていたあの本を思い出した。
流石にそれは嫌なので、俺は丁寧にお断りする。

だが絢音は、それで諦めるような奴ではなかった。

「ちょっとだけやって」

そう言って、絢音が俺の上着に手を掛けて脱がそうとしてくる。
その女性にしては異常な力の強さに、俺は凄まじく苦戦させられた。

と、そんなやりとりを絢音としていると、唐突にリーズの声が俺の頭に響く。

『……トオル、何してる？』
『リーズ？　いや、これは……』

絢音は、そんな俺の変化を鋭く読み取ったようだった。
元から冗談のつもりだったのか、あっさりと俺の上着から手を離して声を掛けてくる。

「もしかして、リーズちゃん？」
「あ、ああ」

俺が絢音に頷くと、リーズが少し声を低くした。

『トオル、説明する』
『あ、あれ？　なんかリーズ怒ってる？』
『怒ってない』

言葉では否定するリーズだが、やっぱりその声には怒気が含まれているように感じた。

第二十九話

私がギャラクシーのスカイプを使ってトオルのパソコンと繋がると、向こうの世界のアヤネ達は歓声を上げて喜んだ。
何やらこっちの世界に強い興味があるらしく、私はアヤネ達に凄い勢いで質問を浴びせられる。

私はその質問に答えながらも、ずっと胸の中にもやもやとしたものを抱えていた。
ルキアとリンも、とてもいい人のようであるのに、彼女たちがトオルの傍にいると何故か不安を感じてしまうのである。
特にアヤネはトオルとの距離が近いような気がして、私の中の不安がどんどん大きくなっていった。

そんな私の内心は知らずに、アヤネは声を弾ませて私に話し掛けてくる。

「私達のアドレスも教えるから、暇があったら連絡して。こんな面白そうな話、透だけに独り占めさせへんで？」

そう言って、アヤネはトオルに意地悪そうな笑顔を向ける。
トオルはそれに苦笑で応じつつも、どこか楽しそうに見えた。

そんなトオルの様子に、私は胸の奥に微かな痛みを感じながらも、アヤネ達との話を続ける。

やがて話がランク戦のことに及ぶと、アヤネ達はますます声を興奮させた。

「呪文の詠唱を録音して高速に……考えましたね」
「アプリのことを考えると、他にも色々できそう」
「せこいハメ技とかもできそうやな」
「……？」

私はそのハメ技という単語に首を傾げる。
でも、私以外の四人はその単語を理解しているようだった。

「えっと……」

私がその意味を質問するべく口を開きかけるも、先にトオルが私に心話で話し掛けてくる。

『要するに、相手に絶対に勝つことができる戦術のようなものだ』

私の疑問に、トオルがそう説明してくれた。
トオルも声が出しにくい症状を抱えているので、こういう時は心話のほうが早かったりする。

私がなんとなくハメ技という単語の意味を理解すると、アヤネが言葉を続けた。

「これは喧嘩の話やけど、何でもありになったら狡くてセコイ奴のほうが勝つねん。そのランク戦ってのも、上位に行くほどそういう奴がごろごろおると思うで？」
「うん」

そのアヤネの言葉に、私は素直に頷く。
これから上のランクに上がって、多くのランク戦を経験した相手と戦うことになったら、相手も自身の特性を活かした戦術を仕掛け

てくるだろう。
私も今の内に、エルヴィと色々話し合っておく必要があった。
「モン〇ターハ〇ターの、安全地帯から弓で一方的に攻撃するような感じのものはありえそうです」
「ハン〇ーハ〇ターのメレ〇ロンみたいに、存在感を消してから近づいて一撃、みたいなのもありそうね」
「ずっと俺のターン！　みたいなのはハメ技の基本やな」
「？？」

理解できない単語が幾つも飛びだし、私はまた首を傾げる。
でもやっぱりトオルは、それらをちゃんと理解しているようだった。

『ゲームとか漫画の話だ。これは流石に、詳しく説明すると長くなる……』
『……そう』

アヤネと同じく、ルキアとリンもトオルと話が合うようである。
彼女らが楽しそうにトオルと話している様子を見ると、私は堪らなく彼女らが羨ましくなった。

私も、トオルの傍に行きたい。
ギャラクシーの画面越しに、彼女らと話すトオルを見て、私はそう思ってしまう。

でもその願いが叶うことはなく、私はただ楽しそうに笑う彼を眺め続けた。

それから彼女達は、ギャラクシーの使用法について様々なアイデアを考えてくれた。
それによって、ランク戦で有用そうなアプリが幾つか見つかる。
その合間の雑談でゲームの話をしていたらしいアヤネが、ふと私にそれを質問してきた。
「そういえば、そっちの世界には魔王とか勇者みたいなのはおるん？」
「魔王なら、いる」
「えっ、本当に？」
「うん」
私が魔王の存在を肯定すると、アヤネ達はその魔王について詳しく説明を求めてきた。
でも私も、その魔王のことについては知っていることが少ないので、話せることも限られてしまう。
その魔王によって、Ａランクの上位者は願いを一つ叶えて貰える可能性があることを話すと、アヤネ達はそれぞれ違う反応を見せた。
「魔王って呼び名は、こっちの世界の印象だと胡散臭いのよね。何か裏がありそう」
「ですが、願いが叶うという話にはロマンを感じます」
「リーズちゃんは、何か叶えたい願いとかあるん？」
「それは……」
アヤネのその質問に、私は返事に困窮した。
彼女に悪気はないのは分かる。
でも、やはり私の両親のことを話すのは少しばかり抵抗があった。

何も答えられない私を見て、アヤネ達はなんとなく事情を察してくれたのか、気にした様子もなく話題を移してくれる。

「私だったら不死は嫌だけど、不老は欲しいわね。あと億万長者になりたいとか」

「でも、そんな願いをする人は選ばれないのでは？　誰か大切な人を蘇らせたいとか、そういった願いのほうが尊重されると思います」

「私やったら、リーズのいる世界と行き来できる能力を要求するで。そっちの世界のほうが楽しそうやしな」

「……あ」

私はそのアヤネの言葉を聞いて、気がついてしまった。

トオルの傍に行けるようになるかもしれない、一つの可能性。

――――もし、私がトオルの傍にいけるよう魔王に願ったら？

そんな考えが、頭の中を掠める。

でも私は、慌ててそれを頭から振り払った。

もし私が魔王と謁見できるようになり、願いを叶えられるとしても、それは一つだけなのだ。

私の願いは、もう最初から決まっている。

それは天秤に掛けていい事柄なわけがない。

私は自分の両親を愛しているし、助けたいのだ。

そしてそれ以上に、私は両親を苦しめた償いをしたい。いや、しなければならない。

だというのに、私の心は少しだけ揺れ動いてしまっていた。

第三十話

「ほな、また明日！　学校でな～」

絢音が快活な声でそう言いながら、俺の家を後にする。

「お世話になりました」

「じゃあ、私達も明日学校でね」

ルキアは丁寧にお辞儀をして。リンは軽く手を振ってから、絢音に付き従うようにして帰って行った。

時間的にはまだ夕方にも差し掛かっていないのだが、俺は一つ気になることがあって、彼女達に早めに帰ってもらったのだ。

俺は彼女らを玄関先で見送りながら、今は繋がりを切っているリーズのことを思う。

彼女は、ルキア達と魔王の話をしてからずっと様子がおかしかった。

なので俺はそれをリーズに尋ねたのだが、彼女には素気なく拒絶されてしまったのだ。

曰く――

『……トオルは、私に優しすぎる』

『え？』

『ごめん、少し一人にして欲しい』

『……』

何があったのか、どうやらリーズは、酷い自己嫌悪に陥ってるようだった。

俺は一旦、そのリーズの要望に従って意識の繋がりを切っていたのだが……

今改めて思い返すと、あの様子はむしろ一人にしてはいけない気がする。

だから俺は、心の中でリーズに謝ってから、こっそり彼女の様子を伺ってみることにした。

目を閉じれば、たとえ眠っていなくても感覚は共有することができるのである。

俺があっちの世界へと意識を飛ばすと、リーズは丁度、扉の前でエルヴィを迎えたところのようだった。

その来訪をリーズは想定していなかったのか、少し戸惑ったような声を上げる。

「エルヴィ？」

「少し心配で様子を見に来たのですよ。それで、大丈夫なのですか？」

「うん」

エルヴィのその言葉に、リーズは彼女を部屋の中に招き入れながら頷いてみせた。

だがエルヴィは、そんなリーズの顔を覗き込んで、困ったように眉をひそめる。

「う～ん、やっぱり大丈夫そうじゃないので、今日は泊まっていきます」
「えっ」

エルヴィはそう言うと、リーズの後ろに回り込んで彼女を抱え込むように抱きしめた。
そしてリーズを慰めるべく、その頭を撫でようとする。
だがリーズは、そのエルヴィの行動に対して弱々しい力で抵抗した。

「エルヴィも……私に……優しすぎる」
「相手がリーズだからですよ。私はわりと身勝手で我が儘なのですよ？」
「……知ってる」
「あらら、手厳しいです。でも、たしかに私はリーズほど優しくないですね」

エルヴィがそう言って苦笑すると、リーズは困惑した声を上げた。

「私は……優しくなんか……」
「優しいですよ。でもだから、ちょっと心配です」

リーズの声を遮って、エルヴィは言葉を続ける。
その声にどこか沈んだものを感じ取って、リーズが沈黙した。

「自分の心に正直であれ」

その言葉にリーズが首を傾げると、エルヴィが懐かしむような声で、それを説明する。

「私の、恩人の言葉なのです。人が、人でいられる為の秘訣なのだそうですよ」

この後ろから抱きしめられている体勢のせいで、リーズの視界ではエルヴィの顔が見えない。

だが今は、なんとなくエルヴィの顔を見るべきではないように思った。

「人が本当に過酷な環境に置かれた時、真っ先に壊れる人は優しくて我慢する人なのです。優しい人は、色んな物を抱え込んで、それを外に吐き出しませんから。そして、気がついたら手遅れになってるんです……」

エルヴィのその声に、俺は悔恨のようなものを感じ取った。

もしかしたら、エルヴィはリーズを誰かと重ねているのかもしれない。

そんなことを、ふと思ってしまう。

エルヴィは、その悔恨を振り払うようにして、殊更明るい声を上げた。

「だからリーズも、つらい時は私に甘えて下さい。私はそれで、リーズを嫌いになったりしませんから」

「エルヴィ……」

エルヴィのその言葉を受けて、リーズは素直にエルヴィに体を預ける。

それによって、リーズは少しだけ元気を取り戻したようだった。

俺はそのことに安堵しつつも、リーズの傍にいられるエルヴィが羨ましくなる。
いくらリーズが落ち込んでいたり、苦しんでいたりしても、俺は彼女のようにリーズの傍には行けないのだ。
俺はそのことを思い知らされるようで、何だか少しだけリーズを遠くに感じてしまった。

しばらくして、余裕を取り戻したリーズは、特別試合のことをエルヴィに質問した。
アベルとの再会の後、リーズはすぐに寮に戻ってしまい、特別試合の説明を聞いていなかったのだ。

リーズのその質問に、エルヴィはリーズの体を抱きしめたまま応じる。

「明日は、Dランクのルドルフと、テレサという人が私達の相手になるそうです。Dランクといっても、今まで無敗続きらしいですよ」

Dランクまで無敗だということは、Gランクの時にあったはずの特別試合も勝利したということだ。その戦歴からして、通常のDランクの生徒よりも、遥かに難しい相手になるだろう。

リーズはそれに気を引き締めたようだったが、エルヴィの言葉はそこで終わらなかった。

「それで、アベルなのですが……」

エルヴィは、リーズがアベルのことで悩んでいたと思っていたらしく、リーズを気遣うような視線を向けてくる。

その視線に対して、リーズは彼女を安心させるように、頷いてみせた。

「エルヴィ、私は……大丈夫」

その言葉を受けて、エルヴィはまだ少し躊躇いつつも、それをリーズに伝える。

「……アベルは、Aランクの相手と特別試合を行うことになりました」

「えっ」

リーズはそのエルヴィの言葉に、戸惑った声を上げた。

いくら特別試合といっても、Aランクが相手になるのは異常事態なのだろう。

Dランクが相手になるリーズ達とは、扱いが随分と違っている。

だがリーズと俺は、その対戦相手の名前を聞いて、更に驚愕することになった。

「その相手は、エルザ・フォーレルです」

「……」

その事実に、リーズが沈黙する。

エルヴィはそれ以上何も言わなかったが、だいたいのことは俺でも察してしまった。

エルザ・フォーレルとは、今朝にリーズ達と出会った、リリスの友人を名乗っていた生徒のことだ。
彼女はカイムを殺されたものと考えており、その犯人を追い掛けていたように思う。

カイムを殺したアベルと、それを追うエルザ。
この組み合わせが、偶然のものだとは思えない。

俺はその試合に、何とも言えない嫌な予感を覚えた。

第三十一話

私が眠りにつくと、私の意識はトオルの世界へと渡っていく。
こっちの世界はもう真夜中であったのに、トオルのいる世界はまだ日没ぐらいの時間であった。

私は、自分が意識を繋げたことをトオルに伝えようと、彼に声を掛けようとする。
でもそれは、彼の視界に映るとある人物の姿を確認して、止めてしまった。

トオルの家の玄関先に、バイクと呼ばれる乗り物に跨ったアヤネがいたのである。

「ちょっと、付き合いーさ」
「また明日……じゃなかったのか？」
「ちょっと、伝え忘れてたことがあってな。……あと、ルキアとリンがおらへん時に話しておきたいこともあったし」

そう言って、アヤネは自分が頭に被っているヘルメットと同じものを、トオルに投げた。
トオルは戸惑いながらも、それを受け取ってアヤネのバイクという乗り物の後ろに座る。

私は、そこで何故かトオルに言葉を掛けられなくなってしまった。
ただ沈黙して、二人を傍観してしまう。

私の胸の奥で、何かがチクリと痛み、それは徐々に大きくなっていった。

やがてバイクが走りだし、トオルの視界からアヤネの顔が見えなくなる。
アヤネは時折、トオルと他愛もない言葉を交わしながらバイクを走らせていると、途中でふと何かを思い出したような声を上げた。

「そうそう、あの二人のこと、誤解せんといてや」
「？　何の話しだ？」
「ルキアとリンのことや。奇抜な格好しとったやろ？　どっかの暴走族みたいな」
「あぁ……」
「あれな、私のせいやねん」
「……？」
「まあ昔、うちの家族でちょっと色々あってな……。一時期、地元ではちょっと印象が悪くなったことがあってん」

アヤネの話によると、アヤネの父親は一度、身に覚えのない罪を着せられてしまったらしい。
結局、それは後になって冤罪であったことが証明されたのだが、それまでは世間の風当たりが強かったそうだ。

「まあ当然のように学校で敬遠されるようになって、どんどん孤立していってな。あの二人とは元々、特に仲が良かったんやけど、やっぱり私の傍にはおられへんくなって……」

アヤネとその家族は、世間から想像を絶するほどの嫌がらせをされたらしい。

それは学校だけでなく、アヤネの生活全てを浸食していった。
外を歩けば、事件のことをよく知りもしない野次馬から罵声を浴びせらる。
家の中にいても、ひっきりなしに電話が鳴り、様々なものを投げ込まれたそうだ。

そしてアヤネは、それに二人を巻き込んでしまうのを恐れて、彼女のほうから二人と離れてしまったらしい。

「んで私は私で、そのうち本当にグレてしまってな。色々、馬鹿なこともやってしまってん」

アヤネはその話を、悲壮感を感じさせない声色で続ける。
あくまで明るい調子で話すアヤネに、私は彼女の強さを感じた。

「それで一度、大怪我して入院してな。そしたら、あの二人があんな格好して見舞いに来たんよ」

目を丸くするアヤネに向かって、ルキアとリンは泣きながら謝ったそうだ。

アヤネが離れていった時、引き留められなくてごめんと。
一人にしてごめんと。

あの格好は、素行が悪くなってますます世間の風当たりが強くなっていたアヤネと、一緒にいるという意思表示のようなものだったらしい。

「二人とも育ちが良いのに、無理して悪ぶってな。今度は離れないって……うん、そん時はちょっと泣いたで？」

「……」

アヤネはそこで昔を思い出したのか、少し話を切る。
トオルはそれに沈黙して、ただアヤネの次の言葉を待った。

「そんなことがあって、今の透が周りに誤解されてる状況は、ちょっと昔の自分と被るねんな……まぁ、透は私と違って、グレたりする奴やないけどな」

私はその言葉を聞いて、アヤネとトオルがなぜ近しいように感じたのかを理解した。
彼女の言うとおり、二人とも何処か似ているところがあったのだ。

そしてそれは、アヤネから話を聞いたルキアとリンも同じことを思ったらしい。
だからこそ、今日はあの格好でトオルの家に来たのだ。
別にトオルは素行が悪いわけではないのだが、彼女達にとって悪い噂を乗り越える一種の通過儀礼になっているのだとか。

「だからな、私は透の誤解を解こうと思うねん」

その言葉と共に、アヤネはバイクを止めて、トオルを振り返った。

そして彼女は、悪戯を思いついた子供のような笑顔を、トオルに向ける。
トオルの視界は、その彼女の笑顔に固定されて逸らされることはなかった。

「勝負は文化祭や。怖い人から一気に愉快な人になろうや」

アヤネはそう言うと、目的地であったらしい背後の建築物を親指で指した。

「それは、ちょっと……」

そんなアヤネに、トオルは困惑しつつもどこか嬉しそうな声を上げる。

私はそこで、胸の痛みに耐えられなくなり、逃げ出したくなった。でも私は、私が目を覚まさない限りトオルとの繋がりは切れない。距離が近づいていくように感じる二人の関係を、私はただ見守ることしかできなかった。

第三十二話

絢音の目的地は、俺の通っている高校であった。

今日は休日である上に、もう完全下校時刻が近いというのに、学校内にはまだ沢山の生徒達が残っている。

少し予定が遅れているのか、休日にまで登校して文化祭の準備をしている生徒達が散在しており、むしろ平日よりも校内が騒然としていた。

その中に同じクラスの生徒も見掛けて、俺は何とも言えない寂しさを感じてしまう。

そんな俺の視線に気がついて、絢音が声を掛けてきた。

「もしかして、クラスメイト？」

「……まあな」

「あ～、それは何というか……」

俺が頷くと、絢音は気まずそうに視線を泳がせる。

どうやら自分のクラスも出し物の準備が遅れていたらしく、自分以外のクラスメイトは休日にも登校していたようであった。

俺がそれを知らなかったのは、クラスメイトに事前に何も知らされていなかったからだ。

その事実に、俺は今の自分のクラスでの立ち位置を思い知らされてしまう。

だが俺がそれに気を沈ませる前に、絢音の平手が背中を叩いた。

「まぁ、今はしょうがないで。来年も文化祭はあるねんし、今年は

我慢や」

そう言って、絢音は俺に笑顔を向ける。

「それに来年からは、逆に引っ張りだこになる予定なんや。だから今年は、例の計画以外は観客側で楽しめばええねん。むしろ、女の子三人も引き連れて遊んでたら、羨ましがられると思うで？」

そして今度は、横腹を肘でつついてきた。

俺がそれに苦笑すると、絢音は不満そうに頬を膨らませる。

「あ、私らやと不満って顔やな？」

「え、いや……そういうわけでは……」

「あはは、冗談やって」

戸惑う俺に、絢音はまた笑顔を見せる。

彼女のその目まぐるしく移ろう表情に、俺は絢音の人柄が少し分かったような気がした。

絢音という少女は、まさに天真爛漫という言葉を体現したような人間なのである。

それでいて、彼女は決して世間の残酷さを知らないわけではなく、それでも自由奔放な心を失っていない。

いや、むしろこの世の不条理を肌で感じたからこそ、彼女はそうあろうとしている節があるように俺は感じた。

まさに、あっちの世界でエルヴィが言っていた「自分の心に正直であれ」という言葉を忠実に再現しているような、そんな生き方。

「自分に正直に生きるということは、最も望ましい生き方である」というのは、G・フロイトの言葉だったか。
近年でもR・カールソンとかいう人が似たようなことを言っていたような気がする。
要するにその生き方は、人にとって最も心の負担が少ない生き方なのだろう。
だからこそ、絢音は重苦しい過去があっても、それに囚われることがない。

俺はそんな絢音を見ていると、同じように世の中の不条理に翻弄されて、それに囚われてしまっているリーズのことを思い浮かべてしまった。

最近は少しずつ和らいでいるように感じるものの、リーズの未だ何かに焦っているかのような余裕のなさは取れていない。
それは彼女の目的を思えば当然のことなのかもしれないが、彼女自身はそれで大丈夫なのだろうか？

あと一つ、彼女を追い詰めるような何かがあれば、彼女の心は擦り切れてしまうような気がするのだ。
それぐらい、危ういものがリーズにはあるように思う。

俺はそんなことを考えながら、絢音の先導に従って校内を歩いていた。
そこでふと、そろそろリーズがこっちの世界と意識を繋げていないとおかしいことに気がつく。
あっちの時間のことを考えると、もうリーズはとっくに眠ってい

る時間ではないだろうか？

俺は、試しにリーズへと呼び掛けてみた。

『リーズ？　もうこっちに来てるのか？』

『……うん』

何で声を掛けてくれなかったんだろう？

という疑問は、その力のない返事によって、リーズへの心配に塗変わってしまう。

『どうした？　何かあったのか？』

『……』

その意味ありげなリーズの沈黙に、俺は思わず足を止めてしまった。

そんな俺の様子に気がついて、絢音が声を掛けてくる。

「どうしたんや？」

「いや、何かリーズの様子が少しおかしいような気がしてな……」

「……ふむ？」

俺の言葉を聞いて、絢音は何やら考え込むようにして、顎に手を当てた。

「そういえば、私らと魔王にするお願い事の話をしてから少し様子がおかしかったやんな？」

「……」

どうやら絢音も、自分と同じようにリーズの異変に勘づいていた

らしい。
それに押し黙った俺を見て、絢音は何かとびきりの悪戯を思いついた子供のような表情を浮かべた。
「なんかこう、女の勘にビシビシきたで」
「ん？」
その呟かれた言葉が聞き取れず、俺は首を傾げる。
だが絢音はそれに構わず、言葉を続けた。
「リーズちゃんとは、互いの視界を共有してるんやった？」
何か企んでいるかのような表情はそのままに、絢音は確認するような質問をしてくる。
俺は頭に疑問符を浮かべながらも、それに答えていった。
「ああ」
「それはつまり、透の視界以外は何も見えへんってことやんな？」
「そうなる」
「なら、大丈夫やな？」
絢音はそう言うと、唐突に俺の手を引いて近くの空き教室へと入り込んだ。
「お、おい？」
「ここなら、誰にも見られへんで？」
「へ？」
教室の扉を閉めるなり、絢音の両腕が俺の首に回されるのを感じて、困惑した声を上げてしまう。

それでいて俺は、少し潤んだような気がする絢音の瞳から、目が離せなくなった。

その絢音の唇が、ゆっくりとこちらの顔に近づいてくるをの見て、完全に硬直してしまう。

誰に説明されずとも、これから絢音が何をしようとしているのか、俺は理解した。

この手の経験が全くない俺は、その時点で頭の中が真っ白になってしまう。

俺が何も考えられないでいる内にも、徐々に彼女の唇は近づいてきて――

しかしそれは、俺の唇と重ねられる寸前で止まった。

『――――っ』

絢音は俺に顔を近づけたまま、少し間を置いてからその唇を動かす。

「リーズちゃん、私の声は聞こえてるやんな？」

『……』

「聞きたいことがあったら、目が覚めた時に、私のスカイプに連絡してや？」

絢音はそれだけを言うと、俺から体を離した。

思考が混乱して呆然としていた俺に、絢音が苦笑する。

「透？　大丈夫か？」

「……あ、あぁ」

俺が我に返ると、絢音が苦笑したまま肩に手を置いた。

「透は、今日は私が連絡するまで寝るの禁止や」

「……え？」

『……トオル、ごめん』

「えぇ？」

いつの間にかリーズと絢音の間で決まっていたらしい事柄に、俺はただ首を傾げるしかなかった。

第三十三話

いつもよりも少し早めの朝。
私は目を覚ますと、直ぐ様ギャラクシーのスカイプを起動しようとした。

だがそこで、トオルの視界を通して見たアヤネの行動を思い出し、私は躊躇してしまう。
私は、アヤネに連絡して何を聞こうというのだろうか？

トオルの視界では、その詳細が見えたわけではない。
でもあれは、口づけをしていたのだということぐらい、私にも分かる。

そしてそのことで、胸の中でかつてない痛みを感じてから、私はやっとこの気持ちが何であるかを理解した。

きっと私は、トオルのことが――

それを自覚してしまうと、胸の痛みがますます強くなる。
アヤネの口から、はっきりあの時のことを聞くのが怖くなってしまった。

でも結局は、私はスカイプを起動してアヤネへと繋げてしまう。
するとギャラクシーのスピーカーから、アヤネの快活な声が響いた。

「こんばんは～。あ、そっちやとおはようになるんかな？」
「……」

アヤネは私の顔を見ると、悪戯が成功して喜ぶ子供のような笑顔を浮かべる。

「キスしたかと思った？」

「……」

「安心してええで。寸止めや」

「え？」

アヤネの言葉に戸惑いつつも、私は胸の痛みが引いていくのを感じた。

どこかホッとしたような表情をしていたのだろう。

アヤネがそんな私の顔を見て、何らかの確信を得たようだった。

そしてそれを、アヤネはそのまま言葉にする。

「透のこと、好きやろ？」

その「好き」という単語に反応して、私は自分の頬が上気するのを感じた。

私の中で溢れていた気持ちに名が与えられて、その気持ちを吐き出すように声にしたくなる。

でも私はそれをぐっと堪えて、代わりにアヤネへの仕返しにとばかりに、薄々勘づいていた事柄を口にした。

「でもアヤネも……私と同じ」

「え？　いや、私は――」

「なんとなく……分かる」

「いやいや、私と透って、まだ出会ってまだ数日やで？」

断言する私に、アヤネがそう言って苦笑する。
でも私の次の言葉で、その苦笑は驚愕へと変化した。
「トオルはそう。でもアヤネは……違うはず」
「……何で分かったん？」
アヤネはあっさりとそれを認めつつも、首を傾げた。
だが別に、大した理由があったわけではない。
単にアヤネの過去の話を聞いた時、それならもっと以前からトオルに注目していたのではないかと思ったのだ。
初対面であるはずのトオルの名前を知っていたのだし、トオルの噂は聞いていたはずなのだから。
そしてアヤネは、確かにこっちの世界や魔法にも興味があるようだったが、それよりもトオル自身に対する興味のほうが強いように感じたのだ。
実際に、アヤネはこっちの世界のことよりも、トオルを優先していたように思う。
でもそれらは、いずれも根拠というには乏しい。
だからこれは――
「私の勘」
「あはははは」
私の返答に、アヤネが吹き出すようにして笑った。
「まぁでも、実は自分の気持ちに気がついたのはキス未遂の時やねんけどな……」

アヤネは照れくさそうに指で頬を掻きながら、はにかんだような笑顔を浮かべて言葉を続ける。

「自分でも意外なほど、全然嫌な気がせえへんくてな。寸止めで終わらせるか、ちょっと迷ったで？」

「……」

私はあの時のことを思い出し、途轍もなくアヤネが羨ましくなった。

キスは未遂だったとはいえ、彼女はトオルと同じ世界にいて、直に触れ合うことができるのだ。

私なら、きっとそれだけでも満足してしまう。

私も、トオルの傍に行きたい。

強くそう思ってしまう。

そしてそれが叶う手段が一つだけあるのだが、それだけは絶対に駄目だった。

だから私は、胸が張り裂けそうな思いで、それを言葉にする。

「トオルも……アヤネなら……」

「ん～？　私はむしろ、透はリーズちゃんに――」

「やめて」

期せずして語気が強くなってしまい、アヤネが戸惑った様子を見せた。

「リーズちゃん？」

「私は……トオルが好き……」

言葉にしてみて、その深さを私は自覚する。

世界で誰よりも好き。

多分、アヤネに負けないぐらい好き。

たとえ心話でも、気持ちを伝えきれないほど好き。

その声を聞くだけでも、これまでの人生で一番幸せなぐらい好き。

この島に来るときに見た海の広さよりも、雲一つない青空の高さよりも、夜に見上げる星の数よりも好き。

もしこの想いを告げて、トオルの口から拒絶の言葉が出たら、私はもう立ち直れないかもしれない。

でも、もしトオルが私の気持ちに応えてくれたとしたら？

トオルが私に、会いたいと言ってくれたら？

トオルも私と同じ気持ちだとしたら？

きっと私は、我慢できなくなる。

もしもいつか魔王の元へと辿り着けたとしても、私は両親のことを差し置いてトオルの元へ行くことを選択してしまうかもしれない。

もしそんなことになったら――

「私は、私を……許せなくなる」

その選択肢を知った時、私は少し迷うだけでも、罪悪感に押し潰されそうになった。

それだけは、絶対に許されないのだ。

私は、私が産まれたことで奪ってしまった幸せを、両親に返す義務がある。

私の浅はかな行動のせいで、不幸に落とし込んでしまった両親を、救う使命がある。

私がもしトオルに想いを告げてしまえば、どう転んでも私は耐えられそうにないのだ。

だから私は、このトオルへの想いを心の奥へと押し込める決意をした。

もう迷うことがないように、自分の目的だけを強く心に刻む。

そのことで、私は少しだけ自分の心が軽くなった気がした。

これなら、私はまだ大丈夫なはず……

「リーズちゃん……」

でもアヤネは、そんな私の瞳を見て不安そうな声を上げていた。

第三十四話

その連絡は、思っていたよりも早く来た。
絢音から俺のパソコンへと送信されたメッセージを開くのと同時に、リーズが心話を送ってくる。

『トオル、終わった』
『お、おう』
『……？』

メッセージの中身をリーズに見られてしまい、俺は思わず動揺した声を上げてしまった。
それを誤魔化すように、俺は慌てて言葉を続ける。

『もうすぐ寝るから、後でそっちに繋がると思う』
『分かった』

リーズは特に訝しんだ様子もなく、繋がりを切ったようだ。
俺はそのことに、胸を撫で下ろした。
リーズはこっちの世界の文字が読めないので、メッセージの内容が分からなかったのだろう。
だからこそ、絢音はこれで連絡してきたのだと気がついた。

そのインスタントメッセンジャーと呼ばれるアプリは、リアルタイムで相手と短いメッセージのやりとりができる機能がある。
それは声ではなく、画面に表示される文字でのやりとりができるので、リーズには理解できないはずだった。

俺は小さく嘆息すると、改めてそのメッセージを確認する。

アヤネ　＜ちゃんと今の話は聞いてたやんな？　透の気持ちを聞かせて欲しい

俺はそれに、先程のリーズと絢音の会話を思い出して、耳の端まで熱くなるのを感じた。

実はあらかじめ、今回の話をリーズに内緒で見ておくように、絢音から指示されていたのだ。

まさかあんな話になるとは思ってもおらず、リーズの気持ちを勝手に聞いてしまったことに、俺は罪悪感を覚えてしまう。

そのせいか、絢音の質問には答えずに、先に苦言のような返事をしてしまった。

トオル　＜あまり、こういうのは感心しないぞ
アヤネ　＜ん～、そんなこと言うとる場合やないと思うで？
トオル　＜どういうことだ？
アヤネ　＜リーズちゃんの事情は詳しく知らへんけど、多分どうしても叶えなあかん願いがあるんやろ？　透と会うっていう願いを諦めてしまうぐらいの
トオル＜ああ

絢音はリーズの過去を知っているわけではないが、どうやら彼女との話で思うところがあったらしい。

俺がそれを肯定すると、少し間を置いてからメッセージが返ってきた。

アヤネ　＜まず魔王と謁見できるかも分からへんというのもあるし、さらには気に入られるかどうかも分からへん。でも何より心配なのが、その魔王ってのが胡散臭すぎることや

トオル　＜胡散臭い？

俺は首を傾げつつも、そういえばリンも同じようなことを言っていたのを思い出した。

アヤネ　＜魔王が一方的に相手の願いを叶えて終わりなわけないやん。相手に施しを与えるなら、見返りを求めるはずやで？　その代償が何なのか、全く知らされてへん

考えて見れば、それは当然のことだった。

リーズの住む世界があまりにファンタジーなので、魔王のことを漠然と超常的な存在としか考えておらず、失念していたのだ。

魔王に誰かを気に入るという人格があるなら、願いを叶えるのに何らかの見返りを要求されてもおかしくはない。

それに気がついて、急に俺の中に何とも言えない不安が広がった。

アヤネ　＜私らはその魔王がどんな奴なんかも知らへん。つまり、何を求められるかも分からへん。それはリーズちゃんの願い次第ではめちゃくちゃ危険やで？　今のリーズちゃんの様子やと、どんな代償を払ってもその願いを叶えようとするやろうしな

絢音の言う通りだろう。

リーズは、両親を助けるためなら自分が犠牲になるのを厭わない。

例えその命を要求されたとしても、リーズなら簡単に頷いてしまう気がした。

アヤネ　＜だからな、これはもう透がリーズちゃんを口説き落とすしかないねん

トオル　＜何でそうなる？

アヤネ　＜いざという時、リーズちゃんを引き留められる鎖が必要やってことや。だから、透がその鎖になったらええ。リーズちゃんのこと好きなんやろう？

俺はその問いに、まともに答えられなかった。
情けないが、話が急すぎて心の整理が全然ついてない。

だが絢音は、そんな俺を置いて話を続けた。

アヤネ　＜とりあえず、今ならリーズちゃんを口説くのは簡単やで？　多分、どんな言葉でも過剰に響くと思うから
トオル　＜むしろ、意固地になってる今のほうが難しいんじゃないのか？
アヤネ　＜何かを我慢しようって時はな、実はむしろそれを強く意識してしまっとるもんや。ダイエットの時に、我慢してる甘味のことばかり考えたりする感じやな。
トオル　＜すまん、その例えは分かりづらい
アヤネ　＜まぁ、とりあえずさっさと口説いてこいヘタレ

とうとうヘタレと言われてしまった。
たしかにスッパリ即断できないのは情けないが、でもやっぱり少し心の整理の時間が欲しい。
何故なら、俺が知ってしまったのはリーズの気持ちだけではないのだ。

トオル　＜お前はそれでいいのかよ？
アヤネ　＜勘違いせんといてや？　私はまだ諦めてへんで？
トオル　＜え？
アヤネ　＜まあそっちの話がどう落ち着くか分からんけど、私から言わせたらまだ私のほうが有利なぐらいやわ。異世界っていう距離

はそれぐらい遠いで

絢音が言う距離というのは、少しだけ分かる気がした。
たしかにリーズを遠くに感じてしまう時というのはあるのだ。
でもそれが、それ程の障害になるという実感は、まだ俺にはなかった。

アヤネ　＜とにかく、頑張り。応援というのも複雑な気分やけどなトオル　＜色々ありがとうな
アヤネ　＜このお礼は、デート一回分で許したるわ。ほな、また明日学校でな～！　愛しとるでトオル

その発言に返事を返す前に、絢音がさっさと退室してしまう。
背中を押したいのか迷わせたいのか分からない絢音の言葉に、俺は思わず頭を抱えた。

第三十五話

絢音との話を終えると、私はまずエルヴィを起こすことにした。
珍しく今日は私のほうが早起きだったのだが、それは私の起きる時間が早かったのではなく、単にエルヴィが寝坊しているだけである。
このまま放置しておくと、私達は確実に遅刻してしまうだろう。
昨日、エルヴィは私を心配して泊まりに来てくれたのだが、それで寝る時間をこっちに合わせたせいで、いつもより睡眠時間が短くなってしまったらしい。
私がエルヴィを起こすと、彼女は眠そうに瞼を擦った。

「おはようございますリーズ……今朝は早いのですね」
「エルヴィが……遅かっただけ」
「ん～？」

彼女はまだ目が覚めきっていないのか、寝起きの乱れた服装のまま、大きな欠伸をする。
エルヴィの国の風習なのか、彼女の寝巻きは特に薄着なので、今は酷く扇情的な姿になっていた。

その胸元を大きくはだけた、あられもない姿を視界に収めて、私は慌てて視線を逸らす。
今トオルがこっちの世界と繋がったら、彼はそのエルヴィの姿を見てしまうのだ。
それは流石にエルヴィに悪い気がするし、彼がそれを見てしまうのもなんとなく――

とそこで、私は頭を横に振った。

ついさっき、私は彼への想いを押し殺す決心をしたばかりではないか。

そう気を引き締めようとするも、そこでふと気がつく。

トオルに対して私は、これから一体どんな態度を取ればいいのだろうか？

私がギャラクシーを使役する限り、トオルはこっちへと意識を繋げてくる。

だからまず、逃げるという選択肢がない。

これからもトオルとは、多くの時間を共にすることになるだろう。

なので私はトオルへの想いを押し殺したまま、彼と接する必要があるのだが……

でも私は、彼のことを好きでない自分がまるで想像できなかった。

そもそも、私はいつからトオルのことが好きだったのだろう？

私はそれを探ろうと、トオルとの出会いを思い出してみた。

その時に、彼に私の弱音を聞いてもらったことを思い出して、胸の中から熱い何かがこみ上げてくるのを感じる。

私は咄嗟にそれを抑え込むべく、手近にあった何かを引き寄せて抱きしめた。

腕に力を込めると、それが戸惑ったような声を上げる。

「……キュ？」

エルヴィの使い魔であるモクが、私の唐突な行動に首を傾げた。

自分の使い魔が急に私に抱き寄せられたことで、エルヴィも完全

に目を覚ましたらしい。
その目を丸くして、私の顔を覗き込んできた。
「どうしましたかリーズ？」
「……なんでもない」
「そうですか？　何だか顔が赤いですよ？」
「……」
顔が熱くなっているのは自覚していたので、思わず黙り込んでしまう。
先程の決心とは裏腹に、何だかトオルのことばかり考えている自分に歯噛みした。
とにかく何か別のことを考えて彼を忘れようと、私は今日ある特別試合のことを考えようとする。
だがそこでタイミング悪く、トオルの声が頭の中で響いた。
『よ、よう。おはようリーズ』
『お、おはよう』
思わず、言葉がぎこちなくなってしまう。
胸の中で高鳴る鼓動を感じて、私はモクを抱く腕に力を加えた。
「ギュ？　キュウ……」
モクが腕の中で奇妙な声を上げる。
何だか少し苦しんでいるような気がするが、私にそれを気遣う余裕はなかった。
私は、今までどんな風に彼と接していただろう？

それが分からなくなって、私は大いに焦ってしまう。
あまり変な反応をすると、もしかして内心を悟られるのではないか？
という恐れが頭の中で生まれ、何も声を発することができなくなってしまった。

思えばこんな風に人を好きになったのは初めてだったし、そもそも私は学院に来るまで友達付き合いさえ全くなかったのだ。
対人関係の処世術に関しては、私は誰よりも拙いのである。

私がトオルに何と声を掛ければいいのか迷っている内に、彼の方から申し訳なさそうな声を上げた。

『えっと……実はちょっと、リーズに謝らなくちゃならないことがあってだな……』
『え？』
『その……さっきのことなんだが……』

何かを言い淀む彼に、私は首を傾げる。
しばらくそのまま逡巡した後、トオルは思いきってその言葉を言い放った。

『すまん！　さっきの絢音とお前の話、俺も聞いてた』
『……――っ！』

私はその言葉の意味を理解するのに、少し時間が掛かってしまう。
遅れてやってきた衝撃に、私はさらに顔が上気するのを感じた。

胸の鼓動が強くなりすぎて、耳の端からさえトクントクンと音が聞こえてくる。

絢音との会話の時に自分が言った言葉を思い出して、私は思わず腕に思いっきり力を込めてから、それに顔を埋めた。

「ギキュ！？　キュゥゥ」

モクが何やらじたばたと藻掻き、妙な鳴き声を上げる。

でも今の私は心話の方に意識が集中してしまって、それが耳に入っていなかった。

『本当にすまん。実はあらかじめ絢音に……ってそれは言い訳になるか』

『……私の言ったことも、全部聞いた？』

『ああ。それでだな――』

私はトオルが続けようとしている言葉から、耳を塞ぎたくなる衝動に駆られる。

でも彼との繋がりから送られてくる心話は、そんなことでは逃げられないのだ。

『俺も、お前と同じ気持ちだ』

『え？』

「ギ、ギュウウウウウウウッッ！」

「リ、リーズ？　モクが何かしたのですか？　お仕置きなら、もうちょっとソフトに……」

ギリギリという音と共に、モクが悲鳴を上げる。

でも、今の私はそれどころじゃなかった。

『俺はお前のことが好きだ』
『トオル……』

その彼の言葉が染み渡り、私は危うく気を失ってしまいそうなほど、全身が歓喜に包まれる。
と同時に、強い寂しさに襲われて泣きそうになった。

『……トオルは狡い。私の迷いも知っていて、そういうことを言う』
『すまん』
『でも、嬉しい』

そんな言葉では足りないぐらの感情が、私の中で荒れ狂う。
強い多幸感と寂寥感に支配されて、もう私はどうすればいいのか分からなくなってしまった。

『トオル……私は、どうすればいい？』

私はまた、トオルに縋ってしまう。

でも私がこんなにも弱くなったのも、きっとトオルのせいなのだ。
彼が優しすぎるせいで、私は彼に甘えるようになってしまった。
共に歩むということを知ってしまって、私は一人で歩めなくなってしまった。
結局、私が彼のことを振り切るなんて、元から無理だったのだ。

『俺も、お前と会いたい』
『でも私は……』
『だから、一緒に探そうぜ』
『え？』

『魔王に頼らなくたって、きっと何か方法があると思うぞ？　何せ召喚獣が住む世界へは狭間の扉から行けるんだ。俺のスマフォが召喚できるなら、こっちの世界に繋がるような扉があったとしてもおかしくはないだろ』
『……』
『それに召喚魔法が存在するなら、もしかしたら世界を渡るような魔法も存在するかもしれないだろ？』

私はその言葉を聞いて、自分が盲目になっていたことに気がついた。

あくまで私は、まだ学院の一年生でしかないのだ。
まだ魔法について知らない知識が山ほどあるだろう。

そもそも、未だ何故トオルの世界の携帯電話を召喚できたのかさえ、私は理解できていないのである。
召喚魔法のことや、狭間の世界に関することを調べていけば、もしかしたら何かしら光明が見えるかもしれないと私は思った。

私の中で、Aランクになるという目標とは別にもう一つ、新たな目的ができる。
今まで戦いに関することばかり重点的に勉強してきたが、今日からはもっと視野を広げていく必要があった。

『うん、頑張ってみる』
『あ～、でもほどほどにな？　お前が体を壊したら、俺が困る』
『……うん』

大切な人が悲しまない為に、自分の行動に制限が掛かる。
私にとって、こんな感覚も初めてだった。

でもその束縛が、何とも言えず心地がいい。

『……それと、そろそろモク離してやれよ？』

私はそこでやっと、自分の腕の中で青くなってぐったりとしているモクの姿に気がついた。

第三十五話（後書き）

次回あたりから、やっとランク戦に入れそうです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3904y/

使い魔はGALAXY

2011年12月18日07時45分発行